

263  
104

野澤正浩  
友納友次郎  
共著 卷七

修正尋常小學讀本教授細案

東京日黒書店發兌



始





263<sub>2</sub>

104

野澤正浩  
友納友次郎  
共著 卷七

修正尋常小學讀本教授細案

東京目黒書店發兌



263<sub>2</sub>-104



野澤正浩  
友納友次郎  
共著  
卷七

修正尋常小學讀本教授細案

東京目黒書店發兌

大正  
10 6.30  
内交



修正尋常小學讀本教授細案卷七

目次

第一	春	一
第二	東京見物	一四
第三	塙保己一 <small>ハナベキイチ</small>	三
第四	蠶	四
第五	ちゑだめし	五
第六	友だちへの手紙	五
第七	手	七
第八	お手玉	七
第九	藤原保昌 <small>フジワラタモキ</small>	八
第十	豆の一ぞく	九
第十一	材木	一〇

目次

一

一〇



第十二	ムグラモチ	.....	二一五
第十三	山内一豊の妻	.....	二二六
第十四	さみだれ	.....	二四〇
第十五	日本紙と西洋紙	.....	二四六
第十六	郵便の話	.....	二五九
第十七	木ノ高サ	.....	二六九
第十八	姉と妹の手紙	.....	二七六
第十九	楠木正行(一)	.....	二八三
第二十	楠木正行(二)	.....	二八三
第二十一	家の紋	.....	二〇一
第二十二	水と體	.....	二〇九
第二十三	焼物トヌリ物	.....	二二六
第二十四	くものす	.....	二二六
第二十五	ひなかの四季	.....	二三五
第二十六	夏休	.....	二四四

第二十七	口上代りの手紙	.....	二五一
第二十八	月見	.....	二五七
第二十九	航海の話	.....	二六七
第三十	大阪市	.....	二八三
第三十一	貨幣	.....	二九三
第三十二	犬	.....	三〇〇
第三十三	潛水艦	.....	三三三
第三十四	廣瀬中佐	.....	三三一
第三十五	廣瀬中佐の歌	.....	三三三

目次終

目次



### 本書の特色

本書は修正尋常小學讀本卷七を教授するに當り、教師の參考に供せんがために編纂したものである。

本書は先づ教材の要旨を明かにし、次に教材を記載し、次に教材の區分を適切に定め、次に教具を記し、次に教法の下に、教材の取扱法を、其の性質・要求に應じて國語教授の思潮に順ひて、最も、輕健に詳述し、また毎時に於ける教授の實際即ち教授案を詳記して、専ら讀本教授の本領發揮に努めた。最後に備考として教材の内容に關し、最も必要と認めるものを掲載して、教授者の參考に提供した。多少でも貢獻する所あれば甚だ幸ひとする所である。

## 修正尋常小學讀本教授細案 卷七

野澤正治 友納友次郎 共著

### 第一春



形式上では新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法其他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では三春の美しい楽しい平和な光景や生々とした氣分を味はさせ、傍ら自然を愛好する心情を養ふを以て要旨とする。

### 教材

#### 文字

「歌」——形聲文字である。偏をコといひ音符である。傍は「氣息」の義を示す。音は「カ」で、訓は「ウタ」、「ウタフ」等である。



「芽」——會意形聲文字である。草木のメが牙の如くもえでる義である。故に草冠と牙とを合して作つた。牙はまた音符である。漢音は「ガ」、吳音は「ゲ」で、訓は「メ」である。

語句

「梅の花」梅は薔薇科に屬する木。花は早春に開き、香氣高く、色には白・紅など種々ある。多く觀賞用として庭園に栽培する。「うぐひす」形體は目白よりは稍々大きい。體の色は背部は緑褐色で、腹部は灰白色である。嘴は小さく、聲は極めて美しい。故に人家に愛育せられる。「暖い風が東から吹いて来る」こゝは暖い春の風がそよ／＼と吹いてゐるの意味にして知らせる。「東」云々は風の吹く方向を知らせる意味でなく、「東風」をかく分けてかいたものと見るがよい。「山のすそ」山のふもとのこと。「谷間」タニマ」とよませる。「櫻」薔薇科に屬する木。花は五瓣の淡紅色で艶麗である。我が國の名花で、庭園・公園・堤防等に植ゑて觀賞に供する。一般に中春に咲き春の天地を飾る。「長い冬の間眠つてゐた草や木が一度に目をさまして」草や木が新しい若芽をふいたことをかく擬人的に言つたのである。「農夫はしづかに畠をうつ」こゝは農夫が呑氣に畠を耕してゐるの意味でなく、麗かな春光に浴びて平和に働いて居る姿を鑑賞してかく言つたのである。「小鳥はすずを作るのにいそがしい」こゝにいふ小鳥は、これといつて指定せんでもよい。彼等が自分の境地に於て見てゐるもの(雀・燕・百舌等)を自由に想起させたらよい。「すべて物が」こゝでは

「草木は言ふ迄もなく天地間の萬物がみな悉く」の意である。「せいーばい美しい色を見せてゐる」こゝはレンゲサウヤタンポポやスマイレなどが互に嬋妍の美を競うて咲いてゐる様子をかく巧妙にいつたのである。「春雨」「ハルサメ」とよませる。春の暖い時にふる柔かな思出の多い雨である。「小川」「ヲガハ」と讀ませる。細き流の川をいふ。

文章

本課は山村に於ける三春の景趣を記述した美しい文章である。即ち第一節は山里の初春に於ける景趣を、第二節は其の中春に於ける景趣を、第三・四節は中春から晩春にかけて其の景趣を記述したのである。

本文は作者が三春に於ける自己の經驗即ち觀察・所感といふものを春逝く最後の日に記述したのである。併し其の筆致は現寫法によつて三春の推移に従つて記述したことになつて居る。

本文は言ふ迄もなく春について説明したのでなく、三春に於ける自然の美を描寫したものである。故に理解に訴ふべき文章でなく、感味さすべき文章である。即ち第一節に於ては

- 1、早春になつて庭の梅が一輪・二輪と綻び初めると、例の谷間の笹の屋の主人がやつて来て、玲瓏たる特有の美音を弄しながら枝から枝へと飛んでゐる有様。
- 2、春の日は一日々々に永くなり、暖い柔かな風がそよ／＼と草上に梢上に吹き渡つてゐる有



様。

3、朝起きて向ふを眺めると、春山は静かにまだ霞の裏に眠つてゐる如く、また谷間の彼處にも此處にも、嚴冬の名残の白雪が残つてゐて、春に尙料峭味のあること等。

をよく感味させる。第二節に於ては、

1、梅の花が散つて春正に酣な時、我が民族心の象徴たる櫻の花が爛漫と咲き亂れて、都の人も鄙の人も花下に集つて其の純真な美を賞する有様。

2、永い冬の間、地下に眠つてゐた草も、地上に休んでゐた木も、麗かな春の光に誘はれて生とした若葉を吹き、そこに熾に春の生命が燃え立つてゐること。

3、可愛い蝶々は春光輝く野草の上に、可愛い蜂は香に満つる花の間に飛んで楽しく遊んでゐる様子。

4、農夫は彼方・此方の田畑に、何等の野心もなく純真な心で、のんびりと働いてゐる有様。

5、小鳥は枯草をくはへ苔を運んで、やがて可愛いひよこを育てるにあつべき巢をつくるのに忙しい有様等。

をよく感味させる。第三節に於ては、

1、蒲公英は黄に、蓮華は紅に、堇は紫に、互に天真の美を發揮して野邊を飾つてゐること。

2、草も木も、鳥も蟲も、すべて天地の間に存する萬物が、冬期の死相から復活して、炎々と春の生命に燃えてゐること等。

をよく感味させる。第四節に於ては、

1、思ひ出多き春雨がしめやかに降つてゐる。晴れた後の田の面の水は春の光に一面に白く光つてゐる有様。

2、小川の水は柔かな姿の内にも、生々とした聲を立て、春と共に流れて行く有様等。をよく感味さすべきである。

叙景文に於ては、取材といふことが甚だ大切な要件である。即ち春ならば春をあらはすのに最も適した材料を捉へなければならぬ。秋ならば秋をあらはすのに最も適した材料を捉へなければならぬ。今本文についてさうした方面を考へて見ると、第一節に於ては

梅と鶯 春の日永 春の山——霞に包まれた静かな山。白雪の残れる料峭味のある山

を捉へて早春の景趣や氣分をよくあらはし、第二節に於ては

櫻の花 草木の若葉 蜂蝶 農夫の悠暢な活動 小鳥の巢の營み

等を捉へて中春の景趣をよくあらはし、第三・四節に於ては、

蒲公英 蓮華 堇 萬物が生々と復活した相



等を捉へて、また

春雨 雨後の田及び小川の相

等を捉へて、中春・晩春の景趣を如實に描寫してある。即ち春の景趣をあらはすとして最も適切な材料が捉へられてある。また取材の範圍に於てもかう山里に限つた如くあることは中々によい。それは境地を限つて書いた文章にはその境地に即した生命が躍動してゐるからである。只本文に於て

「梅の若葉が出る頃は櫻の花盛である。長い冬の間眠つてゐた草や木が、一度に目をさまして、勢よく若芽をふいてゐる。」

に於て、

「梅の若葉が出る頃は櫻の花盛である。」

の文句は説明的で、次の章句と何だか釣合がとれない。だから

「梅は若葉を出し櫻は今花盛である。」

としてそこに描寫上の釣合を保つて行きたい。また

「すべての物が生きかへつたやうに思はれる。れんげさうや、たんぼぼや、すみれのやうな小さい花も、せい一ばい美しい色を見せてゐる。」

とあるが、その初めにある。

「すべての物が生きかへつたやうに思はれる。」

の章句は此處に置く章句ではない。即ち適者をして適所を得させてゐない。其の他語句に於て今少し洗練を経たいものがある。等はどうかと思ふ點である。

### 區分

第一時 全文(形式上に重きを置いて)を授く。

第二時 全文(内容上に重きを置いて)を授く。

第三時 全文の復習及び應用。

### 教具

本課の内容を繪にした掛圖等。

### 教法

#### 第一時

▽全文を授く(形式に重きを置いて)

#### 一、學習心の喚起

目的を告げて學習せんとする動機を喚び起す。



二、通讀

全文を自由に一讀させる。

三、質疑應答

新文字及び主要語句につき、彼等の質義に應答し、また教師より主要の語句語法等につき問答する。

四、讀方檢閲

一兒童を指名して讀ましめて其の誤を正し、次に各自をして自由に二・三回讀まさせる。(此の際劣等生を指導する)

五、内容問答

内容につき問答して十分感味させる。(兒童の經驗及び掛圖等とも交渉して)

六、讀方練習

意味をとりながら讀まさせる——自由にまた指名して。

七、漢字等の書取

主要の漢字及び假名遣につき口唱し、各自をして書取らさせる。

第二時

▽全文を授く(内容の鑑賞を主にして)

一、復習

前時に授けた所を形式上及び内容上に互つて復習する。

1、各節を指名して讀ましめる。

2、各節に於ける主要の語句、語法等につき問答する。

二、誦讀

各自をして十分意味を意識しながら自由に一・二回讀ませる。

三、内容玩味

兒童の經驗及び掛圖等と交渉して、また教師の補説と相俟つて十分内容を感味させる。

1、第一節に於ける初春の景趣につき。

2、第二節に於ける仲春の景趣につき。

3、第三節に於ける仲春・晩春の景趣につき。

〔注意〕鑑賞すべき要點については教材の所の「文章」の部参照。

四、誦讀

内容を心に浮べながら個人的に讀ましめる。また指名して誦讀の練習を行ふ。



五、表現上の吟味

本文に於ける作者の態度・取材・構想等につき問答する。

第三時

▽全文の復習——練習應用。

一、復習

- 1、形式上——一讀させる。主要語句の意義及び語法等につき問答する。
- 2、内容上——各節に於ける内容を問答する。また全體の上からも問答して、一層深く感味させる。

二、練習・應用

(一)漢字の書取

春 梅の花 咲始めた 美しい歌 暖い  
 風 朝起 谷間 所々に雪が残つてゐる  
 若葉 今は櫻の花盛である 長い冬 眠る  
 若芽 蝶が飛ぶ 農夫 小鳥 春雨  
 小川 鳥の聲 水が流れてゐる

〔注意〕 ○を附した文字は新字である。故に之をかくとき特にその筆順を授ける。以下之に倣ふ。

(二)假名遣の正誤

うぐひす しづかに 生きかへつたやうに

(三)語句の適用(短文作爲)

ぼつ／＼ しづかに すべて 生々として

(四)語法上の異同比較

(花が咲き始めると 知らせる。  
 花がほつ／＼咲き始めると 知らず。  
 (かくれて見えぬ。 谷間に雪が残つてゐる。  
 (かくれて見えない。 谷間にまだ雪が残つてゐる。  
 (農夫は鳥をうつ。 生きかへつた。  
 (農夫はしづかに鳥をうつ。 生きかへつたやうに。

教授上の注意

一、本文は山里に於ける春の景趣を描寫したのであるから、都會兒のためには、特に本文の内容を繪にした掛圖を用意して、其の境地を想起するの便に供するがよい。



二、本文の内容を如實に感味するには、本内容と交渉のある経験が是非必要である。故に都會地にあつては、本文を教授する前に遠足又は其の他の方法によつて、田舎の風物に接觸させて置くことが最も賢い準備である。田舎兒といへども、更に新しく経験を得させることも決して無用でない。本當を言へば三春に互つての経験が必要なのであるけれども、それは一時には不能であるから、先づ部分的に經驗させて、最後に今一遍復習することにするがよい。

三、本文は其の目的とする所は、三春の景趣の鑑賞であるけれども、之と交渉して自ら自然を好愛する情念を啓發することも大切である。

四、本文に使用してある語句中

暖い風が東から吹いて来る。

草や木が一度に目をさまして、

農夫はしづかに鳥をうつ。

せい一ばい美しい色を見せてゐる。

等は一寸意味の分りにくいものであるから、特に注意して授ける。

五、本文に於ける構想即ち思想の表現法も可能の範圍に於て成るだけ平易に説き、かうした記述を試みるよきの準備とするがよい。

### 備考

#### 春の野

その一

胡粉もて點うちたる如く、落花は野への芝生にちりのこれり。籠ひきさげて摘草しありく乙女。えたるものは嫁菜か、よもぎか。髪に胡蝶のとまれると見しは、折りてさしたる山吹にやあらん。

その二

小さき指にて力のかぎり互に引き合ふは、すみれもて角力とらするなり。さくらの如き頼ふくらしつゝ吹きこゝろむるは、踊子草といふ花を竹にさして、車の如く廻さんとするなり。風さむからず渡りて、物いふ花の苔もこゝかしこに散りまぢふ。

その三

こだかき岡にのぼれば、木の間より水のながれなどなつかしく見ゆ。なにならん、毛氈しきたるはと妹がいへば、あればれんげ草なるにと姉が教ふ。藤は教ふる姉の帯に似て色こく、躑躅は問ひたる妹の袖口に似て赤し。

その四

夕日やうやうかたむきつゝ、べにもてそめたる繻の如く、今しも霞む木の間にかゝれり。別れし乙女は遠く家路にかへりて水の聲のみ長く歌聲をのこしぬ。つみたるれんげ草のつながれて禪となるは、今宵たが里の燈火のかけぞ。(大和田建樹)

#### 彼岸

今日は彼岸に入る。

梅花歴亂として夢縁已に莖をなしぬ。菜花盛となり、椿はぼたり／＼落ちて地も紅なり。

野に出づれば田の畔は、土筆・薺・野蒜・蓬など、簇々として足を容るべき所もなし。臺は花となりて、露も小さき青傘をかざし初めぬ。芝の蔭にはにがめすみれの花の何ぞ美しき。蒲公英は小さき白をば惜氣もなく田の畔に撒き散らせり。木瓜も紅



唇を開きぬ。

田川の水の音を聞け、溶々として滑らかに、其の裡に無限の春あり。おたまじやくし初めて生れて、五分ばかり、温き水に泳げり。農夫は已に田をかへし初めんとす。

川邊には、枯葉・舊根の間より、茅花には大に、菊には小き蘆芽の數限りもなく黄色に吐き出でぬ。野には雲雀を聞き、吾が隣家の樺には、近來日毎に鶯來鳴けり。(自然と人生)

## 第二 東京見物

### 要旨

形式上では新文字の読み方、書き方、難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では我が國の帝都たる東京市に於ける尊嚴なる宮城を初め、壯大なる建築物、名高き公園、歴史ある古跡等を知らしめて帝都に對する印象を深くし、傍ら名稱・舊跡を探る趣味心を養ふを以て要旨とする。

### 教材

文字

「場」——形聲文字である。字源に三説ある。(一)は神を祭る道。(二)は山田の耕さざるもの。(三)は穀を收ふ田これである。いづれにするも土扁に義をもち、易を音符とする。今は一般に一定のバ

シヨの義とする。漢音は「チャウ」で、吳音は「ヂャウ」で、訓は「バ」である。

「運」——形聲文字で、移り徙る義である。故に辵をかく。軍は音符である。音は「ウン」で、訓は「メグル」・「ハコブ」等である。

「社」——會意文字で土地の神の義である。故に示と土とを合せて作る。後轉じてヤシロの義となつた。漢音は「シャ」、吳音は「ジャ」で、訓は「ヤシロ」である。

「電」——會意形聲文字である。田は電の本字で、其の上下を伸ばしてイナビカリの形を象つたのである。雨は後に加へたものである。漢音は「テン」、吳音は「デン」で、訓は「イナビカリ」である。

「博」——會意形聲文字で、ひろく通するの義である。偏に四方八方の義があり、傍に布くの義がある。傍はまた音符である。音は「ハク」で、訓は「ヒロシ」である。

「館」——形聲文字で、客舎の義である。昔は五十里毎に市があり、市に候館があり、候館に積があつた。故に食扁をかく。官は音符である。轉じて廣く官舎・學校・宿屋など人の常住せない屋舎の稱となつた。音は「クワン」で、訓は「ヤカタ」等である。

「市」——會意形聲文字で、上下に分けることが出来る。物を賣買に人の行く處をいふ。上部は一定の場所を意味する。漢音は「シ」、吳音は「ジ」で、訓は「イチ」等である。



「香」——會意文字で、黍と甘との合字である。甘く熟した黍稷の芳ばしきにはひを言ふ。後略して香とかくに至つた。漢音は「キヤウ」、吳音は「カウ」で、訓は「カ」・「ニホヒ」・「カヲリ」・「カンバシ」等である。

## 語句

「東京」我が國の首府である。關東平野の南部に位して、南は東京灣に面し、隅田川が其の東部を貫流して居る。戸数は四十五萬六千八百二十戸、人口は二百七十七萬三千六百六十二人（大正九年十月調）である。市街は東西約二里半、南北約三里半ある。文明の設備一として備はらないものはなく、今や帝國の勃興と共に東洋第一の大都會である。「東京驛」東京市麴町區にあつて御濠をへだて、宮城と向ひあつて居る。明治四十一年三月に起工、同四十五年三月に竣工した。此の經費は三百萬圓で、七十四萬人の人工をつかつた。大正三年十一月二十日に開通式をあげた。建物は三階造で其の高さ約九間、間口が百八十四間、奥行が十一間ある。其の壯大なことは實に東洋第一である。

「宮城」東京市の中央から稍々南に位してゐる。東は前苑で、西は吹上で、北は本丸である。皆壘濠を以て限り宮城は其の内にある。正門を二重橋といひ、地の高きに従つて橋が二重にかゝつてゐる。先づ南行して下橋を渡り、更に西行北行して上橋を渡り、それから禁門に入るのである。

門外から見ると高下二層の橋のやうに見えるから二重橋と稱へ申すに至つたものである。後門は正門の北にあつて、一に坂下門といつて居る。宮内省・樞密院等の廨舎はこの御門の内にある。

（備考参照）「拜さう」「ハイ」とよます。「目につく」目にはいるの意。「しほふ」芝の生えた地。芝原ともいふ。「御正門」ゴセイモンと讀ます。「御所」天皇陛下の御住居なざる所即ち皇居をいふ。

「木の間がくれに見ゆ」木の間はコノマと讀ます。こ、は皇居は深く森林の裏にかくれてゐて、御屋根だけが樹の間から見え申すといふ意味である。「廣場」ヒロバと讀ませる。廣い場所の意。「日比谷公園」東京市の中央にある大公園である。元は大名の邸宅であつたが、明治二十六年市營の公園と定め、三十六年新設備全く成り、其の年の六月一日に開園したのである。園は南北に長く、東西に短い、大體に於て方形をなして居る。面積は約五萬坪で、園内には池・運動場・音楽堂・休憩所等種々の設備がしてある。また新しいから古木は少いけれども、花壇にはいろいろの美しい草花が四時ともに咲き亂れて居る。「靖國神社」ヤスクニジンジャ。東京市の九段坂の上にある。明治二年に創立し、戊辰の役に戦死したものの英靈を祀り、招魂社といつてゐたが、明治十二年に靖國神社と改め、明治維新の際の殉難者を初め、日清・日露・日獨等の諸戦役に忠死した陸海軍の英靈を合祀し、毎年春秋二回に大祭を行はせ給ふ。社格は別格官幣社である。境内には櫻・梅等の花木が多くあつて花時は甚だ奇麗である。その他大村益次郎の銅像、青銅の大鳥居、遊就



館等も境内の中にある。「電車」電氣の力で鐵路の上を走る車で、主として乗客に用ひる。圖を示して其の觀念を明かにするがよい。「上野公園」東京市下谷區の西北部にある。面積は約廿五萬坪あつて我が國第一の大公園である。明治六年四月に公園となし、東京府に屬してゐたが其の後帝室の所屬となつた。秀麗明媚な山水の眺めがなければ、老樹多く、幽邃閑雅掬すべきものがある。殊に年を経た櫻樹が多くあつて、花時には全國香雲に包まれ滿都の老弱男女が花下に集つて來て甚だ般賑である。其の他雪月の眺めもよく、四時遊覽の好勝地である。園内には帝室博物館・帝國圖書館・動物園・西郷南洲の銅像・東照宮・音樂學校等がある。又丘の下に不忍池があつて、池中に蓮多く、花時になると其の清香を愛し、清姿を賞する者が引きも切れないといふ。「動物園」上野公園の西部にある。敷地は約八千坪あつて、明治十五年始めて開設したのである。世界に於ける珍禽奇獸が多く聚められてゐる。一年の中で十二月二十九日より卅一日までの三日間を除く外、毎日開園して公衆の觀覽を許して居る。「博物館」東京帝室博物館をいふので上野公園の北部にある。明治十五年に創立し、博物館と稱してゐたが、同廿三年に東京帝室博物館と改稱した。内部を歴史・美術・工藝・天然の四部に分ち、天下のそれ等に屬するもの悉く聚めてある。一年中十二月二十六日から一月四日までを除く外毎日開館して公衆の觀覽に供する。「淺草公園」東京市淺草區にある。市の諸公園中獨り趣が異つてゐて、興行物等が軒を並べ、酒樓料亭が相並んで

甚だ般賑である。「觀音堂」クワンソンドウ。寺號は金龍山淺草寺と稱す。本尊は千手觀音菩薩で俗に身長一寸八分だと傳へてゐる。本堂は南面し、十八間四面で、特別保護建築物の一つである。「隅田川」秩父山中から發して中津川と稱し、大里郡に入つて荒川と稱せられ、之から東南に流れ千住に入つて隅田川と稱せられる。東京市を貫流し佃島に至つて海に注ぐ。全長七十四里、下流は其の流れ緩かで、舟楫の便利が極めて多い。「川下」カハシモと讀まれる。「日本橋區・銀座通」東京市に於ける中央の大街道で、道路廣潤で、左右に壯麗な建築物が軒を並べて建つて居る。「商店」シャウテンと讀ませる。「泉岳寺」芝車町の西にある。山號は萬松山といふ。四十七義士の墓あるを以て都鄙に知られて居る。境内に首洗井・義士遺物展覽會場等もある。「四十七義士」赤穂の義士大石良雄等四十七人の義士をいふ。詳細は備考部參照。「線香」センカウ。香料を細末にし糊で固めて線としたもので、火を點じて佛前に供へる。「花の雲」櫻の花が爛漫と咲いてゐるのを遠くから見ると、丁度雲がかつてゐるやうに見えるからかくいふのである。「花の都」陽春酣なるとき、櫻花爛漫と咲き亂れて、全都が恰も花に包まれてゐるやうに見えるからかくいふのである。

### 挿畫

日本橋及び其の附近の市街の一部をあらはしたものである。日本橋は日本橋川に架する一大石



橋で、明治四十四年四月、過去四ヶ年間の歳月を費して成り、其の月の三日に盛大な渡橋式を行つた。工事費約五十二萬圓で、其の結構の善美なる東都第一の名橋である。橋欄には麒麟と獅子との銅像がある。而して橋上の行人、橋下の舟行織るが如くである。向つて左方にある大きな建物、帝國製麻會社で赤煉瓦で造つてある。其の右に高く聳えてゐるのは有名な三越呉服店である。其の下にある赤煉瓦は中井銀行日本橋支店である。

文章

本文は作者が子供の地位に立つて東京市内を見物し、さうして其の経験した所を面白く記述したのである。

本文は言ふまでもなく作者は先づ東京驛を見物し、それから次へ次へと各所を見物し、最後に高輪の泉岳寺で終つた所迄を文にしたのである。所でかうした文章には必ず進行（見物せずに素通りにする處）と停止（止つて見物する處）とがある。例へば本文について言へば



本文はどつちかといへば主として停止の記述で、只一ニヶ所僅かに進行の記述かと思ふ所があるのみである。一般に此の種の文には、進行は特に必要のある場合の外は之を略し、停止の記述のみでよい。殊に本文の如き我が帝都に於ける主なる建築物や公園や古跡等を知らせて、帝都に對する一般的印象を興へようといふ考の課に於ては尙更である。従つて本文を取扱ふ際には専ら停止に重きを置いて授けてよい。併し進行を超越してはならない。停止と停止との連結は進行なのであるから、之を念頭から全く放棄するといふことは本文の生命を斷絶することにもなる。

本文は勿論連続した一篇であるけれども、進行と停止との關係によつて眺めて見ると八節に分かれて居る。即ち

- 第一節 東京驛を見物せしこと。(交叉して居る)
- 第二節 宮城を拜觀せしこと。
- 第三節 日比谷公園に遊びしこと。
- 第四節 靖國神社に参拜せしこと。
- 第五節 上野公園に遊びしこと。
- 第六節 淺草公園等に遊びしこと。
- 第七節 銀座通の瞥見及び泉岳寺に参拜せしこと。
- 第八節 花時に於ける東京の景趣。

と言ふ譯である。

第二 東京見物



本文に於ける作者の位置は勿論移動的である。故に讀者も共に移動して讀んでいかなければならない。

記述の精粗の上から言へば、東京驛は最も略述で、日比谷公園・淺草公園は之につき、其の他は比較的精述してある。此の點は此の種の文には大切な點であるから、注意するがよい。

取材の上から言へば宮城・日比谷公園・上野公園は最も當を得、就中二公園は最もよく其の特色を捉へてある。

本文は全體から見て、複雑な内容を簡明に且面白く記述してある。紀行文の模範として好當のものである。たゞ強ひて二三の缺點を言ふならば、東京驛については今少し具體的にかいてその壯大の氣分をあらはして欲しい。單に「大きくて、りつばであつた。」と言ふだけでは、餘りに抽象的であるまいか。次に靖國神社については大村益次郎の銅像も入れて欲しい。教科書には正面の大鳥居をかゝへてみて喜んだことを書いてあるが、此の銅像の下に來て仰ぎ見ることも、見物者の自然の心理かと思ふ。殊に此の銅像を入れるといふことは餘程意義をもつことにもなる。其の他淺草公園についても、もつと此の公園の殷賑をあらはすやうな記述振りをもつて欲しい。以上は教授の際注意すべき點であらう。

### 區分

第一時 第一・二節(自三頁三行)を授く。

第二時 第三・四・五節(自五頁五行)を授く。

第三時 第六・七・八節(自七頁五行)を授く。

第四時 全文の復習及び應用。

### 教具

東京市街地圖 繪葉書 東京驛・二重橋・日比谷公園に屬するもの四五種、靖國神社に屬するもの三四種、上野公園に屬するもの四五種、東京帝室博物館・淺草公園に屬するもの四五種、日本橋・銀座通・泉岳寺・四十七義士の墓所等其の他。

### 教法

#### 第一時

▽第一・二節を授く。

一、東京市の地圖を示し、今日は一人の子供が東京を見物したこと即ち

東京驛——宮城——日比谷公園——靖國神社——上野公園——淺草公園——銀座通——泉岳寺等。

を見物したことにつき學ぶべき旨を告げ、それから教授にはいつて行く。



二、各自をして自由に一讀させる。

三、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。

東京驛 宮城 拜さう おほりばた しばふ 御正門 二重橋 御所  
木の間がくれ 等。

四、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二三回讀ませる。

五、内容につき吟味する。

1、東京驛の壯大なることを繪葉書等を示し、適當に補説して知らせる。

2、二重橋の雅麗。平和な御濠の水。千代を誓ふ松の緑。鬱蒼たる樹の間から宮城の御屋根を拜んだときの尊さ……等。

六、讀み方の練習を行ふ。

各自自由に、また指名して。

七、書取。

東京驛 宮城 拜する 向岸 おほりを越ゆ 廣いしばふ 小松が植ゑてある  
御正門 石橋 二重橋 御屋根 木の間がくれ

第二時

▽第三・四・五節を授く。

教授の順序は第一時に準ずる。但し問答すべき語句・吟味する内容の要點等は次の如くである。

(一)問答すべき主要の語句。

廣場 日比谷公園 運動場 咲きみだる 九段 靖國神社 正面 大鳥居  
電車 上野公園 人ごみ 動物園 博物館 ……等。

(二)吟味すべき内容の要點。

日比谷公園について——廣いこと。清楚であること。奇麗な池のあること。運動場や音楽堂等の設備あること。四時共に美しい草花が咲き亂れてゐること等。

靖國神社については——社殿の壯麗なること。境内に櫻樹多くて花時は甚だ艶麗であること。

大鳥居や大村益次郎の銅像のあること。九段坂から見下ろしたときの眺望等。

上野公園については——その廣大なること。老樹が多くあつて奥深くあること。殊に櫻樹多く

花時は全園香雲に包まれ、満都の人士が此處に集ること。帝室博物館があつて、古今のいろいろ

るな物が多く集めてあること。動物園があつて、珍禽奇獸等が多くゐること。東照宮等壯麗な

社寺のあること。丘下には不忍池があつて紅蓮白蓮が多く植ゑてあること等。

(三)書取らすべき主要文字。



廣場。運動場。神社。櫻の花盛。大鳥居。電車。上野公園。動物園。博物館。等。

第三時

▽第六・七・八節を授く。

教順は前時に準ずる。

(一) 問答すべき主要の語句。

淺草公園 觀音堂 吾妻橋 隅田川 ポート 厩橋 日本橋通 銀座通 商店 高輪の泉岳寺 四十七義士 線香の煙 花の雲 たなびいてゐる 花の都 等。

(二) 吟味すべき内容の要點。

淺草公園については——觀音堂があつて參拜者の多いこと。いろ／＼の興行物が軒を並べてあること。平常といへども人出多く、常に祭時の如く賑うてゐること等。隅田川については——幅廣く水深くあること。河船常に往來してゐること。學生が常にポートをこいで勇しく往來してゐること等。

日本橋通・銀座通——東京市に於ける中心地であること。街路廣く、人道車道に分れ、人馬の

往來織るが如く、街路の兩側には高き壯麗な建物が軒を並べて建つてゐること等。

泉岳寺——四十七義士の墓のあること。參詣する人は常に絶えず、線香の煙日夜立ち上つてゐること。義士遺物展覧の會場あること等。

(二) 書取らすべき主要の文字。

學生 電車 日本橋通 東京市 義士線香 花の都 花の雲……等。

〔注意〕 挿畫の説明を忘れてはならない。

第四時

▽全文の復習——應用。

一、各節毎に指名して讀ませる。而して其處に於ける

1、先づ主要の文字の讀み方、語句の意義等につき問答し、

2、次に内容の要點について問答する。

二、よく内容を意識しながら全文を自由に一・二回讀ませる。(此の際教師は劣等生を指導する)

三、兒童をして東京見物の一人たらしめて、次の順路に従つて話させる。

……東京驛——宮城——日比谷公園——靖國神社——上野公園——淺草公園——隅田川——日本橋通・銀座通——泉岳寺等。



四、思想の表現法につき問答する。

- 1、作者の位置につき。
- 2、取材即ち着想につき。
- 3、記述——精粗及び其の他につき。等。
- 五、語法上の比較。

（りつばである。）  
（目につく。）  
（りつばであつた。）  
（目についた。）

（花が咲いてゐる。）  
（かへてみたら。）  
（花がそこそこに咲いてゐる。）  
（かへたら。）

（それから。）  
（お祭のやうに人出が多い。）  
（これから。）  
（お祭かと思ふ程人出が多い。）

（いつもたえないで。）  
（いつもたえないと見えて。）

教授上の注意

- 一、本文を取扱ふには地圖は勿論、繪畫・寫真等も出来るだけ用意して、身は恰かも其の實境地にあるかのやうにして授けなければならぬ。
- 二、そこで之を助ける一方法として、教室の後の壁の上（又は其の他）に、教科書の如く、東京驛

を出發點として泉岳寺で終つた所までの模型圖を作つて提示するがよい。即ち壁上に

東京驛の繪葉書數種。

日比谷公園の繪葉書數種。

靖國神社の繪葉書數種……等。

を選んで之を壁上にピンで止め、而して其の各所の間を打紐で連絡して電車又は道路に擬する。而して其の配置は地圖と照合して可成其の方向に従つて配置する。此の法は簡短で而かも如實に其の境地を想起させるとして甚だ有效である。

三、教科書の中に東京市の略圖を挿入したのは、地圖を読む力をも養はうとする要求であるから、其の考で取扱はなければならない。従つて記號等についてもよく授けなければならない。

備考

東京停車場

東京停車場は東京市麴町區丸の内にあつて鐵道省に屬し。東海道線の起點である。鐵骨石造に赤煉瓦を配し、三階建て間口百八十四間、奥行十一間、高さ九間である。向つて右は入口で、左は出口である。階上にはホテル・役所などがあり、階下には待合室・中央郵便局の分室・兩替店・賣店・洗面所・食堂などがある。中央は貴賓室で、壁畫は當代名家の苦心になつたもので産業の實況が畫いてある。毎日降り降りする客の數は一萬人に近いといふ。發着時刻が近くと、自動車・馬車・人力車などが織るが如くにゆききして、入口・出口が非常に混雜する。當驛は明治四十一年三月に起工し、同四十五年三月に竣工したので、之に費す



費用は約三百萬圓で、使役せし人夫は約七十四萬人であつたといふ。大正三年十一月二十日に開通式を擧げ行つた。其の宏壯なことは實に東洋第一である。

### 宮城

宮城は東京市の略々中央部に在る。九重の雲深うして庶民の知る所でないけれども、今精確なる記録によつて其の概觀を摘記すると、總建坪二萬七百餘坪で、建物の名稱は御車寄、右廂及び西一の間、同二の間、左廂及び東一の間、同二の間、葡萄の間、化粧の間、正殿、西溜の間、東溜の間、豐明殿、千種の間、竹の間、牡丹の間、鳳凰の間、桐の間、表御座所、東御車寄、南・北溜の間、麝香の間、聖上御常御殿、皇后宮御常御殿、内謁見所、御靈殿、北御車寄、其の他女官の部屋等がある。又賢所及皇靈殿がある。之に屬する神嘉殿、拜殿、帷舎、奏樂所等がある。

吹上御殿は牛藏門内城垣の内にあつて面積十三萬餘坪ある。苑内には池塘・老樹四時の眺臨に適し、萬花常に妍を競つてゐる。御建物には觀瀑亭・駐春閣・寒光亭・霜錦亭・望嶽臺・吹上御茶屋竝に日清・日露兩役記念品を陳列せる振天府・懷遠府等がある。

二重橋は宮城の正門である。地の高下によつて二橋が架してある。之を門外から見ると二重に架したやうに見えるからかく名があるのである。徳川時代には木橋であつたが、現時は石及び鐵で造り壯麗である。三大節には東宮竝に各宮殿下を初め文武百官が參内するとき此の門から入ることになつて居る。又曾て明治天皇が御不豫の時庶民が日夕此の門外の廣場に拜跪して赤子の誠を表現したのである。

宮城はもと江戸城と稱し、今を去る約四百年前鎌倉管領上杉家の重臣太田道灌の創築せし所である。其の後北條氏之れを領し、ついで徳川氏此處に居ること二百七十餘年間その間屢々修築改築改造して規模悉く備つたのである。明治元年之れを朝廷に獻じ、一時東京城と稱したが二年三月に車駕東遷せられて皇居と定められ、六年五月に炎上、二十一年十月に落成して、宮城と稱せられたのである。

顧みれば昔は廣袤十數里、尾花繁れる武蔵野の海濱にあつた一孤村の地も、今は翠綠の色濃き松ヶ枝に、瑞雲長へに纏繞き

萬古搖ぎなき皇居は其の裏深くに殿存し、お濠の碧水は永久に平和の色を湛へて居る。あゝ千代田城頭に到る者、誰が崇敬の念に打たれて肅然燃を正さないものはあらうか。

### 高輪泉岳寺

泉岳寺は芝車町の西にある。曹洞宗で下野國都賀郡大申寺末派に屬する。慶長十七年徳川氏僧宗關に命じて外櫻田に創建させ、寛永十六年此の地に移したのである。山號を萬松山と稱し、四十七義士の墓があるを以て、其の名が都鄙に喧傳してゐる。境内には梅樹あり、瑠池梅と言つて居る。蓋し淺野長矩夫人が妙海尼に與へたものと傳ふ。小井があつて首洗井といつて居る。吉良義央の首級を洗つた所である。義士の墓は南方の高丘にある。墓門は元龜ヶ關藝州侯の邸の小門であつたのを、大石真雄が參府の時には必ず此の門から入つたといふことから有志の者は記念として明治三十三年此に移したのである。垣の内には淺野長矩の墓及び妙海尼の墓がある。妙海尼は義士の一人たる堀部彌兵衛の女安兵衛の妻である。四十七士の菩提を弔ひ、安永七年を以て歿した。外に俠士喜劍の墓がある。堂南に義士遺物展覽會場があつて、義士の木像がある。重なる寺寶は釋迦八相曼陀羅である。

### 四十七義士復仇の顛末

元祿十四年三月、勅使が江戸に下つた。江戸幕府は淺野長矩及び伊達宗春をして接待たらしめた。長矩元來禮に馴はざるを以て辭した。併し許されずして高家吉良義央に謀らされた。義央は禮に通するを自ら高ぶり、賄賂によりて事を左右にした。長矩爲に義央に快からず。同月十四日義央が長矩の禮に馴はざるを嘲り、衆中に於て辱しめた。長矩怒り心頭に燃え遂に刀を抜いて義央の額に傷つけた。梶川與惣兵衛傍から之を抱き止めた。幕府長矩を田村右京大夫に預けて死を賜ひ、其の領地を沒收した。老中土屋政直諫めて曰く、「長矩を誅して義央を宥さば、他日必ず變あらう。」と、併し聽かれなかつた。義央遂に病と稱して職を辭した。

時に赤穂では家老大石真雄を始め群臣三百人許り城中に會した。真雄曰く、「主辱めらるれば臣死すと、吾等は當に死すべき



である。併し考へると、こゝに先君の弟大學殿(長廣)がある。此の人を立て、嗣とし、祖先の祀を奉じて行かう。此の事、吾等は生命を賭して幕府に請ひ、若し許されなかつたら此時こそ城を枕にして死なう。」と。老臣大野知房曰く、「これ上を要するもの、不可である。」とて、互に辯論して決しなかつた。其雄乃ち奥野將監、原元辰と議し、遂に多川九郎左衛門、月岡治右衛門を江戸に遣はして繼嗣の事を請はしめ、一方衆を會して守城を議した。會するもの五十五人であつた。其雄は衆人がかやうに離叛しては到底事の成るものでないこと知り、幕使脇坂淡路守、木下肥後守の到るを待つて自ら陳じ、然る後國に殉せんとした。衆こゝに血を刺して誓ひをした。四月使江戸に至り、先づ舊僚安井彦左衛門、藤井又左衛門と謀つて、戸田氏定の許にいつて意志を通じた。氏定その不可を説き諭して退かせた。是に於て其雄同志と復讐の議を定め、城を輪し衆を解いて京都山科に隠れ、迹をくらまして若辛敵を伺うてゐた。十五年十二月十四日、義央客を招いて宴を張つた。此の夜其雄等同盟の士四十六人、堀部金丸の宅に集つて、各々鎧甲を裏にし、兜笠を戴き、鞆を着け、弓槍を擔ひ、長梯大槌を持ち、小笛を以て合圖とし、又事成らなかつたら火を放つて自刃せんと約した。衆を二に分けて仇敵吉良氏の邸を襲うた。苦心の結果終に義央を獲てその首を斬り泉岳寺に詣つて長矩の墓前に供へた。其雄豫め連名帳二通を作り、一を義央の外廳に止め、一を仙石久尙に送り罪を請はしめた。幕府は直に四十六士を細川・松平・毛利・水野の諸侯に預け、翌年二月遂に其雄以下一同に死を賜うた。而して屍は泉岳寺内長矩の墓側に葬つたのである。

### 第三 塙保己一

#### 要旨

形式上では新文字の読み方、書き方。難語句の意義。語法等に關する知識を授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では保己一は盲人の身を以て國學の研究に志し、後大成して諸種の書を著

はし、我が國文學の發達に大なる貢獻をなし、又多くの門弟の育成に盡瘁した偉人であることも知らしめて、私淑の念を高めると共に好學心を刺戟するを以て要旨とする。

#### 教材

##### 文字

「歳」——形聲文學で、步と戌との合字である。古昔支那では木星の軌道を十二次に分ち其の一次を行く間を歳とした。地球は此の一歳で太陽の周圍を一周して四時をなす。是から歳を十二ヶ月・トシ等の義に用ひた。歳星が運行するから歩をかき、戌は音符である。音は「セイ」「サイ」で訓は「トシ」等である。

「講」——會意形聲文字で、和解の義である。傍は「クミタツ」の意で音符である。轉じて「説ク」「論ズ」「ホス」「究ムル」「書ヲ讀ム」等の義となつた。音は「カウ」で、訓は上記の通りである。「待」——形聲文字で、とまりまつの義である。偏はあゆむの義で寺は音符である。漢音は「ダイ」、吳音は「ダイ」で、訓は「マツ」等である。

「不」——指事文字である。本義は鳥が天に翔け去つて下り來らぬ意である。是から疑問の意に用ひるに至つた。また弗に通じて打消の義ともなす。漢音は「フウ」、吳音は「フ」である。

「由」——未詳。漢音は「イウ」、吳音は「ユ」で、訓は「ヨル」である。



語句

「アキメクラ」目は見えるけれども文字の讀めない人をいふ。「大學者」學者は學問に長じた人をいふ。大は立派の意。即ち立派な學者の意である。「塙保己一コレナリ」口語で言へば「塙保己一は其の大學者の一人である」といふ意になる。「讀マセテ」「讀ミテ」と比較して使役助動詞の職能を知らせる。「種々ノ書物ヲアラハシ」群書類從・讀群書類從・武家名目抄・史料・徒然草拾遺・松山集・皇親譜略・水月文藻等頗る多い。中にも群書類從は大部なもので且不朽の書物である。「弟子」「デシ」と讀ませる。「番町」バンチャウ。麴町區の内で、今は一番町・上二番町・土手三番町・四番町・五番町・上六番町・中六番町・下六番町・富士見町等に分れて居る。保己一の家は今の三番町と上六番町とに跨つてゐたといふ。「番町デ目アキ目クラニ道ヲキ、川柳の句である。一句の意味は「盲が目明に道(歩む道と物の道理の道とをかねていふ)をきくのが當然であるのに、番町では目明が皆盲の保己一について道を開いてゐる。なんとまあ珍しいことではないか。」といふのである。即ち滑稽の中に深く保己一の聰明をほめたのである。因に川柳は寶曆・明和の頃、綠亭川柳(柄井八右衛門)等のよみ始めたもので、句は俳句に同じく五・七・五の三句から成り、滑稽趣味に富み、諷刺の意を寓して居る所が特色である。句に餘情を含めんがために、終りを連用段で切りはなしたのが多い。「書物」源氏物語。「講義」カウギ。書物の義理を説きあかすことで講釋に同じ。「ト

モシビ」點したる火の義。油火・蠟燭火・篝火・瓦斯燈・電氣燈等皆之に屬す。併し此處は挿繪にあるとほり蠟燭火をいふ。「サテく」然かあるかとうけて言ふ詞。感動詞の一つである。「イヒタリトゾ」「イヒタリトゾイフ」の略。「ゾ」の一語加はつただけ、その意味が「イヒタリトイフ」に比し幾分か強い。「ゾ」は物を指定するに用ひる助詞である。

文章

本文は二段から出來て居る。即ち

第一段——保己一の略傳。

塙保己一  
第二段——保己一の逸話。

といふふうに出來て居る。第一段に於て

「世ニハアキメクラトテ、目ガ見エナガラ、文字ノ讀メザル人モアルニ、マコトノ目クラニテ、大學者トナリシ人アリ。」

と警句を真先に置いて本文の總叙とし、次に保己一の一生を簡明に記述し、最後に川柳を以て結收した所は中々に面白く且引締つて居る。第二段に於ては、叙述上別に之といふ奇抜はないけれども、其の逸話が第一段の川柳と照應する所に面白味がある。即ち保己一が笑ひながら

「サテく、目アキトイフモノハ不自由ナルモノカナ。」



といふ言葉の裏に、

一面には保己一のえらい所が想起され、また一面には有眼者をして後に瞠若たらしめる所に妙味がある。特に玩味させたい。

### 區分

- 第一時 第一段(自九頁七行)を授く。
- 第二時 第二段(自十一頁一行)を授く。
- 第三時 全文の復習及び應用。

### 教具

挿繪を擴大した掛圖 群書類從及び其の他の著書 保己一の肖像等。

### 教法

#### 第一時

▽第一段を授く。

教順は第一課「春」の場合に準ずる。たゞ其の他に於て注意すべきことは次の如くである。

(一) 問答すべき主要の語句等。

塙保己一 アキメクラ 大學者 一心 學問 種々の書物 トロキタリ 江戸ノ番町 番町

デ目アキ目クラニ道ヲキ、

(二) 口語に譯すべき言葉。

アキメクラトテ 讀メザル人 大學者トナリシ人アリ 保己一コレナリ 學問セリ カクテ  
トロキタリ 番町ナリシカバ 言ヒタリトイフ

(三) 内容の吟味上。

第一節に於ては、警句の意味をよく知らせるは勿論、尙之と連絡して五官の機能の完全にそろつたものは一層、學習に奮勵すべきことをさとしめるがよい。

第二節に於ては、「人ニ書物ヲ讀マセテ、コレヲ聞キ、一心ニ學問セリ」「種々の書物ヲアラハシ」「多クノ弟子ヲラシヘ：」等の章句及び川柳によつて、保己一の強記と篤學。浩瀚な書を著はして我が學界に貢獻せし多大な文勳。門弟を教へて日夜孜々として倦まなかつたこと等をよく知らしめて、此の偉大な恩人を欽仰させるがよい。

(四) 書取るべき主要語句。

大學者 五歳。書物 學問 種々の書物 弟子 番町：：等。

#### 第二時

▽第二段を授く。

第三 塙保己一



教順は前時に準ずる。たゞし其の他に於て注意すべきことは次の如くである。

(一) 問答すべき主要の語句等。

書物ヲ講義シ トモシビ 不自由 言ヒタリトゾ……等。

(二) 口語に譯すべき語句。

居タリシ時 消エタリ ツツケタレバ 下サレタシ 不自由ナルモノカナ 言ヒタリトゾ……等。

(三) 書取らすべき語句。

講義 弟子 待ツ トモシビ消エ 不自由……等。

第三時

▽全文の復習及び應用。

一、復習

各節を指名して讀ませる。

主要の語句・語法等につき問答する。

内容につき吟味する。

二、練習・應用

(一) 次の文語を口語になほさせる。

マコトノ目クラニテ、大學者トナリシ人アリ。塙保己一コレナリ。

一心ニ學問セリ ソノ名世ニトマロキタリ 保己一ノ家ノアリシ所ハ江戸ノ番町ナリシガ。

講義ヲツツケタレバ 不自由ナルモノカナ……ト言ヒタリトゾ。

(二) 語句の適用(短文作爲)

目ハ見エナガラ トマロク シカルニ 不自由……等。

三、話方の修練

1、保己一の略傳につき。

2、逸話につき。

教授上の注意

一、本文は文語文であるから之を口語に譯する力も確實に養つていくやう注意せなければならぬ。

二、語句の内にも具體的に説明を要するものもあるから注意する。例へば種々の書物 書物ヲ講義シ……等。



三、川柳及び保己一の言については、その本意義は勿論、言外に含まれてゐる餘音をも明かにするを要する。

四、本文はその教授に入る前に、または第一段の教授に即して、此の旨目の偉人に關する傳記を今一步擴充して説くことは無用でない。即ち私淑の念を一層高める上に必要だと思ふ。

### 備考

#### 稿保己一

江戸の和學者なり。姓は萩野、通稱は辰之輔、水母子と號す。武州秩父郡保木野村の人。人と爲り孝慈・友愛にして、躬ら行ふこと甚だ備はる。精誠一事に従ひて苟もせず。其の先某豊臣氏に仕へ、天正の役に海を踏みて東に走る。家なほ一鼎を存す。餘に傳ふる所なし。保己一七歳にして明を失ひ、十歳にして母を喪ふ、其の父鯉にして貧、能く之を養ふなし。乃ち之を東都の僧僧に屬す。其の師は兩宮檢校菅一といふ者なり。家は城西四谷にあり。保己一絃歌を學ぶ、五年にして一節だも成らず。更に鍼法を受く、後四年にして成らず。而して歌唱の字句は一聽して記せざるなく、其の語、其の義は精細にして倦まず。試みに保己一をして學士大夫の家に就きて、その誦讀を聽かしむるに一も失する所なし。師問うて曰く、「何の業を修めんと欲するか。何の神を最も尊き」と。保己一曰く、「讀書の業に若くなし。而して賢人自ら見る能はず、人の誦讀を聞かんと欲すれども慙むらくは其の人を得ず。嘗天神は博學の宗、豐臣神は遂志の首、心の嚮ふ所なり」と。師乃ち保己一をして廣くその友を求め、常に嘗天神を祀らしめ、絃歌・鍼灸は亦復強ひす。法兄豐一、貸貸して財を生じ、師を辭して一家を成し、數年にして死す。圓金五百片を遺し、且、家計に富む。保己一當に法弟を以て、其の後を受け、其の資を有つべし。而して保己一顧みず、或ひと勸誘して曰く、「此の資を以て貸買せば、即ち大率年に息三百金を得ん。是士大夫の産に上るにあらずや。且、子々相生じ、息々相長すれば、則ち絃歌鍼灸逢迎教授を暇らずして、坐ながら王侯都君の富を致すべし。時失ふべからず」と。保己一曰く

「古語に云ふ、『渴しても盜泉の水を飲まず』と。貧困すと雖も、豈貧暴の貨を望まんや。豈人の貨を奪ひ、其の妻子を餓ふしめんや。若し己む能はざれば、竈を減じて更に之を燃さんのみ」と。衆賢聞き詰りて曰く、「保己一は其れ何爲る者ぞ」と。保己一衆賢の喧語に堪へず、且、師に功なくして食するを恥ぢ、卒に去りて他に之く。食を得る所なし。城中麴坊に嘗神の廟あり、郊鄙を距ること大率二十町。保己一食せずして味爽に累趨すること千日、趨毎に百回廟庭に還拜す。家居も亦常に神を拜し、毎旦般若心經を誦すること百遍、世その精誠にして誦讀説釋を樂むるを感じ、其の業を助くるもの日に多し。林高井松平最も其の精誠を嘉みし、之を養ひ之を佐く。保己一謂へらく、「其の國に生れ、其の故典に詣りて可ならんや」と。遂に邦典を講究し、我が中世の事實に於て、通曉せざるなし。又和歌を善くして吟味を嗜む。友人官を買ひて自ら榮えんことを勸む。保己一聽かず。師之を聽き、保己一に其の言に従はんことを勸む。保己一始めて之を許す。友人相喜びて貨二百金を鳩め、乃ち買ひて勾當に任じ、號して鳩勾當といふ。此より聲名日に興り、從游月に繁く、隙隙に寓居して衆を容るゝ能はず。友人復議して貨を鳩め、卜築して同郷蝦原に移す。保己一淳々として能く人に教へ、一も秘する所なく。温顔人に接して、貧福を擇ばず。厚嚮重精必ず辭して受けず、叱咤の聲未だ嘗て犬馬に及ばず。稽古折義、専ら力を竭し、之を思ひて又思ふ。衣食起居は一に鬼隷に比して、金錢餘りあれば、則ち一に藏書の資に委し、未だ嘗て自ら歡娛に供せず。逢迎・誣譏・導誘・誘惑・損貸・驕奢は勿論、絶えて釣名機利の意なく、質儉質約、晏如として樂しむ。保己一繁華を避け、榮盛を厭ふと雖も、從游日に盛んに聲名日に興り、官の和學講談所に用ひられ、總檢校に任ぜらる。保己一、保元以降諸家の記録・雜書の永く湮没して世に顯はれざるを嘆じ、海内を搜索して之を校訂し、以て上梓す。總て一千二百七十三種、六百三十五卷。各書皆類を以て彙編す。故に群書類從と名づく。數百年來先修の著書後世に廢棄して知る者なかりしも、是によりて不朽に傳はる。次で續集千八百八十五卷成り、將に刻せんとす。偶々文政四年九月十二月病歿す。年七十六。法號を和學院前總檢校心眼智光居士といふ。保己一始め江戸に至るや、年尙少、一日某商に詣つ。會々衆著頭鋪頭に立ちて一片紙を傳觀し、其の記する所の卷名を按ず。保己一側に在り。之を叩きて曰く、「其の字、水偏に義の旁、知らず何の音なるか」と。保己一即ち應へて曰く、「是必ず油菴アブツツならん」と。是に於て、人を其の地に遺はして之を問ふ。事果して辨するを得たり。衆驚きて曰く、「何を以て之を知る。」保己一曰く、「蓋し當



初、書を作る者、油の字を知らず、旁人之を教へて曰く、『水を偏となし、義を旁と爲せ。』と。著はす所の書に、群書類従を初め續群書類従・武家名目抄・史料・蠶蠅抄・花咲抄・椒庭譜略・家記・徒然草拾遺・松山集・鶴林拾集・皇親譜略・假名曆略法・水月文藻等甚だ多し。(大日本人名辭書に據る)

### 第四 蠶

#### 要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では蠶が卵からかへつて卵を産むまでの發育の順序に關して概要の知識を與へ、傍ら養蠶は我が國益を増進する重要な産業であることを知らせるを以て要旨とする。

#### 教材

##### 文字

「蠶」——形聲文字で、漢音は「サン」で、訓は「カヒコ」である。

「指」——形聲文字である。左傳疏に「巨指、二食指、三將指、四無名指、五小指」とある。旨は音符である。音は「シ」で、訓は「ユビ」「サス」等である。

「桑」——象形文字である。蠶を養ふクハの木のことである。音は「サウ」で、訓は「クハ」である。

「體」——形聲文字である。説文に總十二屬也とある。十二屬とは、項・面・頤・肩・脊・臂・肱・臂・手・股・脛・足をいふ。即ち人の身體の總稱である。漢音は「タイ」で、吳音は「タイ」で、訓は「カラダ」である。

「包」——象形文字である。上部は人が脊を曲げた形。己は子で腹中に孕んだ貌である。即ち孕に同じ。轉じてツツムの義となる。漢音は「ハウ」吳音は「ヘウ」で、訓は「ツツム」である。

「絲」——形聲文字で、本義は蠶の絲である。蓋し細絲の多くの集つた義である。音は「シ」訓は「イト」である。

「産」——形聲文字である。彥の省畫と生の合字で生れる義である。故に生をかく。轉じて生みたる物又は生み出す業等の義となつた。産は音符である。漢音は「サン」、吳音は「セン」で、訓は「ウム」である。

##### 語句

「一月バカリ」「バカリ」はクラキ又はホドと同じ。蠶が孵化してから熟蠶となるまでの日數には溫度によつて大差がある。華氏六十度の溫度では四十五日位、七十度の溫度では三十五日位、八十度の溫度では二十五日位を普通とする。「大キサ」「サ」は接尾語で、「大キ」の形容詞に加へて名詞にしたのである。「カヘリタテ」「タテ」は動詞に添ひて之を名詞にしたので、物事の出來上



つてまだ程へぬ意を表はす詞である。即ちこゝは蠶がかへつてからまだほどへぬをいふのである。「髪の毛の結ひたて」「餅のつきたて」など他の場合にも適用して其の意味を一層明かにするがよい。「シキリニ」繁くつゞける意。「小サイ時分ハヤハラカナ葉ヲ細カク切ツテヤルガ、大キクナルト、枝ノマ、ヤル。」養蠶上給桑は極めて大切なもので、一齡の時は最も細く刻んで與へ、それから後成長につれて漸次粗く刻んで與へる。四眠後は全桑又は枝のまゝ與へる。給桑の量は春蠶にあつては大體次の如くである。(種紙一枚につき)

第一齡—約二貫匁

第二齡—約四貫匁

第三齡—約十二貫匁

第四齡—約三十六貫匁

第五齡—約百五十貫匁

合計約二百貫匁。

「二萬匹ノ蠶」之は蠶卵紙一枚に於ける數を捉へて大體にいつたのであらうか。蠶卵紙一枚に於ける卵の數は凡そ四萬ほどあるけれども、蠶病其の他の原因によつて約二割ほど減する。「オヨソ二十五日カラ四十日間テ」前の記述參照。「一二日ツツ眠ルコト四度アル」蠶は成長して行く間に食を停め、頭をあげて靜止することが四回ある、之を眠といふ。眠は皮を脱ぎかへる時で、成長の階段である。而して眠と眠との階段を齡といひ、成熟する間に五齡ある。従つて此の間に四回眠ることになる。今成熟期を假りに三十五日とすれば、

第一齡—六日半

第二齡—五日半

第三齡—六日半

第四齡—八日

第五齡—八日半

といふ譯になる。各眠の時間は一日乃至二日間である。「マフシ」葉・菜種殻などをつかねて作つたもの。「繭」楕圓狀の巢をいふ。時季によつて春繭・夏繭・秋繭等の別がある。いづれも製絲の原料に供する。併し春繭を以て最も優良とする。「サナギ」蠶の一變態で、全く食物を攝取せず、靜止するのみである。之が更に變態して成蟲となるのである。「蠶の蛾」蠶の成蟲である。體は楕圓形で肥大し、白色の軟毛を有して居る。觸角は雄は羽狀で、雌は鞭狀で短い。前後翅は稍々三角形で翅膜が隆起して居る。「ネツヲ加ヘテ」蠶が既に上簇して五日程を経ると搔繭を行ひ、それから直ちに殺蛹法を行ふ。殺蛹法には燥殺(日光又は火)・蒸殺・蒸燥殺等種々ある。こゝに「ネツヲ加ヘル」とは是等のことをいふのである。「蠶卵紙」サンランシ。蠶の蛾が卵を生みつけた紙をいふ。一枚の目方は普通四匁で、卵の數が約四萬ほどある。病蠶其の他の原因によつて約二割ほど減するから、實際によきものは約三萬位である。而して之れによつてとれる繭は普通一石位である。

## 文章

本文は蠶が卵から孵つて卵を産むまでの發育の順序即ち生活状態を説明したもので、



第一節—蠶が孵化してから成熟するまでの發育及び形態の略述。

第二節—蠶に桑の葉を與へること及び食ふときの有様につき。

第三節—蠶の眠ることにつき。

第四節—蠶が繭を作ることにつき。

第五節—蠶が蛹及び蛾に變すること及び殺蛹法につき。

第六節—蠶卵紙につき。

のやうに六節から出來て居る。

本文は一篇を通して總叙もなく結收もなく、また主想も客想もなく、全く散列式によつて生活状態の要點を簡明に説明したものである。説明的の模範文として適當なものである。

### 區分

第一時 第一・二節(自十二頁四行至十三頁七行)を授く。

第二時 第三・四節(自十三頁八行至十五頁一行)を授く。

第三時 第五・六節(自十五頁二行至十六頁二行)を授く。

第四時 全文の總括的復習及び應用。

### 教具

蠶の幼蟲・繭・蛹・蛾・生絲等の實物又は標本・掛圖等。

### 教法

#### 第一時

▽第一・二節を授く。

一、第一節を授く。

自由に一讀——質疑に應答——主要の語句等につき問答——讀み方練習——内容の吟味(實物・標本・繪畫等と對照して)——一・二回誦讀。

二、第二節を授く。

前同様。

三、第一・二節を連續して讀ましめる。

四、内容の要點につき問答する。

蠶の孵化したときの大きさは○色は○それがだん／＼とどうなるか○蠶の食べ物は何の葉のやう方は……等。

五、漢字の書取。

蠶。 卵。 小指程。 桑。 木ノ葉……等。

第四 蠶



第二時

第一時に準ずる。但し書取すべき漢字は次の如くである。

眠ル 體 木ノ枝 美シイ絲 體ヲ包ム：：等。

第三時

第一時に準ずる。但し書取すべき漢字は次の如くである。

繭 蝶 絲ヲ取ル サナギヲ殺ス 卵ヲ産ム 蠶卵紙：：等。

第四時

▽全文の復習及び應用。

- 一、各節を指名して讀ませる。
- 二、質疑に應ずる。また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、次の項に従ひ内容の要點につき問答する。
  - 1、蠶が卵からかへつて卵を産むまでの發育の順序。
  - 2、桑の葉を與へる方法及び期間について。
  - 3、繭から絲をとる仕方について：：等。
- 四、思想の表現につき問答する。

五、次の語句を比較して語法上の相違を言はせる。

(卵カラカヘツタ蠶ハ、

卵カラカヘツタバカリノ蠶ハ、

カヘリタテカラ、シキリニ食物ヲサガシテ、

カヘリタテカラ食物ヲサガシテ、

(繭ノ中ノ蠶ハサナギトナル。

繭ノ中ノ蠶ハサナギトナツタ。

(蛾ガ繭カラ出テ來ルト、紙ノ上ニウツシテ、

蛾ガ繭カラ出テ來ル。スルト紙ノ上ニウツシテ

教授上の注意

- 一、本文は前述の如く、蠶の發育の順序即ち生活状態につき説明したのであるから理解を主にし  
て取扱ふこととは言ふまでもない。
- 二、内容を具體的に且明確に知らしめるため、蠶の實物又は標本其の他繪畫等と對照して取扱ふ  
ことを怠つてはならない。殊に本教材の如き感覺的材料にあつては尙更である。
- 三、本課は勿論蠶の一生涯に於ける發育即ち生活の状態を知らしめるのは其の要旨であるけれど  
も、挿繪には生絲の繪もはいつてゐるから、製絲の方法につき可能の範圍に於て簡短に補説す  
ることも無用でない。



四、本課は單に文字の上の學習にとゞめないで、適當な指導の下に、彼等をして少量の蠶を飼育させ、而して日々その發育の状態を認めさせ、最後に更に本文と對照させることも賢いやりかたである。

五、本課は教授の都合上、先づ蠶の實物・標本等を示して、その形態・性状・發育の順序等に關して彼等の已有の知識を整理し、それから後本教材に入ることにしてもよい。

蠶

蠶は昆蟲中、最も鴻益あるものにして、我國に於ては、神代すでに養蠶の行はれしこと史上に見えたり。變態は完全にして卵・幼蟲・蛹・成蟲の四階段明瞭なり。

まづ、幼蟲より觀察せん。卵より孵りたる時は、體長一分ばかりの小蟲にて全體に細毛を被り、黒色なるを以てこれを毛蠶(ケゴ)と稱す。桑葉を食ひ、成長するに従ひて數日の後には、毛は悉く脱落し、漸次に灰白色となる。一週ばかりの後には三分の大きに成長し、第一回の脱皮を行ふ。脱皮とは、薄皮を脱ぐことにて、この皮は蠶體の成長につれて、共に成長する性質なきが故に、新に大なる皮を生じ、舊皮を脱ぎ捨つるなり。脱皮する間は桑を食はず、頭部を擡げて、恰も眠れるもの如し。故にこれを第一眠といひ、孵化後第一眠までの間を第一齡と名づく。その後、大抵六日目ごとに第二眠・第三眠・第四眠をなし四回脱皮の後、第五齡に達し、七八日間最も盛に桑葉を喰ひて長さ二寸許に成長す。この時幼蟲の各部に就て具さに觀察すべきなり。

全體白色にして十二の環節よりなる。頭・胸・腹の三部よりなれども、明瞭なる區別あるにあらず。頭部は頗る小形にて、恰も口部の如く見ゆる部分なり。その口は物を嚙むに適するやう上下に腮を具ふ。眼は口に近く左右に六個宛の單眼あり。胸部は三環節よりなり、膨大して上部に肩の如き斑紋を有し、下部には三對の脚ありて小なる爪を具へ、桑葉を把持するの用なきなり。全體白色にして十二の環節よりなる。頭・胸・腹の三部よりなれども、明瞭なる區別あるにあらず。頭部は頗る小形にて、恰も口部の如く見ゆる部分なり。その口は物を嚙むに適するやう上下に腮を具ふ。眼は口に近く左右に六個宛の單眼あり。胸部は三環節よりなり、膨大して上部に肩の如き斑紋を有し、下部には三對の脚ありて小なる爪を具へ、桑葉を把持するの用なきなり。

腹部は九環節より成り、下面の前部に四對、後端に一對の脚ありて運動用となし、又他物に定着す。第十一環節の背上一本の尖れる尾刺あれども、柔軟なれば武器とならず。胸部の第一節及び腹部の第一節より第八節までには、その側面に一對づつの呼吸孔ありて呼吸作用を營む、これを氣門といふ。

蠶は、四回の脱皮をなして、第五齡に達することはすでに前に述べたり。かくて孵化後、三十日乃至三十五日の後には桑葉を食ふことを止めて、體の前半部は半ば透明となる。これ胃中の食物空虚となり、絲となるべき汁液を有せる腺の膨大せるによる。この時代となれば葉を造るべき適當の場所を求め歩くを以て、これをマアシに移し葉を造らしむ。葉は即ち繭なり。マアシは多くは葉にて造り、繭を造る便利をはかりたるものなり。

繭を造る絲は、體中にありては透明なる腺體なるが、口の傍にある小突起より流失し、空氣に觸るれば直に凝りて絲となる。一つの繭の絲の長さは約三里に及ぶものあり。蠶は繭の中に籠りて蛹となる。

蛹は楕圓形の褐色體にて移動せず、食物を探らず、恰も死せるが如くなれども、これに觸るれば少しく蠕動するを見るべし。その體の内部に於ては、盛に新機關、新形態の形成せられつゝありて、約十日許りの後には化して蛾となり、繭を破りて出づ。

次に蠶蛾に就て觀察せん。蠶蛾は頭・胸・腹の三部に區別せられ、頭には羽状をなせる一對の觸角と、山形なる一對の複眼とあり。口器は大いに退化し、蛾たるうちは何物をも食はず。胸部には、二對の翅と、三對の脚とありて遲緩なる歩行をなせども飛翔すること能はず。腹部には七對の氣門ありて、雌の腹部は雄よりも肥大せり。産卵後は、間もなく斃死するものなり。卵は圓形に産み付くるものにて、これを厚紙の上に産附せしめて貯ふ、これを蠶卵紙といふ。蠶卵紙一枚には、大抵一石の繭を生ずべき程度に産附せしめしものにて、養蠶所にて製出せるものは、廣く販賣せらる。

第四 蠶

養蠶の方法は緻密なる注意を要すること多く、到底數十百言の悉し得る所にあらずれどもその概略は左の如し。春暖の候に至り、桑葉漸く萌出するを見計り、蠶卵紙を出して、風の流通よき温室に吊し置く。この間に養蠶室は勿論、所要の器具は悉く皆消毒すべし。かくして竹にて五六寸の間隔を有する多くの棚を造り、蠶を入れたる籠を載すべき用意をなす。



籠は竹又は木にて造り、長三尺、幅二尺、深さは一寸内外のものとする。これによく乾燥せる蓆を敷き、初めの間は蠶兒も微小なるを以て、蓆の上に紙を敷き、蠶卵紙上に孵化せる毛蠶を羽幕にて拂ひ落し、細切せる桑葉を與ふるなり。蠶は日々乾燥せる蓆に代ふる必要あり、これをしりがへといふ。しりがへをなすには、蟲の上より網を覆ひ、その上より桑葉を與へ、蠶兒が桑葉上に止りし時、靜かに網と共に取り上げ新設の籠中に移すなり。初めは目の細かき網を用ひ、成長するに従ひ次第に目の大なる網を用ふ。蓆はなるべく日々洗ひ、日光にあて、十分に乾燥せしむべし。桑葉も雨露に濕へるものを與ふべからず。しりがへを怠り、濕りたる桑葉を與へたれば病蠶を生ずること多し。

繭を造らしむべきマブシは、葉又は麥稈などを結びたるものにて、これを籠に並列し、之に蠶を移し、少しく暗所にして營巢せしむるなり。

養蠶室は空氣の流通をよくし、氣温の激變を防ぎ得るやう裝置をなし、鼠害の豫防をなすなどは最も緊要なることなりとす。

養蠶の方法は大別して溫暖育・清涼育・折衷育の三種あり。溫暖育とは始終火力を用ひて蠶室内は常に一定の温度を保たしむるものなり。清涼育とは火力を用ひず自然の氣温に放任するものにて、天候の如何により豊凶の差を生ず。折衷育とは前二法を折衷したるものにて、寒冷の日のみ火力を用ふ。現今はこの法によるもの多し。蠶は攝氏七十度乃至八十度の温度を最も適當とす。

蠶には大體に於て春蠶・夏蠶・秋蠶の三種ありて、各々その季節に發生せしむ。就中、春蠶最も多く繭も良好なりとす。これ皆人為的に變化せしめしものなり。又各種中に於ても、幾分の特質を有し種々の名を附せらる。春蠶中、普通に飼育せらるゝものは赤熟・青熟・小石丸・白玉・鬼縮などあり。

繭は熱湯中に入れて絲を引出し生絲となすなり。生絲は諸織物中最も美しき絹布の原料なれば、その利益の大なること筆紙のつくす所に非ず。生絲が外國へ輸出せらるる量のみにも年一億圓に達し、これに絹布を加ふれば、一億三四千萬圓の巨額に上る。尙、内國にて消費せらるゝ高も莫大なるものなり。生絲に取りし残りの絲、及び製絲用に適せざる繭は眞綿に造られ

これ亦輸出品の一となれり。繭は鶏・鯉の好食餌となり、糞は肥料として貴重なれば一もすつる所なきなり。

我國にては全國到る所に飼養せらるれども、就中、最も盛大なるは長野縣・福島縣・群馬縣・山梨縣・岐阜縣等なりとす。

(理科教材解説)

## 第五 ちゑだめし

### 要旨

形式上では本課に於ける難語句の意義、語法等に關する知識を與へて本文の讀解に習熟させ、内容上では本物語を面白く讀んで行くうちに、勝れた知恵は人の禍をも轉じて幸ひとする力のあることをさとらせるを以て要旨とする。

### 教材

#### 語句

「或大國の王様が、となりの小さい國を攻めようと思ひましたが」——こゝでは大國の威張つてゐる有様を想像させる。「まがりまがった細いくたを送つて」この中へ絲を通してもらひたい」と申しこみました。——どうして通すか、讀者たる彼等をして、いろ／＼と考察させ結果の如何を期待しつゝ讀んで行く態度をとらさせる。



「となりの國では、大勢集つてさうだんしましたが、どうしてもよいちゑが出ません」——小國の國王を初め臣下一同が、此の難問題について如何に驚き、如何に憂へ、如何にさわいだかを想像させる。

「一方の口へみつをぬつて……一方の口から入れてやるがよい」——こゝではその方法たるや如何にも巧妙で、且老翁の知恵の勝れてゐるかを考察させる。

「今度は大國の王様が、まつくらにぬつた木のぼうを一本送つて『どちらが本で、どちらが末かをしへてくれ。』と言つてやりました。——これは第二の難問題である。『さあこれはどうして分るかな。』と自分で考へながら、小國の王はどう解いてやるかを期待しつゝ讀ませせることは前同様である。

「それは川の中へなげこんで見ればわかる。少ししづんで流れた方が本だ」——老翁の知恵がよいよいでていよく奇抜であるのに感歎させる。

「大國の王様は、國は小さいけれども、中々ちゑのある人が居ると思ひました」——こゝでは只一人の知恵も國と國との問題に對しては、かうして國民全體の知恵となることに想到させる。

「同じくらの大ききの女牛を二匹送つて『どちらが親でどちらが子か、見分けてくれ。』と言送りました。——これは第三の難問題である。こゝでは一つすめばまた一つといふ風に、難事の重

來に如何に小國の王及び臣下が心痛せしかを十分想起させる。また大國の王がそれからそれへと難問題を吹つかけて弱者を苦しめるその横暴な態度をもよく想起させる。

「草をやつて見れば分る。先へ食ふのが子牛で、ゆつくり後から食ふのが親牛だ。」——老翁の奇智が多々益々出でて其のつきる所ないのに益々驚歎させる。

「大國の王様は、こんなちゑがある人が居ては、とてもかなはないと思つて、軍をするのをやめました。さうしていつまでもその國と仲善くしました。」——こゝは暴力が遂に智力に負けた所である。而かも永久に負けた所である。本編の要旨の結收されてゐる所である。十分味はしむべき大切な所である。

### 文章

本文は暴力と智力との二元が相戦つて、暴力が遂に智力に負けたことを具體化したのである。即ち大國の王は暴力の具體化で、小國の王は智力の具體化である。而して二者が相戦つて、流石大國の王即ち暴力も遂に小國の王即ち智力に負けたのである。而かも永久に負けたのである。大國の王が難問題を一回のみでなく二回又三回といふ風に、次から次へと吹つかけて、小國の王は、その度毎に見事に解答して對者を驚かしたのは、二者の間に於ける猛烈な戦闘で、而かも其の度毎に小國の大勝利に歸した戦闘と見なければならぬ。



大國が難問題を提供し、小國はそれを解くに、上下こそつて苦心し、また考へたことは言ふ迄もない。これは即ち互に妙計を絞り妙術を盡して戦つたものと見なければならぬ。

大國の王が遂に戦闘を中止し、而かも小國の王と永久に和睦したことは、即ち暴力が智力に服従したもので、而かも永久に服従したもので、之は智力の勢力は無限大で、有限の暴力の逆も及ぶ所でないと思つて行かなければならぬ。

世界は實に智力の世界であつて、決して暴力の世界でない。暴力の横行は世界を亂し、世界を破壊するが、智力の旺盛は世界を構成し、世界の平和を永久に維持するものである。

本文はかう考へて來たとき、そこに深い意義と、また何ともいへぬ味があるではあるまいか。

### 區分

第一時 全文を授く。(形式上の教授を主にして)

第二時 全文を授く。(内容の玩味を主にして)

### 教法

#### 第一時

▽全文を授く(形式上の教授を主にして)

一、各自をして全文を自由に一讀させる。

二、語句の質疑に答へ、また主要の語句及び語法等につき問答する。

三、讀方を檢閲し、それから各自をして自由に二三回讀ませせる。

四、内容につき問答する。

五、朗讀の練習を行ふ。

#### 第二時

▽全文を授く(内容の玩味を主にして)

一、各節毎に兒童を指名して讀ましめ、そこに於ける語句等の質疑に應答する。また主要の語句及び語法等につき問答する。

二、内容の玩味

教材の「語句」及び「文章」の部に記してあることを参照し、できるだけ深く感味させる。

三、誦讀

個人的にまた一齊的に讀ませせる。

四、話方の修練

二三兒童を指名して話さしめて話方の練習を行ふ。

### 教授上の注意

第五 ちよだめし



- 一、本文は練習文であるから、可成彼等の有する國語力に訴へて彼等自身で讀解もし、また鑑賞もするといふ態度の下に授けて行く。併し全く補導を省くといふ意味では勿論ない。
- 二、本文は面白く愉快に一讀過したらそれでよい文章である。しかし材料の性質上、大國の王の難問題に出遇うたとき、彼等をしてそこに停止して靜かに考察させ、それから小國の王が如何に答へるかを期待しつゝ、讀んで行くといふ態度で讀ませることは取るべき方針だと思ふ。殊に此の種の文章は讀本中に餘り多くないから、特にこの方針で取扱つて見たい。
- 三、本文に於ける中心思想は最後の一節にあるといふものの、其の他の節とても輕視してはならない。何となれば其の中心思想たるや孤立の思想でなく、集合の思想であるからである。
- 四、本文の教法中、語句の書取や應用等は之を省いたけれども、教授者の考によつて課することは勿論差支ない。私共は此の種の如き文章は感興を主にして讀過させたらそれでよいといふ考からかくしたのである。

### 第六 友だちへの手紙

#### 要旨

形式上では新文字の讀み方書き方、難語句の意義、語法等につき知らしめて本文の讀解に習熟

させる。内容上では別れた友が互に相慕ふ真情を味はさせ、且かうした書信を認めるとき形式について知らしめるを以て要旨とする。

#### 教材

##### 文字

「教」——會意形聲文字で偏と傍との合字で、上の行ふ所下をして之に倣はさせる義である。偏は又模倣の義、傍は鞭撻を加へて獎勵する義でもある。漢音は「カウ」、吳音は「ケウ」で、訓は「ヲシフ」である。

「返」——會意形聲文字である。往いてふたたびかへり來る義。故に「シンニユウ」と「反」とを合して作る。音は「ヘン」で、訓は「カヘス」等である。

「諸」——會意形聲文字である。此の者は此の者、彼の者は彼の者といふ風に異同を辨別する義。故に言と者とを合して作る。音は「ショ」で、訓は「モロ／＼」「コレ」等ある。

「涙」——形聲文字で、眼液の義である。辰は音符である。音は「ルキ」で、訓は「ナミダ」である。

「差」——會意文字で、「左」を取り去れば「垂」と同一意味の文字となる。つまり「垂」と「左」の合字である。二つのもの相値はすしてたがふことをいふ。左と右とは相反し、垂るものと上るもの



とは又相たがふ。故に垂と左とを合せて其の義をあらはしたのである。漢音は「サ」、吳音は「シヤ」で、訓は「タガフ」である。

語句

「ちやうど一月になります」一月は三十日として知らせる。「新しい友だちも」四月に入學した新入兒童をいふ。「君がゐなくなつたので、級中一同がさびしがつてゐます。」學友一同が深く舊友を相慕ふ情念の動いてゐる所をよく味はさせる。「君が運動場でくわつばつにかけ廻つたこと。」元氣の潑刺たる所をよく想起させる。「教場で大きな聲で本を讀んだことを思ひ出して」人並外れた大きな聲で、而かも明瞭に讀んだことを想ひ起させる。「うはさをしない日はありません。」うはさ」はこゝでは別れたその友の運動場で活潑であつたことや大きな聲で本をよんだことなどを残つたものどもが常に言ひ合ふ意味である。この一句は去つたその兒童が學級のみんなによく思はれてゐたことを語つてゐることを知らしめる。「先生も小島が居なくなつてさびしいね。」小島といふ兒は餘程人氣男であつたことを想像させる。

「新しい友だちが少しは出來ましたけれども、まだ元の學校がなつかしくてなりません。」轉校して新たな學校にはいると、學校の様子が分らず、心からの友達はまだなく、遊び仲間にも入れてくれず、意地悪ものどもにいちめられなどして、本當に寂しい悲しい思をなすことは事實ある

ことである。かうした場合にはつくづく元の學校を思ひ出し、懐しくてたまらないものである。故にこゝにはかうした寂味のあることを味はすのも無意味でなからう。「日曜日毎に君と一しよに山や川へ行つたことなどを、今も思ひ出します。」かうした思ひ出は日を経た後でも尙あることは人情である。殊に他郷に來て日尙淺き小島君にあつては一層切なる思ひ出であらう。十分感味させるがよい。「私が居なくなつてさびしいと、先生がおつしやつたさうですね。あそこを讀んだときには涙ができました。」感情の迫つたところ。よく玩味させるがよい。

文章

(甲) 往 信

本文の書振は、先づ

- (一) 親愛な友と悲しい別れをしてから約一ヶ月程経たことを記し、次に
- (二) そちらの學校ではもう新しい友だちが多く出來たであらうといふことを記し、次に

(1) 別條な

(イ) 學級一同が寂味を感じてゐること。



(三) こちらでは(2)君がゐなくなつてから(ロ)毎日音容について噂してゐること。

(ハ)教師も寂味を感じてゐられること。

を記し、次に

(四) そちらの様子も時々知らせてくれといふこと

につき記してある。而してその内の(三)にはとりわけ友人を慕ひ懐ふ情が濃密に描いてある。

(乙) 返信

本文に於ては、先づ

(一) 御手紙をいただいたお禮。

をのべ、次に

(二) 新しい學友が多少出来たけれども、まだ元の學校が懐しくて忘れられないこと。

を記し、次に

(三) 思ひ出即ち

(1) 諸君とおもしろく遊んだこと。

(2) 日曜日毎に君と山や川に行つたこと。

を記し、次に

(四) 先生の言を讀んで涙を催したことを。

を記し、最後に

(五) 學級の兒童一同に對する傳言

を記して文を結んだのである。此の返信にも舊友を深く相慕ふ情が切實にあらはれてある。

次に文の形式上から眺めて見ると、返信は、本文のみから成つてゐて、前文と末文とが省いてある。また起首・結尾といつたやうなものも省いてある。返信に於ても本文のみで、他は返信と同様悉く省いてある。要するに本手簡は單純な形式をとり、其の内に舊友を深く相慕ふ情念を濃厚にかきふくめたよい手簡である。

區分

第一時 全文(返信)を授く。

第二時 全文(返信)を授く。

第三時 練習・應用。

教法

第一時

▽全文(返信)を授く。

一、全文を自由に一讀させる。

第六 友だちへの手紙



- 二、質疑に應ずる。また教師より主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、読み方を検閲し、後各自をして自由に二三回讀まさせる。
- 四、内容の玩味

上記教材の「語句」及び「文章」の部を参照して十分感味させる。

五、誦讀の練習

六、書取

君と別れてからもう一月になります 新しい友だちが大勢出來たでせう 別にかはりはありません 級中一同がさびしがつてゐます 教場 大きな聲 そちらの様子を知らせてください ちやうど うはさ どうぞ  
 (或は全文をきれいに書とらさせる。)

第二時

▽全文(返信)を授く。

第一時に準ずる。但し書取らせる語句は次の如くである。

返事 御手紙 ありがとう 元の學校 諸君 日曜日 涙がこぼしまして 先生に手紙を差上げました さうして おつしやつたさうです

第三時

▽練習及び應用。

- 一、往信の文につき。
  - (イ) 質疑に應答。 (ロ) 主要の語句・語法等につき問答。 (ハ) 内容の感味。
- 二、返信の文につき。  
(往信の文に準ずる。)
- 三、書簡文の認め方即ち形式につき吟味する。
  - (一) 往信の文につき 教材の「文章」部参照。
  - (二) 返信の文につき
  - (三) 三月日及び氏名の認め方につき。
  - (四) 用語についての注意。
- 四、家庭に於ける課題として、本文(往信と返信と二つながら)を巻紙に認め、封筒に入れて提出させる。

教授上の注意

- 一、本文に於ける境地は彼等の經驗・境地と交渉して自由に想起させるがよい。



二、書簡文には知的に屬するものと情的に屬するものとあるが、本文はどつちかといへば乙者に屬する。即ち親友同志互に相思ひ相慕ふ所の感情を中心として記述したのである。故に其の心で取扱はなければならない。

三、書簡文は其の種類によつて具備すべき條件といふものがある。併し本文の如き性質のものにあつては、それが自由である。故に自由な範圍に於て、本文は

1、一別以來の挨拶。

2、先方の様子の伺ひ。

3、こちらに於ける消息。

4、近況報知の望み。

1、手紙を戴いたお禮。

2、こちらの消息。

3、元の學校に於ける思出。

4、傳言。

(往信)

(返信)

の如くあることを知らせる。

四、書簡文に使用する言葉は一般に丁寧を旨とし、先方の感情を害せぬことが大切な要件である。

だから本文についても此の點は特に知らしめる。其の他之を認めるときに文字に誤りなく且奇麗にかくことも注意する。

五、其の他書簡文には必ず對者があつて、之によつて言葉の遣ひ方・氏名の認め方にも多少習慣的形式の存してゐることも彼等が分る範圍に於て話すもよい。

### 第七手

#### 要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法に關する知識等を授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では各種の方面から人の手の働きの靈妙なことを知らしめて、小にしては吾人の生活の上に、大にしては國家の文化の上に至大な關係を有することをさとらせるを以て要旨とする。

#### 文字

「帶」——象形文字である。紳(オホオビ)のことで、紳には必ず巾キレをかく。上下に分つと下部は巾を二つ重ねた貌である。轉じて一般に「オビ」又は「オブル」の義に用ひるに至つた。音は「タイ」で訓は「オビ」「オブ」などである。



「機」——會意形聲文字である。説文に主<sub>レ</sub>發謂<sub>ニ</sub>之機と註す。織具・弓弩の如く一種のシカケで事を發せしむるものである。古は木で作る。幾は幾微の幾で物の現れ出でんとする「キサシ」のことである。故に木と幾とを合して其の義を示す。幾はまた音符である。轉じて物の主要・變化・兆候等の意義とするに至つた。漢音は「キ」で、訓は「ハタ」「ハヅミ」等である。

「械」——會意形聲文字である。カセのことで、木で作り、罪人の手足にはめて戒めるから、木と戒とを合したのである。轉じて兵器・又は器具の總稱として用ひるに至つた。戒はまた音符である。漢音は「カイ」で、吳音は「ゲ」で、訓は「カセ」である。

「樂」——象形文字である。本義は樂器のことで、白は鼓で、其の兩側は鞀(錡鼓)で、木は其の臺を示すのである。これからして五聲八音の總稱となつた。音樂をきくことはタノシキより樂の意義が生じたのである。我が國ではタノシキ義から轉じてラクの義も生じた。音は「ガク」「ラク」で、訓は「タノシ」「タノシム」等である。

「器」——會意文字で「犬」と「口」四つの合字である。この四個の「口」は皿の形で犬が之を守る義になる。漢字原理には犬は犬肉で上古の常食である。即ち多くの皿に犬肉を盛つた義で、器の本義は皿で、之が轉じて道具・ツツハの義となつたのであるといつてある。此の説は最も面白いと思ふ。道具は人の役立つ所から更に轉じて人の才智・器量などをも言ふに至つたのである。

「助」——形聲文字で、たすける意、故に力をかく。且は音符である。漢音は「シヨ」、吳音は「ヅ」慣習者は「ジョ」で、訓は「タスク」等である。

「衰」——象形文字である。雨衣即ちミノのことである。故に衣をかく(後に草冠をつけた)。衰はまた瘁に通じオトロフの義となるに至つた。音は「スキ」で、訓は「オトロフ」である。

語句

「不自由」思ふ儘にならぬこと。又は便利のわるいこと。「デセウ」推量の助動詞。「カユイ所ヲカク」「カク」は搔くで爪を立て、引くことである。「サスル」手で軽く撫でることをいふ。「サクワン」シャカンともいひ、壁をぬる人をいふ。語源については言海に「無官のもの禁中に入ること能はず、故に木工・泥工等に假に目(左官)を拜領せしめ、以て出入せしめられたるに起るといふ。」とある。

「船頭」ふなをさ即ち船長をいふ。後轉じて「ふなのり」「ふなこ」「かこ」等の意味となつた。「イロイロナキカイ」道具の運轉又は動作するもの、或は外力を利用し、或は人力で更に人力以上の強い力又は動作をなさせて、大に人力を省くものをいふ。其の種類にはいろいろある。今其中の二三を示さば次の如くである。

(一)蒸氣機關・瓦斯機關・石油發動機・電氣機械等——是等は仕事の働きの原動力となるもの。



(二) 鋸機械・旋盤・汽槌・起重機等——是等は機械を製造する工場に備付けるもの。  
(三) 織物機械・紡績機械・印刷機械等——是等は日常品を製作するに用ひるもの。

「美シイ繪」二三實物を示して具體的に其の内容を明かにするがよい。「見事ナホリ物」同上。「樂器」  
笛・大鼓・琴・三味線・琵琶・オルガン・ピアノ・バイオリン等をいふ。「多ケレバ多イ程」一人よりは  
二人、二人よりは三人といふ風に多いのをいふ。

文章

本文は手の働きの靈妙で且效果の甚大なことを、各方面から考察して記述した頗る面白味に富んだ文章である。

第一節に於ては先づ手のなき場合を假定して、その無きときの不便を自己の身邊の事例に求めて之を否定的に説き、次に手があることによつて人々がかうした仕事をなすといふことを肯定的に説き、終りに一轉して文明になるに従つて種々の機械が製作されて、手の働く領域が狭くなつて來たが、併しかうした機械を作るのも、またそれを使ふのも、矢張手であることを説いて、いづれの方面から言つても手の效果の甚大であることを讀者に首肯させたのである。

第二節に於ては、更に實例を純雅な藝術の方面に求めて、手の働きの益々偉大であることを説き、而して茲に手はすべての仕事の根本であるといふ結論を下したのである。終りに「手傳」や「手

が足リナイ」といふ手に關係のある日常の用語を引證に用ひて軽く洒落た所は、却つて結論をし  
て重からしめた感じがあつて中々に面白い。

第三節に於ては、毎日手をよく働かせる人と、終日ツトコロナ懐手してぶら／＼遊んでゐる人とを捉へ來つて、此の種の人々の多少は、實に一家の盛衰、一國の運命に至大の影響あることを説き、一方に於ては人々の勤勉を奨勵し、また一方に於ては遊惰の人々の反省を促したのである。本文は茲に至つて千鈞の重みが加はつてゐる。

本文はまた句法の上から見て、そこに多くの變化に富んでゐるを發見する。一例をあげるならば

ハシヲ持ツコトモ出來マセン  
帶ヲシメルコトモ出來マセン

否定的記述

大工が家ヲ建テルノモ  
船頭が船ヲコガノモ  
農夫が田ヲ島ヲ作ルノモ

皆手デス

肯定的記述

美シイ繪ヲカイタリ  
見事ナホリ物ヲコシテヘタリシテ

人ヲ感心サセルモ  
手ノハタキデセリ

推量的記述(疑問的)

樂器ガアツテモ  
モシロイ音ヲ出スコ  
トハデキマスマイ

手が無カッタラ、オ  
モシロイ音ヲ出スコ

推量的記述(否定的)



の如きはそれである。

本文は言ふ迄もなく、手についての評論である。故に作者は必ず對者を頭に置いてかいて居る。即ち兒童はその對者である。従つてかうした文章にあつては讀者たる兒童は眞面目な對者となつて讀むことが至當であらう。

本文は全體からいつて多方面に複雑な事實を捉へ來つて、之を順序正しく而かも簡潔に面白く記述した文章である。かうした文章は此の種の思想表現に對する模範文として採用することも決して誤つてゐないと信ずる。

### 區分

- 第一時 第一節(自二十四頁四行)を授く。
- 第二時 第二・三節(自二十五頁七行)を授く。
- 第三時 全文の復習及び應用。

### 準備

機械圖の二三種 繪畫・彫刻の二三種

### 教法

#### 第一時

▽第一節を授く。

- 一、各自をして自由に一讀させる。
- 二、主要の語句及語法等につき問答する。

#### (1) 語句上

不自由    サスル    サクワン    船頭    農夫    世ノ中ガ進ムニシタガツテ    イロイ  
 ロナ機械    ハブケルヤウニ……等

#### (2) 語法上

不自由デス。    (持ツコトガ出來マス。  
 不自由デセウ。    (持ツコトハ出來マセン。  
 (大工ガ家ヲ建テルノモ、    (ハブケルヤウニナリマシタ。  
 大工ガ家ヲ建テルコトモ。    (ハブケルヤウニナリマシタガ。

- 三、讀み方を檢閲し、それから各自をして自由に二三回讀ませる。(此の間に教師は劣等生を指導する)

#### 四、内容の吟味

記してある種々の事例につき、考へもさせたり、實物・標本・繪畫等を實見させたり、經驗を想起させたりして、手の働きの靈妙なことをよく感味させる。



五、誦讀の練習

個人々々に自由に、又指名して。

六、漢字の書取

不自由 帶 大工 家を建つ 船頭 農夫 機械……等。

第二時

▽第二・三節を授く。

第一時に準ずる。但し其の他に於て注意すべき點は次の如くである。

(一) 問答すべき主要の語句。

美シイ繪 見事ナホリ物 樂器 スベテ 仕事ノ本 手ツダヒ 手が足りナイ  
フトコロ手 多ケレバ多イ程……等。

(二) 問答すべき主要な語法等。

繪チカイタリ。 (感心サセルノモ。  
繪チカク。 (感心サセル。  
手ヲヨクハタラカセル人。 (出來マスマイ。  
手チハタラカス人。 (出來マス。

(三) 書取るべき語句。

美シイ繪 見事ナホリモノ 感心 樂器 仕事ヲ助ケル 國ガ盛ニナル 遊ン  
デキル 家ガ衰ヘル……等。

第三時

▽全文の復習及び應用。

一、各節によませて、そこに於ける質疑に應答する。また教師より主要の語句・語法等につき問答する。

二、内容の要點について吟味する。

三、句法の變化につき問答する。(教材の「文章」の部参照)

四、思想の表現法につき問答する。(同上)

五、話方の修練。

- 1、手の働きの靈妙なことにつき話させる。
- 2、手の働きの甚大な効果につき話させる。
- 3、手を働かす人と働かさない人とは、國家に對して及ばず影響等につき話させる。

六、家庭の課題。

(一) 語句の適用(短文作爲)



不自由 サスル 進ムニシタガツテ ヤハリ 出来マスマイ プラ／＼……等。

(二) 次の點線をうづめて纏つた文にさせる。

(イ) 人が若シ手ガナカツタナラバ……………モ出来マセン。

(ロ) 大工ガ家ヲ建テルノモ……………皆手アスルノデス。

(ハ) ……………手ノハタラクデセウ。

(ニ) ……………出来マスマイ。

(ホ) ……………多ケレバ多イ程盛ニナリマス。……………多ケレバ多イ程衰ヘマス。

教授上の注意

- 一、本課を授ける時、前習の目のなき學者即ち埒保己一と連絡して、目・耳・口・手の四つは古來から知識の四大門と稱せられる所以を簡短のべて、それから本課の教授に入るがよい。
- 二、語句中抽象的のものも少なくないから、必ず實例又は實物等を示して具體化することを怠つてはならない。
- 三、手の靈妙の作用、及び之が效果の偉大については、十分兒童の考察に訴へ、また教師も適當に補説して理解させるがよい。
- 四、本文は餘程句法の變化に富んでゐるから、之を知らしめることも忘れてはならない。また本文は猶此の種の模範文として適當であるから、思想の表現についても特に指導する所ありた

い。

五、綴方と連絡して「目」とか「口」とかいふ題をだして、本文から得た暗示を基礎として創作させることも賢い仕事であらう。

備考

手の話

目・耳・鼻・口・手・足などは、いづれも人身に附屬してゐる道具のうち甚だ大切なるものながら、其のうち手ほど效用の廣いものではなく、また手ほど自由自在に心まかせに使はれるものはない。目は、開いてゐる間は、どんないやな物をも見ぬわけにゆかぬ。耳も塞ぐか、寝ているか、若くは無感覚にならぬ限りは、どの様な不快な物音をも聞かればならぬ。鼻や舌の働きもまた其の通りで、持主の心任せにはならぬ。しかし、只手のみは持主の好み次第に働き、目や舌の代理までもつとめる。盲人は手を目の代りにして探りあるき、啞者は舌の代りに手眞似をして、その思ふことを人に通ずる。

人のあらゆる慾望を實行するものは手である。ほしいと思ふ花を折るも手、心地よき音楽を奏するも手、字を書くも手、繪をかきも手、紙を把るも手、裁縫をするも手、器械を動かすも手である。若しも手が全く働きを止めたならば、食物もたべられまい。醫者も診察に困らう。藥劑師も藥を盛ることが出来なからう。

蒸氣機關の發明、顯微鏡の製作、家屋の建築、橋梁の架設、著述、紡織、凡そ人のすること、手の力を借らぬものは殆どない。學者も、發明家も、官吏も、實業家も、郵便配達も、皆手のおかげでそれ／＼の業を行ふ。工匠は手に鋸、鍛冶は手に鎚、農夫は手に鍬、坑夫は手に鋤、商人は手に算盤、畫工は手に筆、軍人は手に銃、手に何物をも持たずして働くものは殆ど無い。要するに人體に附屬してゐる道具のうちで、手ほど重寶なものはないが、道具である以上は用ふる人次第で、結果の善悪が生ずる。使用者が悪人なれば手は第一に悪事を助ける。手の所業はその持主の品性を表はすものゆゑ、手の使ひ方は慎ま



ればならぬ。

手についての誡め一つ。

「持つものは何であらうが、我が手は我が全力を傾けて使へ。」(坪内逍遙)

### 第八 お手玉

#### 要旨

形式上では新文字の読み方、書き方。難語句の意義。語法等に關する知識を授けて本文の讀解に習熟させる。内容上でも本歌の意味を理解させると共に、この優美な遊びに對し興味をそゝるを要旨とする。

#### 文字

「投」——形聲文字で、物をなげうつことである。傍は「シユ」であつて音符である。漢音は「トウ」、吳音は「ツ」で、訓は「ナグ」である。

「紫」——形聲文字である。ムラサキの帛の義であつたが轉じてその色にいふにいたつた。此は音符である。音は「シ」で、訓は「ムラサキ」である。

「縦」——形聲文字である。絲でしまれるを緩べはなす義である。故に絲扇をかく。轉じて「ハ

ナツ」・「ユルス」・「ホシイママ」等の義となすに至つた。従は音符である。また經に通じ「タテ」の義となす。漢音は「シヨウ」、吳音は「シユ」で、訓は「ハナツ」・「ユルス」・「ホシイママ」・「タトヒ」等である。

#### 語句

「お手玉」女童の玩具である。小さい布帛の袋に、赤小豆などを入れて縫ひとち、これを投げ受けなどして遊ぶものである。「五つのあつかひ」五つのお手玉を投げ受けすることをいふ。「一つに受けて」五つのお手玉を一同にみんなをうけるのをいふ。「さらりと投げれば」一つに受けた其のお手玉を、こんどは残らずみんな投げ上げるをいふ。「花もやう、花もやう」五つもお手玉がみだれて落ちる有様は、まるで花の散り落つるやうであるの意。「あやに飛んだり」五色のお手玉がかう何か花模様のやうに美しくとぶのをいふ。「ちどりにぬけたり」彼の千鳥といふ鳥は群集して水邊に廻り飛ぶ所から、こゝはそれに比喩をとつて、五色のお手玉が入りまじつてまはりとぶさまをいふのである。「上・下・縦・横」普通縦といへば上下をいひ、横といへば左右をいふ。従つて上・下・縦・横は上・下・上・下・左・右といふ譯にもなるが、こゝはこんな拘泥した意味にとつては悪いので「上・下に、右・左に」の意味にして知らせるがよい。「まづく」一貫といふのは目方の意味でなく、お金の意味である。即ち昔のお金の勘定法をとつたのである。こゝは何となくかう親しみ



のある言葉を用いたのである。

文章

本文は言ふ迄もなく一種の韻文である。三聯から出来てゐて、少女が五色のお手玉を巧みに文にもてあそぶ所を面白く歌つたのである。即ち第一聯に於ては、少女どもが五つのお手玉を、或は一つ一つに、或は一緒に纏めて、或はまた離して、或はまた合してあつかうその手際はまことに巧妙で、それがまた花模様のやうに見えて、本當に奇麗なことである。

といふ所を歌つたのである。第二聯に於ては

白・黒・赤・青・紫の五色のお手玉があやにとんだり、ちどりにぬけたりして、その飛びかひ、行きかふ有様は、丁度胡蝶が上下に舞ひ、左右に踊る姿に似てゐて、誠に美しいことである。

といふ所を歌つたのである。第三聯に於ては、

輝く少女どもが五色のお手玉を或は上下に投げたり受けたり、或は左右に投げたり受けたりする手際は誠に見事なもので、殊に最後に五つとも残らず受けとめて、之を揃へて「先づく一貫文貸しました」といふ所は誠に花やかなものである。

といふ所をうたつたのである。本當に美しく且つ面白く出来て居る。而してその格調は

八 八

八

七

八

八 八

の律動を各聯毎に繰返したることになつて居る。比較的自由な所は所謂彼の自由詩に近いものと見てよい。

区分

第一時 全文を授く。(形式上の教授に重きを置いて)

第二時 全文を授く。(内容上の教授に重きを置いて)

教具

五色のお手玉。

教法

第一時

▽全文(形式上に重きを置いて)

第八 お手玉



- 一、學習的動機を喚起し、それから各自をして自由に讀ませる。
  - 二、主要の語句・語法等につき問答する。
  - 三、讀み方を檢閲し、それから各自をして自由に二三回讀ませる。
  - 四、内容につき問答する。
  - 五、誦讀練習——各自自由に、また指名して。
  - 六、書 取。
    - 手先 投く 白・黒・赤・青・紫。 飛びかふ 蝶のまひ 縦・横 残らず揃ふ
- 一貫文
- 第二時
- ▽全文(内容に重きを置いて)
- 一、各聯毎に指名して讀ませる。
  - 二、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。
  - 三、内容の玩味。
  - 四、前記「文章」の部を参照し、また彼等の經驗とも交渉して十分に鑑賞させる。
  - 五、律動に従つて自由にまた一齊に朗讀させる。

五、前文を奇麗に書取らせる。

教授上の注意

- 一、韻文教授に於ては鑑賞が主であつて、理解が主でないと言ふ所から、語句の取扱を粗末にしたり、内容の理解を輕視したりする傾があるが、私共は全くの理解を離れて鑑賞が無いといふ考であるから、語句についても、また内容についても、他の文と同様に明確に知らしめ、理解の上に立つて、出来るだけ深く鑑賞させる考である。
- 二、所中中にはその内容を明瞭に理解せんがため、殊更に之を散文に譯して、また譯させたりして取扱ふものもあるが、私共はこれは絶対に不賛成である。韻文はどこまでも韻文の形その儘に於て理解もさせ、また玩味もさせたい。韻文を散文に改作することは作者に對して慥かに一つの罪惡である。
- 三、韻文を朗讀させるには、其の韻文に流動するリズム即ち作者の呼吸にふれて讀むやうにしなければならぬ。之が韻文朗讀上大切な一要件である。
- 四、すべて韻文に於ける語句は、餘り科學的に解釋してはならない。それは音律の都合上餘儀なくされることが往々にあるからである。例へば本韻文に於て「上・下・縦・横」の如き、また「ちどりにぬけたり」の句の如きはそれである。其の他文體に於てもまた然りである。例へば本韻文



に於ける「かしました、かしました。」の如きはそれである。どこまでも、文學的に解釋していかなければならない。

### 第九 藤原保昌

#### 要旨

形式上では新文字の読み方、書き方。難語句の意義。語法等に關する知識を授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では感興を以て讀んで行くうちに、保昌の大膽不敵而かも悠々相迫らざる所の行動を味はさせるを以てその要旨とする。

#### 教材

##### 文字

「盜」——會意文字で、「皿」をのぞいた上部は「ヨダレ」の意味で、皿の中にある食物を見てまだれを流し、私かに之をぬすみ取る義である。漢音は「タウ」で、吳音は「ダウ」で、訓は「ヌスム」である。

「衣」——象形文字で、人がきものを着た形を象つたのである。漢音は「イ」で、吳音は「エ」で、訓は「キモノ」「コロモ」等である。

「服」——會意形聲文字で、偏は舟の意、傍は治める義、即ち舟の中で人が事を取り用ひる義である。轉じて仕事に従ふ義となつた。漢音は「フク」で、吳音は「ブク」、訓は「キモノ」「キル」「シタガフ」等である。

「如」——會意形聲文字で、隨從する儀である。婦女子の言は從順で逆はない所から女と口とを合せて其の義を示したものである。又從順で家長の言のごとく行ふ音から轉じてゴトシ（相比べて異なること）の義となす。女はまた音符である。漢音は「ジョ」で、吳音は「ニョ」で、訓は「ゴトシ」等である。

「恐」——形聲文字で懼れる義である。故に心をかく。音は「キョウ」で、訓は「オソル」である。

「武」——會意文字で戈と止の合字である。人君が干戈の威力によつて、兵亂を未發に止める義である。轉じて威力・勇氣の義となる。漢音は「ブ」、吳音は「ム」で、訓は「タケシ」である。

「與」——會意文字で、組合ふ、徒黨、共に等の義である。音は「ヨ」で、訓は「クミス」「アタフ」「トモニ」「アヅカル」等である。

「語」——形聲文字である。論難應答する義である。故に言偏をかく。漢音は「ギョ」で、吳音は「ゴ」で、訓は「コトバ」「カタル」等である。

#### 語句



「昔」今から約九百年前に當る。「袴垂」盜賊のあだ名。心は太く、力は強く、手はき、足は早く、人の物をとるを以て我が役目としてゐた男。「身分いやしからざる男」身分は貴賤上下の階級をいふ。こゝは藤原保昌をいふ。しかしこゝでは保昌といふことを知らしめない方がよい。「氣色」ケシキ。こゝでは「有様」の意にして知らせる。「見送る」みかへる。ふりむいて後を見る。「氣おくれして」こゝでは「おちおそれて」の意にして知らせる。「吹止めて」フキヤめて。「地にひざまづく」地に膝をつけてかむこと。「にぐることもかなはず」「にげることも出來ず」の意にして授ける。「藤原保昌」大膽で武藝に達し、當時源頼信と其の名をひとしくし、其の上和歌の道にも達してゐた人である。「よからぬ業」盜賊することをいふ。

文章

本文は今昔物語にある原文をかく適當に加減して兒童向のものにしたのであらう。今大體に互つて内容を味つて見るならば次の如くである。

「昔袴垂といふ盜賊ありき。或夜、着物をはぎ取らんとて、町はづれに出でて、人の來るを待居たり。」——都の人も鄙の人も、名だけを聞いてもぶろくと振ふほどに恐つてゐるどろぼうの大將袴垂が、のそくと都に出て來て、町はづれの樹の小暗き影にかくれて人の來るのを待つてゐるとは、何と物騒なことであるまいか。

「夜中頃になりて、身分いやしからざる男、暖げなる衣物をつけて、たゞ一人ふえを吹きながらすぎ行く。」——肌寒い月明の夜に悠々と笛吹きながら月下に歩を運ぶ一人の風流人はそも何人であらうか。

「飛びかゝつてはぎ取らんと思へども、餘りに落附きたる様子に氣をのまれて、近よりがたし。」——先ほどから樹影にかくれて人の來るのを待つてゐた彼の賊の首魁が「やあ此奴、よいえものだぞ、よしよし」と獨りうなづき、過ぎ行くを待つて飛びかゝらうとしたが、月下の笛の人の悠々として迫らざる威勢にもう氣をのまれてしまつて、いかにも近づくことの出來ない所はいかに面白味のある所であるまいか。

「後よりしたがひ行くに、その人少しも氣にとむる氣色なく、ゆるやかに歩み行く。」——我が背後に我を狙ふ曲者ありとも知らず、悠々と笛を吹きながら行く有様は實に地上たゞ我獨りの境地である。

「足音を立て、走りよれば、ふえを吹きながらしづかに見返る。ますく氣おくれして、又元のまゝにしたがひ行く。」——賊魁の故意の足音にも驚かず、笛を吹きながら、靜かに見返る所は、威風堂々、眞に地上の何物でも吹き飛ばす概である。

「いよく心を決し、刀をぬきて切りかゝる。この度はふえを吹止めて『何者だ』としかれる。」



聲、身もちぢむやうにて、思はず地にひざまづく。」「何者だ」と大喝したその一聲は、實に秋水したる劔よりも鋭い。この鋭い一喝にあつて五體がちぢみ思はず跪いた所は、いかにも小氣味よく感ずる。

「聞きたることもある名なり。我につきて我が家に来れ……。」泥棒の大將だと聞けば、「おのれにつくい奴。今宵遇つたのが幸ひ、貴様の首を貫つた。」と殺すか、懲すかするのが普通なのに、「我が家に来れ。」と一言いつたきり、また元の如く悠々と笛吹きながら行く所は、實に大膽不敵、また餘裕綽々たる境地であるまいか。

「今はにぐることもかなはず、恐るゝ後にしたがひて、つひにその家に至る。」「大膽の綱にまた心の餘裕の繩に縛られて、するゝと引きずられて、とうゝ月下の笛の人の家にいつた所は、泥棒の大將もかうなつては滅茶苦茶だ。先には猛虎の如く、今は脱兎のやうで、氣味のよい中にも何だかまた可哀相な感じもする。

「何人かと思へば、その頃武名かくれなき藤原保昌なり。」「賊魁袴垂の驚きはどんなであつたらう。此の時の彼の面こそ本當にみものであつたに違ひない。本當に感興の湧く所である。

「これを取りて行け。よからぬ業して、人を苦しむることなかれ。」「こゝこそは實に英雄の眼にも涙あり、豪傑の胸にも情ある所で、罪を悪んでも其の人を悪まず、優しく言ひ聞かせてかへ

す所は、保昌その人の高雅な而かも奥床しい胸裏を語つてゐるものである。

「これ程恐しかりしことなし。」「流石の賊魁袴垂も餘程恐かつたと見える。呵々。

### 區分

第一時 全文(形式上に重きを置いて)を授く。

第二時 全文(内容上に重きを置いて)を授く。

第三時 全文の復習及び應用。

### 教具

挿繪を擴大した掛圖。

### 教法

#### 第一時

▽全文(形式上に重きを置いて)を授く。

- 一、目的を告げ、學習の動機を喚び起し、それから各自をして各自由に一讀させる。
- 二、彼等の質疑に應答する。また教師よりも主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして二・三回讀まさせる。
- 四、内容につき問答する。



五、読み方の練習を行ふ。

二三児童を指名して讀ませせる。また各自をして自由に讀ませせる。

第二時

▽全文(内容の玩味に重きを置いて)を授く。

一、指名して二三人に讀ませせる。

二、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。

三、内容の玩味

教材の「文章」の部を参照し、出来るだけ深く感味させる。

四、朗誦讀

個人的に、また一齊的に。

五、書取

盜賊 着物をはぎ取る

夜中頃

身分いやしからざる男

衣服

落附きたる様子

氣色

足音

見返る

切りかゝる

ふえを吹止む

盜人の大將

前の如くふえを

吹く

恐るく

武名かくれなき人

綿入一枚を與ふ

よがらぬ業

人に語る

第三時

▽復習及び應用。

一、自由に一讀させて、質疑に答へる。

二、主要の語句・語法等につき問答する。

三、内容につき問答する。

四、次の文語を口語になほさせる。

盜賊ありき

はぎ取らんとて

待居たり

身分いやしからざる男

はぎ取らんと思へども

近よりがたし

走りよれば

聞きたることもある名なり

我が家に来れ

にぐることもかなはず

武名かくれなき藤原保昌なり

よがらぬ業して、人を苦しむることなかれ

言聞かせたり

これ程恐しかりしことなし……と言ひたりといふ

五、語句の適用

次の語句一つ一つをつかつて短文を作らせる。

身分 暖げな衣服

はぎ取らうと

ゆるやかに

しづかに見返る

氣をのまれて

氣おくれして

ひざまづく

ふるえながら

恐るく

〔注意〕 若し時間が足りなかつた場合には此の「五」は家庭に於ける課題とする。

六、話方の修練。

本課の内容を話させて、話方の修練を行ふ。



教授上の注意

- 一、本課は文語體であるから、之を口語に譯する能を養ふことをも忘れてはならない。
- 二、本課に於ける語句中「身分」「暖げなる衣服」「氣をのまれて」「氣おくれして」「地にひざまづく」「よがらぬ業」等はちよつと分り難いものに屬するから注意して授ける。
- 三、叙述上に於て、主人公即ち保昌の名は之を初めからあらはさないで、その進行につれて次第に分つて來るといふかき振は中々に面白く、且これまでの文には殆どなかつた形式でもあるから、特に此の點を知らしめるがよい。

備考

綾垂保昌に逢ふ事

むかし袴垂とて、いみじき盗人の大將軍ありけり。十月ばかりに、きぬの用ありければ、きぬすこしまうけんとして、さるべき所々うかひありきけるに、夜中ばかりに人みな静まりはてし後、月のおぼろなるに、きぬ數多きたりける主の、指貫のそはははきみて、きぬの狩衣めきたる着て、たゞ一人笛吹きて、ゆきもやらすれりゆけば、あはれこれこそ、我にきぬえさせんとて出でたる人なめりと思ひて、走りかゝりて、衣をはがんと思ふに、怪しく物のおそろしく覺えければ、副ひて二三町ばかり行けども、我に人こそ付きたれと、思ひたるけしきもなし、いよ／＼笛を吹きてゆけば、試みんと思ひて、足を高くして走りよりたるに笛を吹きながら見かへりたるけしき、とりかゝるべくも覺えざりければ走りのきぬ。かやうに、あまたたび、とさまかうさまにするに、つゆばかりもさわきたるけしきなし。けうの人かなと思ひて、十餘町ばかりぐして行く。さりとして、あらんやばと思ひて、刀をぬきて走りかゝりたる時にそのたび笛をふきやみて、立返りてこは何者ぞと問ふに、

心もうせて、我にもあらでついぬられぬ。又いかなるものぞと問へば、今は逃ぐるとも、よも逃がさじと覺えければ、ひはきにさぶらふと云へば、何者ぞと問へば字袴垂とんいはれさぶらふと答ふれば、さい者ありときくぞ、あやうげにけうのやつかなと云ひて、共にまうてとばかりいひかけて、又同じやうに笛ふきて行く。

この人のけしき、今は逃ぐるともよも逃がさじと覺えければ、鬼に肝取られたるやうにて、共に行く程に家につきぬ。いづ／＼ぞと思へば、攝津前司保昌といふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚き衣一ツ賜はりて、衣の用あらん時は参りて申せ、心も知らざらん人に取りかゝりて、汝あやまちすなとありしこそ、あさましく、むくつけく、恐ろしかりしか。いみじかりし人の有様なりと捕へられて後語りける。(今昔物語)

第十 豆の一ぞく

要旨

形式上では、新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では藤と豌豆との問答を通して、豇科植物の形態・特徴・效用等につき知らしめ、傍ら自然物を愛護する情念を養ふを以てその要旨とする。

教材

語句

「豆の一ぞく」豆の同種屬即ち豇科植物をいふ。擬人文であるから「一ぞく」とつかつたのであ



る。「かきの外」庭と鳥との間に垣が結んであるのである。故にこゝに「かきの外」とは其鳥をいふのである。「親類」シムルキ。血統の相連続して居る間柄をいふ。「みつゞき」「ちつゞき」「親戚」「親族」など皆同じ。「お心やすく」心に隔てなき意。即ち互に懇意に交際して行くのをいふ。「始めてうけたまはりました」始めて知りました。又は始めて聞きましたの意。「羽形」ハネガタ。鳥の羽の如き形をいふ。「大豆・小豆」さゞげ・そら豆・なた豆（備考参照）「つる」「つら」の轉。或種の植物の莖が細長く延びて物に絡り、又は地に匍ふものの稱である。朝顔や瓜の莖の如きはそれである。「なるほど」對者のいふところを肯定していふ時に使ふ詞である。「大きななり」「なり」は状態又は形態の意。こゝは「大きなさま」といふ意味である。「れんげ草」（備考部参照）

文章

本文は藤と豌豆とを人間化して、二者の物語を叙述した、所謂擬人文である。

擬人文に於てはその文を通して是非知らなければならぬ事實といふものがある。従つて本文に於ても、藤と豌豆との物語を通して、豇科植物の種類及びそれ等の特徴などを知るといふことが、即ち知るべき事實である。尙本文について

「あなたと私は親類ですから、これからお心やすくねがひます。」——この「親類」といふ一語が豌豆と藤とは同種属の植物即ち豇科植物であるといふことを意味してゐるのである。

「おたがひによく似てゐるではありませんか。第一あなたにも私にも豆がなります。又葉は羽形で、二枚づつ向ひ合つてゐますし、花は同じやうに蝶の形をしてゐます。大豆・小豆・さゞげ・そら豆・なた豆などは、みんな私どもの親類です。私も一ぞくの中には、つるになるものとならぬものがあります。」——こゝに豇科植物の特徴と種類とが物語られてゐる。即ち

- 1、豆がなること。
- 2、葉は羽狀即ち複葉であること。
- 3、花は蝶の形をしてゐること。
- 4、大豆・小豆・豇豆・蠶豆・刀豆——は種類である。

は特徴で、

「さうでございますか、私はちつとも気がつかずにゐました。なるほど私にも豆はありますが、鳥の藤豆さんとはちがつて、食べられません。大きななりをしてゐながら役に立たないで、まことにおはづかしうございます。」——こゝは同じ種属の中にも、亦それ／＼特異の點あることをいふのである。即ち二者には同じく豆ができるけれども、一は人の役に立ち、一は人の役に立たないこと即ち效用について言つたのである。

「あなたは美しい花だけでたくさんです。あなた程大きくてりつばな花ぶさを持つてゐるも



のは、親類の中には外にありますまい。種類中で小さくてかはいらしいのは、あの春の野に咲くれんげ草さんでございませう。――こゝは藤は假令その豆は人の役に立たなくとも、房々としたその美しい花は人心の慰安になる。また蓮華草の如きは誠にちつぽけな花であるけれども、其の姿はいかにもかはゆく春の野邊を飾つて人目を喜ばせることを言つたのである。要するに豈科植物中に於ても亦自らそこに特異の點があつて、いづれもその特色を以て自然の中に活き、また人生と密接の關係あることをのべたのである。以上の諸點は面白く讀んで行く中に、是非自らさつて行かなければならない事實である。

次に叙述の上から眺めて見るに、豌豆が「あなたと私は親類ですから云々」といつたとき、藤は「始めてうけたまはりました。どういふわけで親類なのでせう。」とおどろいて問ふ所は中々に面白い。そこで豌豆は得意な顔付で、喋々とその理由をのべると、藤はその條理ある説明に肯いて「さうでございますが、私はちつとも氣がつかずにゐました。……大きなりしてゐながら役に立たないで、まことにおはづかしうございます。」といつた所は、藤その者の謙遜な態度の外に

- 1、人は體が大きくても知恵がないと駄目だ。
- 2、大男・兎角知恵がまはりかねる。

といつたやうな諷刺的な滑稽的な所も見えて中々に面白い。豌豆はすかさず「あなたはそれのお美

しい花だけでたくさんです。あなた程大きくてりつばな花ぶさを持つてゐるものは、種類中には外にありますまい云々。」と藤其の者の特徴を捉へて辭令巧みに悲觀の彼を慰安する所も中々に抜目なく、また讀者の感興をもそゝる。「親類中で小さくてかはいらしいのは、あの春の野に咲くれんげ草さんでございませう。」といつた所は、不偏不黨に仲間どもの美點を雄辯に語つたもので、何とも言へぬ面白味がある。

本文に於てはかうした叙述上の妙味のある所をも出来るだけ知らせてやるがよい。

### 區分

- 第一時 全文(形式上に重きを置いて)を授く。
- 第二時 全文(内容上に重きを置いて)を授く。
- 第三時 全文の復習及び應用。

### 教具

藤・豌豆・大豆・小豆・豇豆・蠶豆・刀豆・藤豆・蓮華草に於ける實物・標本又は繪畫等。

### 教法

#### 第一時

▽全文(形式上に重きを置いて)を授く。

第十三豆の二ぞく



- 一、目的を指示し、各自をして自由に一二回讀ませせる。
- 二、質疑に應じ、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二三回讀ませせる。
- 四、内容につき問答する。
- 五、讀み方の練習を行ふ。

第二時

▽全文(内容の吟味に重きを置いて)を授く。

- 一、二三兒童を指名して讀ませせる。
- 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、内容の吟味を行ふ。

教材の「文章」の部に記してある所をも參照し、確實に理解させ、また出来るだけ深く感味させる。

四、誦讀の練習。

各自をして自由に、また指名して讀ませせる。

五、書取。

豆の一ぞく 藤の花 紫の花 めんどろ 親類 羽形の葉 大豆 小豆  
 藤豆 美しき花 れんげ草 等

第三時

▽全文の復習及び應用。

- 一、よく意味を意識しながら一讀させる。
- 二、次の如く問答する。
  - 1、垣の外にゐた豌豆は庭の藤に向つて何といったか。
  - 2、藤はそれをきいて何と答へたか。
  - 3、それに對し豌豆は何と説明したか。
  - 4、それを聞いて藤は。
  - 5、それに對し豌豆は。
- 三、批判。

藤と豌豆との問答に對し問答的に鑑賞的批判を行ふ。

- 1、内容上から、
  - 2、叙述上から、
- (附)地の文と對話文との區別をも知らしめる。

第十 豆の一ぞく



四、次の問を書いて答へさせる。

- 1、豆の一ぞくには……………などがある。
- 2、豆の一ぞくにおいて似てゐる所は……………等である。
- 3、藤の豆は……………けれども花は……………である。
- 4、れんげ草の花は……………けれども……………である。

五、話方。

本文に於ける藤と豌豆との對話を通じてその知つた所を話させる。

〔注意〕 若し時間に餘りがなかつたならば、(四)は家庭課題とする。

教授上の注意

- 一、本課は前述の如く豌豆と藤との對話に假託して豆科植物の特色を知らさうといふ考なのであるから、擬人文の特色を破らず面白く讀んで行くうちに、其の根柢の要求を自らさとして行くやうに取扱はなければならぬ。
- 二、本課の如き感覺的材料に於ては、必ず實物又は繪畫等を準備して、それ等に於ける異同を觀察比較させて内容を明かにすることを怠つてはならない。
- 三、本文は地の文と對話文との二から出來てゐるから、是等の區別を知らしめることも形式上必要かと思ふ。また二者の談話に於ても、各其の言ふ所に禮讓あり、また條理も立つてゐるから、さうした點もよく知らしめる。また語句に於ても情趣に富んだものが多くあるからよく味はさせるがよい。
- 四、本文を讀むときの兒童の態度には二つの場合あるを要する。即ち一つは同情的の態度で、今一つは批判的の態度である。甲者は擬人文として讀むときに、乙者は此の文を通して豆科植物の種類や特徴を識得するときに執るべき必要な態度である。

備考

豆の一族

豆の一族即ち豆科植物は、多くは一年生又は二年生の草本なるが、稀には多年生の木本もあり。莖は直立又は蔓状をなし、葉は托葉なり。概ね羽状複葉にして互生す。併し各小葉は對立す。花は五個の花弁と五個の萼とよりなる。花弁は不整齊にして蝶形なり。内部には十個の雄蕊と一個の雌蕊とあり。果實は多くは莢をなし、其の中に種子を藏す。根には根瘤と稱する小なる瘤状のものあり。是即ち一種の微菌の寄生せる部にして、このもの空氣中より其の遊離窒素を吸收して窒素化合物を作り、其の宿主を養ふ。豆科植物の種類は、我が邦に産するものみにても、百五六十種を下らず。木本のものには「藤」、「合歡木」、「花蘇芳」、「さいかち」、「むれすいめ」、「はぎ」などあり。草本のものには「豌豆」、「大豆」、「くす」、「さしげ」、「そらまめ」、「れんげさう」、「みやこぐさ」などあり。而して花を賞するものには、「藤」、「花蘇芳」、「れんげさう」などあり。種子を食するものには、「大豆」、「小豆」、「さしげ」、「そら豆」などあり。肥料として栽培するものには、「れんげさう」等あり。



豆科に屬する纏繞植物なり。花は蝶の形をなして總の如く下垂し、長きものは五六尺に及ぶ。而してその總ののぶるともに、蕾をその先に生ずるが故に、花のながめは極めて長し。花の色は通例紫なれども、中には白色なるものもあり。北米・日本及び支那をその原産地とす。公園・學校園又は廣き庭園を有する家などにありては、池を設け其の下に棚を作り、之に藤を這はしむ。春は花を賞すべく、夏は涼蔭を得べし。腐熟せる人糞・尿及び過磷酸石灰を施せば花の色をまし、總を長からしむ。藤の豆は食用に供せられざれども、嫩葉は食用に供せられ、或は茶の代にも用ひらる。花もまた藤花葉と稱し、燻てて搾り酢味噌にて食ふことあり。藤蔓は非常に長くはびこり、且堅靱なれば之を編みて橋を作り、懸崖に架け渡せる所あり。又春の末發芽に先だちて之を取り、皮を剥ぎ、釜に入れ、木灰を加へて煎じ、取出して再びその外皮を去り、晒して藤布・索繩或は草履の裏等に用ふることあり。

豌豆

豆科植物の蝶形亞科豌豆屬なり。莖は蔓をなして二三尺に及び、卷鬚ありて他物に纏繞す。莖は圓くして互生し、大形の托葉あり。花は四五月頃開き、二個の花梗に二三の淡紫又は白色なる蝶形の花を著く。莢は蠶豆に似たれども、薄くして扁平なり。花實共に白きもの上品にして味佳なり。其の他、舶來種にして矮生・蔓生・硬莢・軟莢のものあり。色も種々ありて一様ならず。殊に佛國種の大莢豌豆と稱するは、豌豆中の良種に屬し、莢甚だ廣大に實も粒も大きく、熟すれば褐色地に赤紫色の斑點を交へ、肉軟く味よく收穫また多量なり。俗にフランス豆と稱するものは是なり。札幌豆は、粒、扁圓にして青色を呈し、皮軟く味良く、煮て食するに適す。又英國種の「チャンピオン」オア、イングランドには有名なる良種にして、粒大に綠色を呈し、品質また佳良なり。

大豆

豌豆の一種に莢豌豆といふがあり。花白くして種亦白し。この種のものには、嫩莢を種子と共に煮て食すること多きにより、この名あり。市街地に近き土地にては、このものを培養して、春夏の交に市場に出し、巨利を占むるもの少からずといふ。

豆科豌豆屬の一年生草本なり。莖直立、高さ三尺に達し、莖葉共に細毛密生す。複葉は長柄を有して互生す。小葉は卵形に

して三個あり。七月頃白或は紫色の小蝶形花を著け、兩體雄蕊を有す。果實は有毛の莢なり。種類極めて多く、成熟期の早晩によつて果實の色等を異にす。いづれも多大の滋養分を含めるを以て、米につぎて需用多し。殊に黑豆と白豆とはその利用最も廣く、或は煮、或は炒りて之を食ひ、又菓子料となし、味噌を作り、納豆を製する原料とす。白豆は又「もやし」として食ひ、味噌・醬油を造り、豆腐・湯葉を造り、挽きて黄粉となし、搾りて豆油を採るなどに用ふ。

小豆

豆科豌豆屬の一年生草本なり。莖は剛直にして光澤を有し、高さ二尺許に達すれども、その肥大なるものに至りては、往々梢頭少しく蔓をなして延長するものあり。葉は三個一帯にして品字形に排列し、各個の葉は圓くして、屢と二三の尖頭を成すことあり。葉の間毎に寸許の花莖を出して黄色の小花を簇生す。莢は通常下に垂る。早熟と晩熟とあり。甲を夏小豆といひ、乙を秋小豆といふ。子實は粳米に交へて炊き又強飯にまじへたきて慶事に食し、或は餛に製し、或は粥に交へて食する等、その用途頗る廣し。

さしげ

豆科豌豆屬の一年生草本なり。葉は小豆に似たれども、稍と厚くして尖れり。莖は毛茸なく、蔓をなして他物に纏繞し、長さ數尺に及ぶ。花は大豆の如く蛾形をなせど、や大きくして淡紫色を帯ぶ。莢は多くは六七寸許にして、稀には二尺以上に伸ぶるものあり。種類頗る多し。中にも十六、十八、二十三豆などは、莢頗る長く子實も亦多し。種子は、半熟のものは莢と共に煮て食し、成熟のものは、自ら豆の代用として餛などに製せらる。種類多し。

そら豆

豆科蠶豆屬の二年生草本にして、高さ二三尺に及び、莖は毛なくして直立す。葉は豌豆に似て厚く、淡緑なり。花は淡紫色にして中心黒く蛾形をなす。莢は三四寸許にして空に向ひ直立す。未熟の種子は煮て食すること多けれど、成熟せるものは炒りて食す。又菓子料の餛ともなり、味噌・醬油製造の原料ともなる。

なた豆

第十 豆のそと



苳科豌豆屬の草本にして莖は蔓をなし葉は紅豆に似たれど大なり。花もまた大にして紫色を帯ぶ。莢は肥大にして皂莢の如く、長さ八九寸、幅一寸許、實の熟したるものは淡黄色を帯びて光澤あり。これに紅白二種あり。前者は成熟後煮て食し、後者は莢と共に漬けて香物とす。糠漬・粕漬・福神漬等、その漬け方に種々あり。

蓮花草

蓮華草、紫雲英とも書く。又「けんげ」ともいふ。苳科苳密屬の一年生の草本にして原野到る處に生ず。殊に春田地に苗を生じ、紅紫色の花を綴りて一面に蔓延するさまは頗る美觀なり。莢は黒色にて三稜あり。田畠に鋤込みて肥料とす。

藤豆

藤豆は豌豆屬の草本なり。莖葉共に菜豆に似たれど、稃と白色を帯び、蔓長く伸び、穗状の花を開きて多くの莢を生ず。莢は菜豆よりは短く、幅廣くして稃と白色を帯び、實は扁圓なり。莢のまま煮て食す。佳味なり。而して紫色なる花に結ぶ豆は黒褐色を呈し、白色なる花に結ぶ豆は白色を呈して小黒點あり。(以上は家庭百科事彙等に據る)

第十一 材木

要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では日常私共の使用する主なる材木につき、其の品質や用途に關する知識を與へるを以て要旨とする。

教材

文字

「栗」——會意文字、草木の實が木になつて居る義である。漢音は「リツ」で、訓は「クリ」である。

「桐」——形聲文字である。同は音符である。漢音は「トウ」で、慣用音は「ドウ」で、訓は「キリ」である。

「料」——會意文字である。米が斗の中にある義、即ちハカルの義である。轉じて廣くおしはかる、又は料理・材料等の義となすに至つた。音は「レウ」で、訓は「ハカル」である。

「床」——會意文字である。もとは牀と書いた。安身の座即ちユカのことである。木で作る所から木をかけたものである。漢音は「サウ」、吳音は「ジャウ」、慣用音は「シャウ」で、訓は「ユカ」「トコ」等である。

「机」——形聲文字である。本義はサルナシといふ一種の木である。故に木扁をかく。几は音符である。後世几の義をとつて「ツクエ」と訓するに至つた。音は「キ」である。

「銃」——形聲文字である。本義は「斧の柄の孔」のことである。故に金屬をかく。充は音符である。我が國では小さい鐵砲の義である。漢音は「シユウ」で、吳音は「シユ」で、慣用音は「ジュウ」である。

語句



「材木」ザイモク、建築・製作の料に充んために伐り出せる木をいふ。「上品」ジャウヒン。下品に對する語。品のよいこと、見えの氣高いこと等の意味がある。「建具」戸・障子・襖などをいふ。「飛行機」發動機を用ひて進行させ、空氣の抵抗を利用して浮揚させ、さうして飛行させるものである。西曆一九〇三年米人ライト氏が創めて發明し、爾後十數年の後に非常な進歩をなすに至つた。速力は高速のものは百五十哩内外、續航時間は四十時間内外である。種類には單葉飛行機と複葉飛行機とある。又水上用のものと陸上用のものもある。「材料」ザイレウ。物を造るときに用ひる其の物をいふ。尙實例をあげて其の觀念を明かにする。「チガヒダナ」四十八棚の一で、棚板を左右から上と下にくひちがひにつつたものである。「床板」ユカイタ。即ちゆかにしく板をいふ。「家具」カグ。家で使用する道具をいふ。數種の實例をあげて内容を知らせる。「鐵道ノマクラ木」マクラ木は横になつた物の下におく木をいふ。「鐵道のマクラ木」は鐵路の下に布いて軌道を支持する木のことである。「銃床」ジュウシャウ。小銃の銃身を装置する部分で、多くくるみの木で造る。「フロベラー」飛行機の推進機をいふ。畫いてまた畫いたものを見せて其の觀念を明かにする。

文章

本文は前既にいつた通り材木の品質や用途等について説明したもので、七節から成つて居る。

即ち

- 第一節—日常最も廣く用ひる材木の種類—總說
- 第二節—檜の品質及び用途。
- 第三節—樺の品質及び用途。
- 材木
- 第四節—栗の品質及び用途。
- 第五節—桐の品質及び用途。
- 第六節—樫の品質及び用途。
- 第七節—胡桃の品質及び用途。

各說

の如く出來て居る。而して各說に於ける記述振は、第二・三・四・五・六節は同一形式即ち先づ其の材木の品質を記し、次に其の用途につき説いてある。第七節だけはそれ等と異つた形式即ち先づ其の用途につき説き、次に其の品質につき記してある。併し各節に於ける句法はそれ／＼にちがつてゐる。例へば

ヒノキハ上品ナル材木ニシテ……飛行機等ノ材料トス。  
 ケヤキハカタクシテ美シキガユエニ……電車等ヲ造ルニ用フ。  
 栗ハカタクシテナガクチザレバ……鐵道ノマクラ木ナドトス。



桐ハ輕クシテ美シ……等ノ用材トスルハコレガタメナリ。  
の如きはそれである。注意すべき點である。

### 區分

- 第一時 第一・二・三節(自三七頁二行)を授く。
- 第二時 第四・五・六・七節(自三八頁一行)を授く。
- 第三時 全文の復習及び應用。

### 教具

松・杉・檜・樺・栗・桐・樅・胡桃等の標本。飛行機・汽車・電車・鋤・鍬・小銃等の模型又は繪畫等。

### 教法

#### 第一時

▽第一・二・三節を授く。

- 一、第一節を自由に讀ませせる。
- 二、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。  
語句——材木 用ヒラル、モノハ ヒノキ ケヤキ 栗 カシ クルミ……等。  
語法——最モ廣ク用ヒラル、モノハ コハ外……等。

三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませせる。

四、内容につき問答する。

實物・標本等とも交渉して確實に識得させる。

〔注意〕 第二・三節も同様に取扱ふ。

五、第一・二・三節を指名して二三兒童に讀ませせる。

六、漢字の書取を課す。

- 材木 最モ廣ク用フ 栗。 桐。 上品 社 家ヲ建ツ 建具 飛行機 材料。
- 床。板 家具 汽車 電車 ……等。

#### 第二時

▽第四・五・六・七節を授く。

第一時に準ずる。但し問答すべき語句・語法等は次の如し。

- (一) 語句——クチザレバ 家屋ノ土ダイ 鐵道ノマクラ木 タンス ハキモノ スキ  
クハノエ 銃床 飛行機のプロペラー コレガタメナリ 折レガタケレバ 強ケ  
レバナリ
- (二) 語法——マクラ木ナドトス コレガタメナリ……等。



(三)書取るべき漢字。

家屋 鐵道のマクラ木 桐 机 用材 銃床 飛行機 輕シ 強シ……  
等。

第三時

▽全文の復習及び應用。

- 一、各節毎に指名して讀ませせる。
- 二、主要の語句につき問答する。
- 三、内容につき問答する。
  - 1、各節につき。
  - 2、全體につき。
- 四、思想表現の形式及び句法の變化につき問答する。
- 五、次の點線をうづめて纏つた文になさせる。
  - (1)材木中テ最も廣ク用ヒラレルモノハ……ナドデアリマス。
  - (2)ヒノキハ……デア……ナドノ材料トシマス。
  - (3)ケヤキハ……ユエニ……ナドヲ造ルニ用ヒマス。
  - (4)栗ハ……ヤラ……ナドニシマス。
  - (5)桐ハ……美シイ……ナドノ用材トスルハコレガタメデアリマス。
  - (6)カシハ……カラ……ナドニ用ヒマス。
  - (7)クルミハ……ナドニ用ヒマス。ソレハ……デアリマス。

六、次の文語を口語になほさせる。

用ヒラル、モノハ 松ト杉トニシテ ……クルミ等アリ 家ヲ建ツルニ用ヒ 美シキ  
 ガユエニ ……造ルニ用フ ナガククチザレバ マクラ木ナドトス ……等ノ用材ト  
 スルハコレガタメナリ 折レガタケレバ 強ケレバナナリ

七、上記の材木を用ひて作つた諸種の器具の名をあげさせる。

〔注意〕 時間に餘りがなかつたならば、「六」と「七」とは家庭課題とする。

教授上の注意

- 一、本課は私共の生活上最も廣く使用する材木につき、其の品質や用途につき有要な知識を與へようと言ふ目的から特に選定した文である。だから其の考で取扱ふことを忘れてはならない。
- 二、本課は知的材料で理解が主であるから、嚴密に取扱つて其の要點を確實に捕捉させなければならぬ。文圖をつくらさせるが如きは、其の目的を達する上によき方法の一つであらう。
- 三、本教材を取扱ふ際、出来るだけ實物・標本・又は繪畫等を示して明確に理解させることを怠つ



てはならない。また應用として彼等の生活界から松・杉・桐・栗・檜でつくつた器物其の他の物をあげさせることも、それ等と人生との關係を一層深く知らしめる上に有效なことであらう。

四、本文は文語體であるから、之を口語に譯する能力も養はなければならぬ。故に各節又は全文を口頭で又は筆の上で口語に譯させることも怠つてはならない。但し其の口語をまた文語に直させるが如きは此の學年では無用である。

五、本文に於ける語句中「建具」「家具」等の如きは抽象的で、「上品」「プロペラー」等の如きは六つかしいものに屬して居るから、適當な實例をあげて、其の内容を明かにすることを怠つてはならない。

### 備考

松

松にはその種類が多くあるけれども、大體赤松と黒松との二種とする。

赤松はその樹皮赤褐色で、葉は軟弱で弱い。幹は各種の用材に、また薪炭用として其の用法が頗る廣い。根は深く地中に入つて養分を吸収する性があるから、土地の肥瘠を問はず、乾燥地にも、濕地にも、また岩石地・沙地にもよく生育する。

黒松は樹皮黒色を呈し、葉は強く且剛い。好んで海岸濕風の來る所に生育し、赤松の栽れる所でもよく堪へて生育する。四國・九州及び本州の海岸に多く之を見る。

松は其の材質強靱で且脂氣が多くて、永存に堪へるから、橋梁・土臺・土工用に多く用ひる。

杉

杉は松柏科に屬する常綠樹である。幹は建築用として、器具用として、その他電柱・帆柱・旗柱として廣く用ひる。枝及び根は薪として、葉は線香・抹香の原料として用ひ、皮は屋根を葺くに用ひる。殊に此の木の有する一種の香氣即ち木香は酒に匂を附する所から、酒樽に必ず之で造るならひになつて居る。材質は柔軟で彫刻材には不適當であるけれども、この性質は同時に實用品たるに適する。且白色の邊材に包まれる淡赤色の心材は光澤を有し、また木理直くして堅軟宜しきを得てゐるから工作を施すにほぼ都合がよい。

杉はいづれの地質にもよく生育するけれども、ことに北面又は北東面の山腹凹地を好むやうである。だから山間陰影の地に生じたものは、其の高さ二十丈、周圍二三丈に及ぶものがある。

檜

檜は松柏科に屬する喬木で常綠樹である。材は白色に少し黄色を帯び、中部は淡赤色である。脂氣に富み、且香氣高い。材質は硬軟中庸を得てゐて最も工作に適して居る。其の上水に過ふも腐敗の患少なく、日に曝すも割れ又は反るの患も少ない。故に艦船・橋梁・家屋等の材料として廣く用ひる。また指物・木型等にも用ひる。その他皮は屋根を葺き、繩を作るに用ひる。各地に産するけれども、高地のは材質最も佳である。紀伊・土佐等の地方にも良材多く産するけれども、最も名高いのは木曾山中に産するものである。

榿

榿は榆科に屬する喬木で、高さ十五六丈、周り二三丈に達する。材は淡褐色で、木理は堅緻である。粘力あつて折れず、且永く水濕に堪へる、故に造船に用ひる。その他建築・指物・挽物等の材料として廣く使用する。ことに神社・佛閣の如く永く後世に残さうとする建物には、おほむね此の木を主材として用ひる。溫暖の地によく成長する。我が國では日向の産を最も上等とし、其の他木曾山、磐城地方からも良質なるものが産出する。

栗

第十一 材 木



栗は殼斗科に屬する植物である。材は薄鼠色で澁が多い。水濕によく耐へるけれども、乾燥すると甚しく反張する性がある。此の材は色づけに適するから種々の指物に用ひるけれども、上品を製するには適しない。造船・家屋の土臺・溝板・枕木等に用ひて頗る適當である。各地に産するけれども、丹波の産を最も良好とする。筑前・石見・越後・近江・甲斐・上野・下野・奥羽・伊豫・土佐等からも良き質のものが産する。

桐

桐は玄參科に屬する落葉の喬木である。材は白色に少し淡赤紫色をおびてゐる。木理は疎大で、質が輕軟であるけれども、濕氣に感ぜず、蟲入らず、反曲の狂なく、且上品であるから、箆筒・本箱・机等の諸器具をつくり、又琴及び下駄等の材料として珍重せらる。また此の木の炭で火藥を製する。性高燥で水に遠き地を好む。奥羽・下野・武藏・丹後等には良材が産する。就中伊豆の八丈島に産するものはシマギリと稱し、木理密で頗る美麗である。

榿

殼斗科に屬する喬木である。木材は赤色を帯び、強くて折れ難いから、鋤・鍬の柄に、また車の輪をつくるに用ひる。又觀賞用として栽培もする。

胡桃

胡桃は胡桃科に屬する喬木である。我が國に産するものにはタウケルミ(胡桃)・オニケルミ(山胡桃)・ヒメケルミ(陳倉胡桃)等の種類がある。今タウケルミについて言へば、それは元朝鮮から傳來したものである。幹は高きものは六丈、まはり六尺に及ぶものがある。葉は楕圓形の複葉で光澤を有して居る。枝上に核果を結び、熟すると開裂して核を現はす。核は球形をなし、内にある仁は美味であるから乾して食用に充てる。又油をとる。材は銃床に箆筒に、其の他の諸器具を作るに用ひる。樹皮はまた染料となす。

オニケルミは本州・北海道・樺太等の山地に産し、その幹は高さ七丈、周圍八尺に及ぶ。材は銃床に最も適し、其の他建具・机・椅子・鏡臺・文房具・木履等をつくるに用ひる。近年又摺附木の軸木にも使用する。

ヒメケルミもほゞオニケルミに同じく、其の材は銃床其の他炬燵・箱類・盆類をつくるに用ひる。

第十二 ムグラモチ

要旨

形式上では新文字の読み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させ、内容上では始終地下の闇の世に生活して居る鼯鼠の形態・習性及び用途につき知らしめる。

教材

「庭」——會意形聲文字である。朝廷のナカニハの意である。屋なきを廷といひ、屋あるを庭といふ。且廷は音符である。轉じて廣くニハの義となすに至つた。漢音は「テイ」、吳音は「チャウ」で訓は「ニハ」である。

「鼻」——形聲文字である。もと自の字がハナの形を象つた文字である。漢音は「ヒ」で、吳音は「ビ」で、訓は「ハナ」である。

「掘」——形聲文字である。穴をホル義、故に手扁に屈をかく。但し屈は音符である。漢音は「クツ」で、訓は「ホル」である。

「安」——會意文字である。この「ウカンムリ」は「家」の義であつてその中に女の居る義である。



即ち安寧・静謐の義である。蓋し女は家を守るものであるからである、漢音は「アン」で、訓は「ヤスシ」等である。

「全」——會意文字である。入と王との合字で、王は玉の本字である。即ち全は純粹の玉で缺ける所もなく、またまじりけもなく、全きものをいふ。漢音は「ゼン」で、吳音は「ゼン」で、訓は「マツタシ」である。

「往」——形聲文字で偏は「タ、ズム」傍は「シャウ」の合字である。「シャウ」は又音符である。音は「ワウ」で、訓は「ユク」等である。

#### ・ 語句

「ムケラモチ」モグラモチ又はモグラともいふ。食蟲類に屬する小哺乳獸である。大き家鼠ほどあるが、眼は至つて小さく、尾もまた短小である。耳には外耳がない。前肢は短いけれども強く、土を掘るに適して居る。毛は細く且軟く、色は暗黒の茶褐色である。我が國では到る處の平原にすまつてゐる。食物は主として蚯蚓である。「モチ上ツテ」高くもりあがつてゐるのをいふ。「始終」シジユウ。初めから終りまで。しかしこゝは夜も晝も常にの意味にして知らせるがよい。「物ヲ見ナクテモヨイカラ、目ハイタツテ小サイ」自然淘汰の結果であることを知らせたい。「耳ト鼻ハヨクキイテ」目が見えないからその代りに耳と鼻との作用を鋭敏にしたので自然の造り方のいかに

も巧妙であることも知らしめる。「エ」たべもの。「イサイトキ」さあ自分の命があぶないといふとき。「トンネル」こゝでは地中を掘りつらぬいた道をいふ。「安全」アンゼン。やすらかなの意。「ミ、ズ」環蟲類に屬する蠕形動物である。體圓く細長くて、數多の環節からなつて居る。常に地中にすみ、土壤を食して居る。「往來」ワウライ。ユキキと讀んでもよいけれども、「來」はこれまでクル・ライ・キタリの三つの場合しか習つてゐないから、こゝはワウライと讀ますべきであらう。「見カケヨリハ」こゝでは形や姿を見ると、かうおとなしさうに見えるけれども實はおとなしくないのである。「トモ食ヒラスル」仲間同志をお互が食ふことをいふ。いかに残忍性をおびてゐるかがわかる。

#### 文章

本文は主として鼯鼠の形態及び奇異な習性を捉へて記述したのである。記述者は子供と見てもよし、また大人と見てもよい。兎に角自分の實見によつて知つたところを深い感興をもつて記述したのである。

本文は六節から出來て居る。第一節は庭や島の所々に土のもち上つてゐるのは、これは鼯鼠の仕業で、彼は地下の蚯蚓を捜し捕へようとして、地中を歩いたために出來たのであるといつて、これから細説に入らんとする總説に當るのである。第二節は鼯鼠の生活とその形態との關係につ



いてのべたのである。即ち眼は始終暗い地下に住んでゐるから物を見ることを要しない。従つて小さく且不完全で、ほんの言譯的にある位である。

耳は地中にあつても、常に自分の求める物の動作に對しても、また敵者の來襲に對しても敏捷に聞分けなければならない。故にこの機能は極めて鋭敏に發達してゐる。

鼻は之も耳と同様に、自分の求める物に向つて、また自分を害する敵者の來襲に對して、最も鋭敏にかぎ分けなければならない。故に此の機能も極めて鋭敏に發達して居る。

前肢は自己の進行について、また敵を追ふについて、可成迅速に土をかけ分け得るやうに發達してゐなければならない。故に前肢の發達は後肢に比して著しく大きく、且つ力が強い。而かも外の方へ向いて土を左右にかけ分けるのに都合よく出來て居る。

と言ふことについてのべたのである。第三節は鼯鼠の營む巢についてのべたもの。即ち巢は石の下とか、或は木の根のある所とか、或は藪の下とかいふやうな安全な場所を選定して造り、而かも岡にあるやうにいざといふ場合には、どちらへでも逃げる事が出来るやうに、幾筋も掘つてあつて、本能的の所作とはいへ、いかにも巧妙に出來てゐることを記したのである。第四節は彼の常に求め食ふ所の食物即ち蚯蚓とそれを捜す彼の動作とについてのべたのである。即ち

1、蚯蚓は暖い時分は地面に近くすんでゐるから、彼も夏の頃は地下二三寸の所を掘つて歩くこと。

2、また蚯蚓は寒い時節になると、地面が凍るから深い所にすまつてゐる。故に彼も亦冬になると地下一・二尺の所を往來してゐること。

につき記したのである。第五節は鼯鼠の毛は細かく且柔かであるといふこと、即ち其の特殊の點を捉へて記したのである。第六節は鼯鼠の性質即ち外見はいかにもかう温順のやうに見えるが、併し其の實中々氣の荒い奴で、若し餌がなくなつて飢に迫ると同類相食むといふ残忍な行動にも及ぶといふことを記したのである。尙之を圖表的に示せば次の如くである。

- 第一節—鼯鼠の掘つた穴につき。
- 第二節—鼯鼠の生活と形態の關係につき。
- 第三節—鼯鼠の巢につき。
- 第四節—鼯鼠が蚯蚓を捜すことにつき。
- 第五節—鼯鼠の體毛につき。
- 第六節—鼯鼠の残忍性につき。

要するに本文は想定の上から見ても、記述の上から見ても中々よく出來てゐる文章である。併し強ひて缺點を言ふならば、思想の配列に於て稍々物足らぬ感じがする。即ち鼯鼠の巢について



の記述を中間に置いたがために、叙述の進行が中間できれて居る。これは是非最後に置くべきであつた。

### 區分

- 第一時 第一・二節(自三八頁九行至四十一頁一行)を授く。
- 第二時 第三節(自四十一頁二行至四十二頁一行)を授く。
- 第三時 第四・五・六節(自四十二頁二行至四十三頁三行)を授く。
- 第四時 全文の復習及び應用。

### 教具

殿鼠の標本又は繪畫。

### 教法

#### 第一時

- ▽第一・二節を授く。
  - 一、目的を指示し、各自をして第一節を自由に讀ませせる。
  - 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 語句

ムグラモチ モチ上ツテ ミ、ズ……等。

### 語法

- 庭ヤ、島ノ土 モチ上ツテ居ルコトガアル ミ、ズナド……等。
  - 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二・三回讀ませせる。
  - 四、内容につき問答する。
  - 五、一・二の兒童を指名して誦讀させる。
  - 〔注意〕 第二節も同様に取扱ふ。
  - 六、第一・二節を續けて讀ませせる。
  - 七、漢字の書取。
- 庭。 島 始終 暗イ土ノ中ニ住ンデキル 目・耳・鼻 聞分ケル 前足 強イ力  
土ヲ掘ル……等。

#### 第二時

▽第三節を授く。

第一時に準ずる。但し問答すべき語句等は次の如くである。

### (一) 語句

第十二 ムグラモチ



ス イザトイフ時 トンネル ヤブノ下 安全ナ場所……等。

(二) 語法

コレハムグラモチノスデアル ソノマハリニハ ドチラヘデモ 水ノアル所へ出ルニ  
モ……等。

(三) 書取

廣イ所 幾スデモ掘ツテアル 木ノ根 安全ナ場所……等。

第三時

▽第四・五・六節を授く。

第一時に準ずる。但し問答すべき語句等は次の如くである。

(一) 語句

暖イ時分 寒イ時分 コホルノデ 往來スル キハメテヤハラカイ 見カケヨリ  
ハ 氣ノアライ獸デ トモ食ヒ……等。

(二) 語法

寒イ時分ニハ地面ガコホルノデ、深イ所ニ居ル。  
寒イ時分ニハ深イ所ニ居ル。

夏ノ頃ハ地面ノ下二三寸ノ所ヲ掘ツテ歩クガ、冬ニナルト……。  
夏ノ頃ハ地面ノ下二三寸ノ所ヲ掘ツテ歩ク。冬ニナルト……。  
ソレチサガスタメニ 毛ハキハメテヤハラカイ 土ノ中ノ獸トハ思ハレナイ トモ食スルコトモアル……等。

(三) 書取

暖イ時分 地面 寒イ時分 深イ所 掘ツテ歩ク 往來スル 氣ノアライ獸

第四時

▽全文の復習及び應用。

- 一、各節毎に指名して讀ませる。
  - 二、主要の語句・語法等につき問答する。
  - 三、内容につき吟味する。
    - 1、各節につき其の要點を。
    - 2、全體につき其の要點を。
  - 四、思想表現の形式につき問答する。「文章」の部参照
  - 五、誦讀の練習。
- 指名して、また各自自由に。



六、話方の修練。

既に習得したる所を話させる。

(一)生活と形態の關係につき。

(二)奇習につき。

(三)巢の造り方につき。

七、家庭課題。

二次の問題をだし之を家庭でなさしめる。

(一)語句の適用(短文作爲)

モチ上ツテ

イタツテ

イザトイフ時

キハメテ

トハ思ハレナイ

トモ

食ヒ

(二次の點線をうづめてまとまつた文になさせる。

目ハ……カラ……。

(イ)ムケラモチノ耳ト鼻ハ……ドンナ……ドンナ……。

前足ハ……。

(ロ)ムケラモチノスハ……。

(ハ)ミ、ズハ 暖イ時分ハ……ダカラムケラモチハ……。

寒イ時分ハ……ダカラムケラモチハ……。

(ニ)ムケラモチノモハ……。  
(ホ)ムケラモチハ氣ノアライ歌デ……。

教授上の注意

一、鼯鼠といふ小動物は地上を嫌つて、生の始めから死の終まで地下にすまつてゐる奇異な奴である。本課は此の珍奇な奴の形態や習性を紹介しようと思つて特に選擇した教材である。だから本記述を通して、其の要求點を明確に把握させるといふことは、本課の教授上大切な注意である。

二、鼯鼠は各地に生息する普遍的な奴であるけれども、併し始終地下にすまつてゐるから、兒童の内の大多數は實際に之を見てゐない。だから教授の際には必ず標本若しくは繪畫を示して、感覺的背景のある明確な知識たらしめることを怠つてはならない。

三、本文は想定即ち取材の上からは、鼯鼠について讀者の感興をそゝるべき特異の點を捉へ、また叙述の上からは、簡潔で而かも感興的にかいてある。故に可能の範圍に於て是等の點を理會させるといふことも表現的能力を養ふ上に意義をもつことになる。

四、本文に於てその内容を吟味する際、

1、生活の境地と形態の機能との關係について、



2、巢を營む上に於ての巧妙な本能的作用について、  
は特に重きを置きたい。それは萬物が各々其の生を保持して行くについて、そこに周到な天意をさとらせるのに最も關係があるからである。

### 第十三 山内一豊の妻

#### 要旨

形式上では、新文字の読み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、一豊の妻が、父の教訓を堅く守つて、赤貧のうちにも父から與へられた黄金を貯へ置いて、夫の一大事の場合に初めて之を出して、その武士たるの面目を施した美しい内助的の事實を感味させ、傍ら勤儉や貞操の徳に對する道念を養ふを以て要旨とする。

#### 教材

##### 文字

「妻」——會意文字で、帚を持つ女といふ意である。漢音は「セイ」、吳音は「サイ」で、訓は「ツマ」「メアハス」等である。

「價」——會意形聲文字である。品物のネダンのことで、元は賈であつたが、後に人扁を加へて

價としたのである。漢音は「カ」、吳音は「ケ」で、訓は「アタヒ」である。

「箱」——形聲文字である。本義は大車の物を容れる處をいふ。轉じてハコの義となる。竹を用ひて造る所から竹冠を用ひ、相は音符である。漢音は「シャウ」、吳音は「サウ」で、訓は「ハコ」である。

「貧」——會意形聲文字である。財が分れて乏しい義である。故に分と貝とを合してつくる。漢音は「ヒン」で、訓は「マツシ」である。

「有」——形聲文字で、又と月との合字である。月の色のことである。故に月をかく。又は音符である。一説に又(手)に月(肉)を持つ意、即ち所有する義である。轉じてアルの義となるとある。漢音は「イウ」で、吳音は「ウ」で、訓は「アリ」「モツ」等である。

「良」——形聲文字で「富む」義でこれから善良の義が出て轉じて廣く物の勝れた義となる。音は「リヤウ」で、訓は「ヨシ」である。

「志」——會意形聲文字である。之と心との合字で、心のゆき向ふ義である。之はまた音符である。音は「シ」で、訓は「コ、ロザシ」等である。

#### 語句

「山内一豊」ヤマウチカクトヨ。尾張の人で山内盛豊の第二子である。年十三歳にして織田信長



に仕へ、豊臣秀吉に隸屬してゐた。天正六年祿五百石を食み、安土城下に居た。會々駿馬を鬻ぐものがあつた。併し價貴くて誰も購ふものがなかつた。一豊心に深く欲したけれども餘財がない。家に歸つて憂色があつた。妻怪んで其の故を問ひ、鏡匣から十金を出して與へ、夫をして其の馬を購はしめた。人以て美談とした。本課は即ちこのことをかいたのである。信長死してから秀吉に仕へ邑五萬石を食み、後に徳川家康に従うて土佐に封ぜられ二十四萬石を食んでゐた。慶長十年九月年六十で卒した。「織田信長の家來になつたばかりの頃」家來になつたのは天正六年の頃である。「なつたばかりの頃」は仕へはじめた頃の意。「よい馬を賣りに來た者がありました」よい馬は良馬即ち駿馬のこと。「賣りに來た者」は奥州から來た馬商人をいふ。當時安土は信長の城下で、名將・勇士が雲の如く集つてゐたから、商人は駿馬を曳いて此處に售りに來たのである。「誰一人」「誰一人として」の約。誰れもと言ふに同じ。「あのくらゐな馬」「あのくらゐのよい馬」の意。「ひとり言」獨言即ち相手なしに自分ひとりで物言ふこと。「金十兩」キンジフリヤウ。兩は昔の金貨を計へるときの單位で、分の四倍即ち十六銖の稱である。中々の大金で、今で言へば千圓とも言ふべき所であらう。「かどみ箱」鏡を入れて置く箱のこと。因にこの鏡は柄鏡と稱するもので、鎌倉時代に行はれたものである。黄銅製のものであらう。「どうした金か」「どうしたわけの金か」の意。金の出所をいぶかつてかく問うたのである。「大金」タイキン。多くの金をいふ。「こちらへ

参る時」「こちら」は山内家を指していふ。「参る時」は嫁いだときをいふ。「一大事」イチダイジ。或容易ならぬ事件の出來た場合をいふ。「馬揃へ」ウマゾロへ。昔、主將が折を見ては部下の將士をあつめて、それ等の乗馬を檢査したものである。今の丁度閱兵式のやうなものである。本文の馬揃は天正九年二月二十八日京都で催されたので、此の時一豊は三十六歳であつた。「御じまんの馬」「じまん」は己れ自ら好しとして誇ることをいふ。「お目にとまるやうに」目につくことで、ここでは氣に入るの意味をも含む。「日頃」ヒゴロ。かねてからの意。「よくもかういふ良い馬を買ひもとめた」「よく」は形容詞が副詞に轉じたもの。「も」は感動詞の一で、よくに添うて熟語の副詞を構成し、下の「かういふ良い馬を買ひもとめた」を限定したのである。「見上げた志の者」「上に見上げる程のたふとい志のもの」又は「感心なよい志のもの」といふ意味。

挿畫

一豊の妻が今鏡箱から出した黄金十兩を、夫一豊に渡してゐる所である。馬揃のあつたのは天正九年で、一豊三十六歳の時であるから、假りにこの事が一年前の出來事とせば、一豊は三十五歳で、妻は二十四歳である。尙注意すべきは當時に於ける風習で、男子は結髪で、女子は下髪である。衣服の袖も男女共に小さい。而して武士は居常でも紋のついた着物を着、また袴を穿つてゐた。女子の帯の狭い所も着目すべきである。



## 文章

本課は山内一豊の妻千代女の美談を叙述した對話式の文章である。

本文は時間的關係から分けて見ると二段になる。即ち第一段は一豊が馬を見て妻の力によつてそれを買つた所まで

で、第二段は其の後馬揃のあつたとき、一豊が右の馬に跨つて出て信長の賞詞を得た所までである。

## 第一段に於て

「見た人は皆ほしいと思ひましたが」——こゝに武士共がその名馬を或は縦に見、或は横に見、或は撫でなどして、羨望の垂涎が萬丈であつたことがよくあらはれて居る。

「一豊もほしい〜と思ひながら」——こゝに一豊がほしくて〜たまらない。しかし金がない、手を拱いて、首をたれて、寂しく家に歸つて來た風貌がよく見える。

「あゝ、金が無いから仕方がないが……あのくらゐな馬を持つて見たいものだ」——一豊が欲しい思ひを貧にあきらめようとしてもあきらめることが出来ない。どうかして、あの位の名馬を持つて見たいといふ猛烈な欲求の炎に我が全く焼かれてゐる所である。

「ひとり言をいひました」——この悲觀の獨語がやがて歡喜に變ずるとは、神ならぬ彼には分らない所である。

ない所である。

「その價はいか程でございます」——何と落付いた聲であるまいか。併し彼には若しもの場合には夫のために相當に盡し得る美しい準備があつたからでもあらう。

「金十兩」——いかにも腹立つた答振りである。蓋し此の時の一豊は深く失望に暮れ、その譯を貧の我が妻の間に委細語つた所でも何にもならない。あゝうるさい、黙つて引込んで居れと言ふ心持であつたかも知れない。

「妻はしばらく考へてゐましたが」——こゝにその賢い妻がその馬を購ふことが、果して夫の一大事であるかどうかをつくつく考へてゐる様子が目に見える。

「それだけのお金ならば、私が差上げます」——と此の霹靂の一聲に、一豊はうなだれた首を上げ、驚愕の眼を以て、妻の顔をじつと見詰めたであらう。

「これは又どうした金か……なぜ今まで話さなかつた」——こゝは喜んで叱るといふ所である。喜んで泣くといふ境地である。併し一豊の心中には尙疑問の雲が晴れやらぬから、まだ感謝する境地にまでなつてゐないのである。

「さやうでございます。これは……『夫の一大事に使へ。』……父が渡した金でございます……その良い馬にめして、御主人のお目にとまるやうになさいます。』——こゝは前後八年間父の訓誡を



確く守つて、幾多の困苦缺乏に打克つて、遂に夫の一大事に遇うて、その教訓を全うした夫人の堅忍と節操とがあらはれてゐる所である。而かも本課の要旨の充實する所である。

「一豊は妻に禮をのべて……」——丈夫が目に涙を湛へて心のどん底から感謝した所である。喜悅に輝く顔の色をも見なければならぬ。

次に第二段に於ては

「あゝ、良い馬、名馬々々。誰の馬か」——これは信長が一豊の馬を一見して叫けんだ賞美の聲である。併し此の聲の裏に駿馬が鬣を振つて高く嘶いた時、他の群馬を悉く畏縮せしめた境地をも想起せねばなるまい。

「日頃貧しい暮しをしてゐる一豊が……見上げた志の者、りつばな武士」——こゝは主君から此の賞詞を得たとき、一豊は無限の喜悅の熱涙をバラ／＼と落した所である。「見上げた者、りつばな武士」の句はこゝでは大切な句である。

其の他本文に於ては、夫妻の間に於ける言葉遣、主従の間に於ける言葉遣も如實によく表はれて居る。例へば

「あゝ、金が無いから仕方がないが……あのくらゐな馬を持つて見た」

「ものだ。」

「金十兩。」

夫としての言葉遣

「これはどうした金か……」

なぜ今まで話さなかつた。」

「その馬の價はいか程でございませうか。」

「それだけのお金ならば私が差上げます。」

「さやうでございませう。これが……」

人のお目にとまるやうになさませ。」

「あゝ、良い馬、名馬々々。誰の馬か。」

「日頃貧しい暮をしてゐる一豊が、よくもかういふ良い馬を買ひもとめた。見上げ」

た志の者、りつばな武士。」

主人としての言葉遣

妻としての言葉遣

「これは一豊の馬でございませう。」——家來としての言葉遣で、誠にふさはしくあらはれて居る。對話式の文章にあつては、かうした點もよく知り、またよく味つて行かなければならない。

區分



第一時 全文(語句の読み方意義に重きを置いて)を授く。

第二時 全文(内容上に重きを置いて)を授く。

第三時 全文の複習。

第四時 練習應用。

### 教具

挿畫を擴大した掛圖等。

### 教法

#### 第一時

▽全文(形式上に重きを置いて)を授く。

一、目的を指示し、各自をして自由に一讀させる。

二、第一節を指名して讀ましめる。而してこゝに於ける質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

三、全體をして自由に一讀させる。

〔注意〕 其の他も此の順序に基いて授けて行く。

四、讀み方の練習を行ふ。

各節毎に指名して。また各自をして自由に。

#### 第二時

▽全文(内容上に重きを置いて)を授く。

一、各節に指名して讀ましめる。

二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

三、内容の玩味を行ふ。

1、各節毎に。

2、全體の上から。

〔「文章」の部を参照して〕

四、誦讀の練習。

指名して、また各人自由に。

#### 第三時

▽全文の復習。

一、各節毎に自由に讀ませせて、そこに於ける質疑に應答する。またそこに於ける内容を玩味させる。

二、全文上から、



1、内容につき問答して(教師の鑑賞をも加へて)一層深く感味させる。

2、思想の表現上につき問答する。  
(イ)地の文と對話文の區別。  
(ロ)對話文に於ける言葉遣。  
(ハ)叙述の進行につき……等。

三、よく意味を味ひながら各人をして自由に一・二回讀まさせる。

第四時

▽練習應用。

一、全文を自由に一讀させ、忘れた語句等につき質疑に應答する。  
二、練習・應用。

(一)漢字書取。

妻。馬の價は金十兩。馬主。ひとり言。かみ箱。夫の前に差出す。貧しい暮  
大金が有る。馬揃。良い馬。名馬々々。見上げた志……等。

(二)語句の適用(短文作爲)

……持つて見たいものだ。ひとり言。うはさに聞くと。人の目にとまるやうに

見上げた志……等。

三、話方の修練。

一人は——地の文をよむ。  
一人は——一豊になつて、  
一人は——妻になつて、

教授上の注意

一、本課は山内一豊の妻千代女がよく内助の功を完うした事實を叙述したもので、言はゞ道徳的材料である。併し事實は悲哀から歡樂に入り、悉く感情化されて居る。故に内容は理解させるは勿論だがまた感味させることも大切な要件である。即ち批判的鑑賞的態度を以て讀むべき文章である。

二、かうした立場に立つて讀むには、換言せば讀まさせるには、一面に彼等をしてその對象に彼等の感情を移入させて、十分感味させると共に、又一面に於て妻千代女の行動を批判的に讀んで價値を認識して行くやうに取扱はなければならぬ。これが本文を取扱ふ上に於て苦心すべき大切な點である。

三、本文は言ふまでもなく地の文と對話文との二つから出來てゐて、二者の間には輕重即ち甲者



は軽く、乙者は重いといふ區別はあるけれども、一體地の文は其の文の始を起し、終を結び、また中間に於て對話を連絡する等、すべて事件の關係や統一を明かにする上に於て大切なものであるから其の考で取扱つて行く。

四、對話文に於て、言語の階級即ち夫妻・主従の階級に應じてその遣ふ言葉も異にしてゐるから、此の點は特に注意して知らしめる。また使用する言葉に於て、假令意味は同じくても、

- (ほしい)と思ひながら……………強
- (ほしい)と思ひながら……………弱
- (あ)、金が無いから仕方がないが……………強
- (あ)、金が無いから仕方がないが……………弱
- (あ)、よい馬、名馬々々……………強
- (あ)、名馬である……………弱

のやうに、そこに強弱があるから、かうした點を辨へさせることも無用でない。

五、本課は對話式の修練を行ふに餘程適した文章であるから、前記の如く役割を作つて特に修練させるがよい。

### 備考

#### 山内一豊の妻

近江淺井氏の家臣若宮喜助友興の女にして名を千代子といふ。幼にして伶俐、よく父母に事ふ。父母も亦之を愛し教訓具に至る。長じて益々賢名あり。十七歳にして一豊に嫁す。天正六年、一豊祿五百石を食みて安土城下に在るや、偶々奥羽より名馬を牽きて來るものあり。諸士買はんと欲すれども、其の價高くして辨すること能はず。夫人乃ち其の貯ふる所の黄金を出して之を一豊に買はしめ、一豊爲めに主人信長の意に適ひぬ。後慶長五年大阪の變起るや、妻學生の智囊をしばり、非常なる勇氣と決斷とを以て西軍の動靜を一豊に報じ、關西の狀況因りて始めて明なることを得、大に家康の感賞を蒙れり。一豊が終に土佐二十四萬石の大封を受くるに至りしは、主として妻の内助による。元和三年京都に歿す。年六十一。本文記載の事項は、新井白石の藩翰譜卷七の上に見えたるものにて、其の原文は左の如し。

昔、一豊織田家に出て仕へし初め、東國第一の名馬なりとて、安土に牽きて來て商ふる者あり。織田殿の家人等これを見るに誠は無雙の名馬なり。されども價餘りに貴くして買ふべき人一人も無く、空しく牽きて返らんとす。其の頃一豊は猪右衛門尉と申ししが、此の馬ほしと思へども求むること如何にも叶ふべからず。家に歸へりて、「世の中に身貧しき程口をしき事はなし。一豊仕への初めなり。斯かる馬に乗りて見参に入れたらんには、屋形の御感にも預るべきものを。」と獨言いひしに、妻はつくぐと聞いて、「その馬の價いかにかりにや。」と問ふ。「黄金十兩とこそいひつれ。」と答ふ。妻「さほどに思ひ給はんには、その馬もとめ給へ。價をば自らまぬらすべし。」と、鏡の宮の底より黄金十兩とり出しまぬらす。

一豊大に驚き、「この年頃身貧しく、苦しき事のみ多きうちには、この黄金ありとも知らせ給はず。いかに心強くは包み給ひけん。されども、今この馬得べしと思ひよらざりき。」と、且は悦び且は恨む。妻申すには「のたまふ所ことわりにこそ侍れ。さりながらこれは妾が父の此の家に参加し時に、この鏡の下に入れたまひて「あなかしこ。これ世の常のことに用ふべからず。汝が夫の一大事あらん時に参らせよ。」とて賜ひき。されば家貧しく苦しむなどいふ事は、世の常の習なり。それはいかにも堪へ忍びても過ぎなまし。此の度都にて馬揃へあるべしと聞ゆ。もし、さもあらんには、この事天下の見物なり。君また仕への初めなり。斯る時ならば、屋形にも傍輩にも見知られ給ふべき由もなし。善き馬めして見参に入れ給へと思へばこそ参らすれ。」といふ。一豊やがて其の馬をもとむ。



程なく都にて馬揃への有りし時、織田殿この馬御覽あつて、大に驚き給ひ、「あつげれ名馬や、何者の馬ぞ。」と仰せありしに、「これは東國第一の馬なりとて、商人の牽きて参りしに、餘りに價貴くして、誰も買ふこと叶はず。空しく牽きて歸るべかりしを、山内が買ひ得て候ひし。」と申す。信長きこしめし價貴き馬なり。當時天下に信長が家來ならて買ふべき人なしとて奥よりはるる來りしを、空しく返したらんには無念の至りなるべし。その山内は年頃久しき浪人と聞く。家もさぞ貧しからんに、買ひ得たる事の神妙さよ。且は信長が家の恥をもすき、且は武士のたしなみいと深し。」と感じ給ふこと大方ならず。これより次第に身を起しきといふ。誠にや。(潘翰譜)

## 第十四 さみだれ

### 要旨

形式上では難語句の意義、語法等に關する知識を授けて本文の讀解に習熟させ、内容上では五月雨の季節に於ける空の有様、人の心持、諸物の姿態等につき授けて、季節と世相の關係の一端を理解させるを以て要旨とする。

### 教材

#### 語句

「さみだれ」陰曆五月頃即ち陽曆六月頃ふるながあめをいふ。即ちつゆのことである。「しとく」靜かに雨のふるさまにいふ。「じめく」「しめく」ともいふ。物のしめりけのあるにいふ。副詞

であつて下の「心持が悪い」を限定して居る。「往來も田のやうになつた」こゝは往來も田のやうに水がたまつてゐるといふ意味である。「雲が低くたれて」灰色の雨雲が低くおりてゐての意で、梅雨の時に於ける空の様子が如實に言ひあらはしてある。「家々の煙が重さうに立ちのぼる」細雨が濛々と降つて、家々から立ちのぼる炊煙も重さうに見えるのをいふ。梅雨時に於ける炊煙の様子が如實に言ひあらはされて居る。「物置」物置小屋のこと。「しよんほり」として「副詞で、寂しくわびしささまにいふ。「かび」下等菌類の一種。獨立の生活を營むことが出来ないで、他の有機物に寄生し、その種類も多く、形狀も大小も色澤も相同じくない。従つて生殖の状態もまた一樣でない。梅雨の頃靴・衣服などに生ずるかびはアマガビといつて、其の色は緑色である。本體は菌絲から成り、その一部分の先端は帚狀をなし、多くの緑色の胞子を有して居る。而してこの胞子は軽くして容易に空中に飛散し易いから、到る處に發生し、また繁殖する。「黄ぼんで」黄色をおびての意。

### 文章

本文は梅雨の季節に於ける或時間の觀察を叙述したものと見てよからう。「さみだれがしとく」と降りつゞいてゐる。「五月雨が今日も明日も、毎日々々降り續いてその鬱陶敷き有様が劈頭の此の一句でもうあらはれて居る。



「たゞみも着物もじめくとして心持が悪い。」——梅雨季の特徴である。梅雨と人心とのかゝりやをいふとしてこれより外に取材はなからう。

「川や池の水も大そうふえたし、往來も田のやうになつた。」——川や池の水のふえることは事實である。併し「往來が田のやうになつた」はちよつと想像がつきにくい。すまないことだが適切な比喩とはいひがたい。

「雲が低くたれて、近くの森や林もはつきり見えない。家々の煙が重さうに立ちのぼる。」——灰色の雲が低くたれて、遠きは勿論近き森までもぼうつとして見える梅雨時の四方の景色が最もよくあらはれて居る。朝夕家々から立ちのぼる炊煙も、重さうに低くさまようてゐる有様も如實にあらはれて居る。

「にはとりは物置ののき下に集つて、しよんぼりしてゐる。うまやでは馬がしきりにゆかをける音がする。」——軒下の雞の集りはいかにも梅雨のつれづれさを思はせる。馬小屋の馬が床板をける音は梅雨時の静寂な田舎の境地を遺憾なく語つて居る。

「何にでもかびが生える。」——これが梅雨時の特徴である。取材上捉へなければならぬ事柄である。只「何にでも」を具體化したらよかつた。説明的になつたのは寫實上の缺點であらう。

「豆はいつの間にも芽をふいた。」——しめりつばい梅雨時が遺憾なくあらはれて居る。何と鋭

い着眼だらう。

「やぶの竹の子がすん／＼のびる。」——天上の雲も地上の諸物もみんなうなだれて生氣のなきとき、獨り竹の子だけが生々として日増にのびて行く所は、何ともいへぬ面白味がある。

本文の境遇は言ふまでもなく田舎である。而して作者は子供と見てよからう。即ち田舎の子供が梅雨季に自分の境地に於ける觀察を叙述したのである。取材に對する感官は馬小屋の馬が床板をける音の外は悉く目が働いて居る。而かもよく季節の特徴に向つて働いてゐる。注意すべき點である。

本文には總説もなく結收もない。即ち或時間に於ける觀察を首尾なく、叙述したのである。新しい形式に屬する文章だが、只印象の移り行きに不自然な所がちよ／＼とある。之は多少停止して想像が加つたからであらう。併し全體から見ても中々よく出來てゐる文章である。

## 區分

第一時 全文を授く。

第二時 練習・應用。

## 教法

第一時

第十四 さみだれ



▽全文を授く。

- 一、目的を指示し、各自をして自由に一讀させる。
- 二、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。  
さみだれ しとくと降り じめくとして 雲が低くたれて 家々の煙が重さうに  
物置ののき下 かび 黄ばんで……等。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。
- 四、内容につき問答する。
  - 1、梅雨季に於ける空模様。
  - 2、濛々たる四方の景色。
  - 3、生物の姿態。
  - 4、人々の心持……等。
- 五、讀み方の練習。  
各自自由に、また指名して。

文章を通して、

第二時

▽練習・應用。

- 一、各節毎に指名して讀ませせる。
  - 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
  - 三、内容につき問答する。  
教材の「文章」の所に記載した記事を参照して出来るだけ深く感味させる。
  - 四、朗讀の練習。  
各自自由に、また指名して。
  - 五、漢字書取。  
着物 心持が悪い 往來 低い雲 家々の煙 物置 芽をふく 梅の實  
枝から落ちる……等。
  - 六、語句の適用(短文作爲)  
しとくと じめくととして しよんぼり すんくと……等。
- 教授上の注意**
- 一、前既にいつた如く、本文は梅雨季に於ける天空の模様・地上の状態・生物の姿態等が誠によく描寫してある。是非現實と對照して如實に感味させたい。
  - 二、ところで、かうするときには梅雨季に之を授けるといふことが必要條件になる。教科書の配



材も丁度その時期に向ふべく出来てゐるやうだが、若しそこに何等かの事情があつて、さう出来なかつた場合には、前後して授けることにしたい。それに本課は幸ひ練習材料でもあるから前後することは毫も差支ない。

三、本文章の内には擬態的の言葉が多く用ひてある。

例へば

春雨の静かに降る有様を修飾するとして——しとくと、

着物などのしめつた有様を修飾するとして——じめくとして、

雞の寂しきわびしき姿を修飾するとして——しよんぼりと、

筍が一日々々にのびて行く有様を修飾するとして——すんく、

の如きはそれである。語法上又修辭上注意すべき點である。

### 第十五 日本紙と西洋紙

#### 要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では日本紙と西洋紙との對論を通して、二者の特徴及び用途につき知らしめるを以

て要旨とする。

#### 教材

文字

「洋」——形聲文字である。本は川の名。轉じて大海の義となる。羊は音符である。音は「ヤウ」である。

「僕」——會意形聲文字である。物を給するものの義で、公に仕へるを臣、家に仕へるを僕といふ。傍も「ボク」とよむ。傍だけの時は草木叢生して煩雜なる義になる。これからメシツカヒが家に於て雜役に服するの義となつたものである。傍の「ボク」はまた音符である。漢音は「ホク」、吳音は「ボク」で、訓は「シモベ」「メシツカヒ」等である。

「便」——會意文字である。本義は安んじ宜しくする義である。人は不便な所があると、直に之を更め直して安きに從ふものである。故に人と更（アラタム）とを合して其の義をあらはした。音は「ベン」「ピン」で、訓は「タヨリ」「オトヅレ」等である。

「利」——會意文字である。刀と和の省畫との合字で刀の鋭きを示す義である。すべて刃物は其の鍛鍊から砥にかけるまで、其の宜しきに協はなければ鋭利なるを得ない。故に刀と和とを合して作つたのである。音は「リ」で、訓は「トシ」「スルドシ」等である。







衣の一種で、衣の上に着る。桐油紙・綿布・毛織等で製する。「印紙」インシ。手数料・税金等を支拂つたことを證明するために、文書などに貼用する。政府之を發行して賣り下げる。「神タナ」家の内で神の護符などを祭つて置く棚。「御札」オフダ。札の敬語。札は守札の略。神社・佛閣から信者に與へて、身や家を守り、災難を避け、病を癒ふべき旨の文字を記したものである。「御幣」ゴヘイ。神に祈るに奉る物。又穢に用ひるものをもいふ。多くは麻・木綿若しくは紙などをつくる。「ぬさ」にきて「みてぐら」ともいふ。

文章

本課は日本紙と西洋紙とを人間化し、此の二者が互に各自の特質について、また用途について各々其のまされる所を主張し合つて居る議論文である。乾燥無味な説明的の記述を避けて、かうした形式をとつたことは讀者の好奇心に投合し、餘程緊張した態度で讀むことは言ふ迄もない。さてかうした議論文に於ては、その對者の缺點や短所を攻撃して、自分の美點や長所を主張するは共通の形式即ち特徴である。今本文についてその一例を求めて見るならば、

- (一) 君等ハ表ダケシカ役ニ立タナイガ……缺點  
 僕等ハ裏表トモニ使ハレル。便利  
 ニオイテハトテモカナフマイ。……美點

- イヤ、君等ハ破レ易クテ少シ  
 モ強ミトイフモノガナイ。……短所  
 (二) 日本紙ハヨリニシテ物ヲシバル  
 コトガ出來ル。元結ヤ水引ノヤウ  
 ナアンナ丈夫ナ物ハ、日本紙デナ  
 ケレバ出來ナイ。……長所

の如きは即ちこれである。

またかうした議論文に於て論者の態度は、初めはいづれも平靜で、お互が温和な口調でめいめの美點や長所について主張してゐるけれども、論争が次第に進むにつれて、互に目を慎らし肩を張つて、口調鋭く辯難し攻撃するは殆ど常である。

- ……使ハレルヤウニナツタカト思フ。  
 ……ウチハモヤハリサウダ。  
 ……トテモカナフマイ。  
 ……デナケレバ出來ナイ。

の如きは平靜な口調、温和な感情である。併し之が後に至ると、



といひ、遂には

……何デモナイコトダ。

……皆僕等の仲間ダゾ。

と言ふ如き、いかにも口調荒く、感情が極度に激して居る。

其の他本文に於て、二者の論争に於て、いづれが優つてゐて、いづれが劣つてゐるといふ結論が記述してない。一體この種の文に於て結論といふものは、第三者が下すべきもので、對者同志の間に無いのが當然である。故に茲では讀者其の人が第三者の地位に立つて、公平無私に評定を下さなければならぬ。

以上は本文を讀ませる上に注意すべき大切な諸點である。

### 區分

第一時 全文(形式上に重きを置いて)を授く。

第二時 全文(内容上に重きを置いて)を授く。

第三時 全文の復習及び應用。

### 教具

日本紙及び西洋紙の數種。日本紙及び西洋紙を用ひて製作した物品の數種。

### 教法

#### 第一時

▽全文を授く。

一、目的を指示し、各自をして自由に一讀させる。

二、次の如く問答する。

1、どんなことについて書いたのか。

2、西洋紙はどういひましたか。

3、それに對し日本紙は……。

4、勝負は。

三、尙書物について十分調べて行かうといつて、一節々々につき次の順序によつて授けて行く。

1、指名してその一節を讀ませせる。

2、文字・語句等に於ける彼等の質疑に應ずる。

3、教師よりも主要の語句・語法等につき問答する。

四、全文を續けて自由に一・二回讀ませせる。

#### 第二時

第十五 日本紙と西洋紙



▽全文を授く。

- 一、各節毎に指名して讀ましめ、そこに於ける彼等の質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。
- 二、よく意味を取りながら全文を自由に一・二回讀まさせる。(此の際劣等生を指導する)
- 三、内容を吟味する。
- 西洋紙の主張につき——之に對する日本紙の主張につき——之に對する 西洋紙の攻撃・主張につき——之に對する日本紙の辯難・主張につき……。
- 四、誦讀の練習を行ふ。
  - 1、西洋紙の言つた所をお讀みなさい。
  - 2、それに對し日本紙のいつた所を。
  - 3、それに對し西洋紙のいつた所を。
  - 4、それに對し日本紙のいつた所を……。
- 五、次の如く問答する。
  - 1、二者の議論に於ていづれが勝ちであらうか。
  - 2、それはどういふ譯で。

といふ風に問答して、各自をして評論させ、最後に教師の決定を語る。

第三時

▽全文の復習及び應用。

- 一、各自をして自由に一讀させる。
- 二、彼等の質疑に應答する。
- 三、内容の要點につき問答する。
- 四、本文に於ける記述の形式及び特徴等につき問答する。
- 五、書取。
 

日本紙	西洋紙	僕等ノ仲間	新聞紙	扇	便利	破レ易イ	元結	水引
合羽	葉書	切手	印紙	御札	御幣	等		
- 六、次の問に答へさせる。
  - 1、日本紙の質及び役立つことにつき。
  - 2、西洋紙の質及び役立つことにつき。

教授上の注意

一、本課に於ける要求は日本紙及び西洋紙の性質や用途につき知らしめるにある。故に本課は之



を面白く讀む内に、この要求をさとつて行くやうに取扱はなければならぬ。また形式上ではかうした文に於ける議論的叙述の形式及び感情・知力の流動等につきても知らしめることを忘れてはならない。

二、本課は初めから日本紙と西洋紙とに於ける性質や用途を知らしめようとしては面白くない。先づ初めは二者の議論を面白く而かも批判的に聽いて行き、次にさうした所に二者の役立つ點は、また性質上の相違はかうくであるといふ風に比較考察即ち審判する時に、其處に自づと性質や用途を自身に會得して行くやうに取扱はなければならぬ。之が本文に於て特に注意すべき點である。

三、併し審判といつても、截然と日本紙は西洋紙に優つてゐるとか、西洋紙は日本紙に優つてゐるとか、一定した結論に到着させなくてもよい。

甲者は西洋紙の方が優つてゐる。

乙者は日本紙の方が優つてゐる。

丙者は二者には各々缺點もあればまた美點もある。

といふやうに各々その思ふ所が違つてゐても、そこは各自の考察に一任した方がよい。そこが所謂創造的の營みである。併し子供も中々に伶俐であるから、

物には各々美點もあれば缺點もある。長所もあればまた短所もある。其の美點、その長所は其の物の優る點で、其の缺點、その短所は其の物の劣る點である。故に日本紙も西洋紙も其の美點、その長所に於ては各々優り、其の缺點、その短所に於ては各々劣る。といふ風に評定を下すであらう。此の評定こそ穩當で、従つて教師は之に對して満足の意志を表現してよいと思ふ。

四、本課は之を對話に仕組んで辯論の練習を行ふことも兒童を幸福にすると思ふ。また

目と耳 手と足 毛筆と鉛筆

といつたやうな文題の下に、本文から得た理解に基いて綴らせることも面白いと思ふ。

## 備考

### 西洋紙

西洋紙又は洋紙ともいふ。もと舶來品なれど、今は我が國にて盛んに製造せらる。その原料は楮・三椏・藻・蘆・雁皮・木材等にて、綿・古繩・麻・亞麻・紙屑等の纖維等をも使用する。その種類を大別すれば左の如し。

一、上等書記用紙—は綿・蘆等にてつくる。

二、新聞用紙及び包紙—は木材纖維其他種々の廢物にて製す。

三、ボール紙—は蘆にて製す。

其の製法は原料の種類によりて多少の相違あり。若し原料に蘆を多用するときは、先づ多量の蘆を消毒したる後、その中



より同種類のものを選擧す。この操作は紙の品位に影響するものにて、纖維の同じものを集むる法と、又、色によりて分つたとあり。いづれもこれに附着せる砂及び塵埃を除き、これを三寸位に切斷す。但し楮・三極などは、皮を剥ぎ、節を取除きて二尺五寸より三尺位に切斷し、葉ならばこれを三寸位に切斷して節の部分を除く。又木材ならばまづ之を剝木機械にかけたる後、削りて木屑となし節を去る。

さて、此等のものにて紙を製するには、これを大きな鐵釜に入れ、氈・三極等には苛性曹達、木材には亞硫酸・石灰の如きを加へ、熱き蒸氣を吹込みつゝ一定時間煎る時は原料はやばらつき纖維となる。これを洗滌器中に移し入れてよく洗滌し、更に粉砕器中に入れて細かく打砕く。(この器は木製槽にして、内面には溝を設けたる同轉軸あり。兩者の摩擦によりて纖維を細粉にする。)この纖維を適量の漂白粉溶液中に浸し置き漂したる後、再び洗滌器に移して薬液を洗ひ去り、なほ纖維をして一層細小ならしめんため、更に粉砕器に移し入れ、金屬板と同轉軸との間隔を狭小にし、細微に粉砕せる後、また洗滌器に送る。

さてこれに一種の粘液を混じたるを製紙の原料とす。この粘液は紙の種類によりて同一ならざれども、書記用の紙に用ふるは、普通松脂・礬土・澱粉・膠・樹脂・明礬を混じたる一種の粉なり。これを篩にて濾しつゝ洗滌器に送り、粉砕纖維と共に混合せしめ、白色乳汁様のものとなし、大なる桶の中に貯へ、器械にて絶えず攪拌し、紙の種類厚薄に應じて其の適量を桶の口より管に送り、細き針金製の網の上に流し、纖維と水とを分離せしめたる後、種々のロールに掛けて、或はその水分を搾り、或はその厚薄を一様ならしめ、或はその表面を滑澤ならしめ、或は加熱したるロールにて乾燥せしむる等、種々の操作を経て終に紙となる。

洋紙は、その始め、主としてその供給を輸入に仰ぎしが、近來印刷事業の盛大に赴くと共に、これが製造の有利なるを認め極上等の紙の外は、みな我國にて製造し、ひとり自國の需要をみたすのみならず、進んで支那及び朝鮮までも印刷用として盛んに輸出するに至れり。印刷局抄紙部(王子)、千壽製紙會社(福岡)、富士製紙會社(駿河)、王子製紙會社(王子)等にては機械力を用ひて大規模の製造に従事せり。(家庭百科事彙による)

## 第十六 郵便の話

### 要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では葉書・封書及び小包郵便等に關する規則を知らしめ、傍ら是等を認めるとき、また包みなどするときの心得をも知らしめるを以て要旨とする。

### 教材

#### 文字

「郵」——形聲文字である。文書布令を傳達する人馬を交替させるために設けた宿次である。故に邑をかく。垂は音符である。漢音は「イウ」、吳音は「ユ」で、訓は「シユクバ」である。

「配」——形聲文字である。本義は酒の色である。故に酉扁をかく。己は音符である。妃に假借して匹偶・匹對等の義とする。音は「ハイ」で、訓は「タグヒ」・「ツレアヒ」・「クバル」・「メアハス」等である。

「倍」——形聲文字である。本義は祿を増し加へるの義である。今は特に或數に之と同じき量を加へるの義に用ひる。傍は音符である。漢音は「ハイ」、吳音は「バイ」で、訓は「マス」等である。



「厘」——本義は市郵の郵と同義で、イチグラのことである。一説には釐の省畫だといふ。我が國では「リン」といひ、貨幣や尺度の一單位となす。漢音は「レン」、吳音は「デン」で、訓は「ミセ」である。しかし和義では「リン」といふ。

「局」——會意形聲文字で、尺と口の合字である。尺はモノサシで正しい意。口を尺の下に置くは言語を慎み少くする義である。これから限る、狭む等の意義が生じたのである。轉じて區畫・室・基盤面等の義となる。漢音は「キョク」、吳音は「ゴク」で、訓は「ツボネ」「カギリ」「シキル」等である。

「扱」——形聲文字で、收め取る義である。故に手扁をかく。及は音符である。音は「サフ」「キフ」等で、訓は「オサム」である。特訓が「アツカフ」である。

「宛」——形聲文字である。草葺小屋のことである。「宀冠」が其の義を示す。沓は「エン」でこれは音符である。漢音は「エン」で、吳音は「ラン」で、訓は「アタカモ」「サナガラ」等である。特訓は「アテ」である。

語句

「郵便」イウピン。公共の通信を取扱ふ業務。信書其他一定の物品を集配遞送するもので、現今の制度では遞信省の管理に屬する。通常郵便と小包郵便とある。別にまた電報・電話・爲替・貯

金をも取扱ふ。「集配人」郵便物を集めたり、配つたりする人夫をいふ。「一通」二つの手紙をいふ。「あやしみて」ふしぎに思つて。「切手」キツテ。こゝでは郵便切手をいふ。政府から發行するもので、郵税拂濟の證として郵便物に貼用する小紙片をいふ。五厘・一錢・一錢五厘・二錢・三錢・四錢・五錢・八錢・十錢・十五錢・二十錢・二十五錢・壹圓等の種類がある。「おあし」「あし」は錢の異名。世に通用すること足あつて行くが如き意味である。「おあし」はその敬語である。「倍」バイ。或數に對して其の數を二つ合した量の稱である。「小包郵便」コヅツミイウピン。一種の郵便。書狀及び郵便の禁制品を除く外、概して品物に制限なく包装して發送することが出来る。しかし容積等には制限がある。備考部參照。「宛名」アテナ。向ふの人即ち手紙を受取るべき人の名をいふ。

文章

本課は普通郵便及び小包郵便に關する規則の一斑とそれを認め又は包むときの心得などを親子の對話によつて知らしめようといふ作者の意志から出來た文章である。

先づ郵便配達夫が來て、母に一通の手紙を渡し、母はお金六錢をわたして受取つたことに、娘おはなが疑を起し、母に其の譯をきくと、母は茲に第一種即ち手紙に於ける重量の制限と郵税とにつき親切に話して教へたことになつて居る。次におはなが毎日兄の所に送る新聞紙と只今の手紙との上に郵税に相違することに氣がつき、更にその事につき母に聞くと、母はまゝ第三種即ち



定期刊行物に於ける規則の一斑を親切に話し聞かしたことになる。おはなは更にまた過去の事實即ち反物の包みにつき其の疑問とする所を聞いたに、母はまた親切に小包郵便の意義やその取扱について教へ、更に手紙を認めるときの心得につき言つて聞かせたことになつて居る。強ひてつけたりな所なく、親は親切に説き、子は眞面目に聞くといふ眞實味の溢れたよい文章である。

### 區分

第一時 第一段(自五十二頁八行)を授く。

第二時 第二段(自五十五頁七行)を授く。

第三時 全文の復習及び應用。

### 教具

手紙二三種 小包二三種 切手の數種

### 教法

#### 第一時

▽第一段を授く。

一、目的を指示し、各自をして自由に一讀させる。

二、彼等の質疑に答へ、また主要の語句・語法等につき問答する。

#### (一) 語句

郵便 集配人 一通 あやしみて 切手 おあし 不足 倍だけ 新聞

ざつし たゞの手紙……等。

#### (二) 語法

(受取らんとせしが、受取りしが、)

(それには三錢の切手はつてあるのに、それには三錢の切手がちやんとはつてあるのに、)

(おあしを上げるのです。おあしを上げるのですか。)

(重いのです。重いのです。)

三、讀み方を檢閲し、後各自をして自由に二・三回讀ませる。

四、内容につき問答する。

此の際手紙・新聞紙等に於けるその規定等を十分理會させる。

五、讀み方の練習。

指名して、また一齊的に。

六、漢字の書取。

郵便 集配人 一通 手紙を受取る 切手 不足の分の倍だけをはらふ 五厘



新聞紙……等。

第二時

▽第二段を授く。

第一時に準ずる。但し問答すべき語句等は次の如くである。

(一) 語句

小包郵便 郵便局 宛名 住所 手數……等。

(二) 語法

あんな物  
こんな物

受附ける  
受附けません

そんなことをすると  
こんなことをすると

(三) 漢字の書取

集配人 反物の包 小包郵便 郵便局 荷物を取扱ふ 受附けません 宛名

住所 手數……等。

第三時

▽全文の復習及び應用。

一、全文を自由に一回讀ませさせる。

二、主要の語句・語法等につき問答する。

三、内容につき問答する。

- 1、集配人とはどんな人か。
- 2、母は六錢をはらつて一通の手紙を受取つたのは。
- 3、手紙は何処までが三錢ですか。それ以上は。
- 4、不足したときはどんな割で不足金をとられるか。
- 5、新聞紙にはいくら切手をはるか。
- 6、雑誌や本は。
- 7、小包郵便といふのは。
- 8、どんなものは受附けないか。
- 9、手紙をかくときにはどんなことに注意しなければならないか……等。

四、誦讀の練習を行ふ。

五、文章につき次のことを問答する。

- 1、地の文と對話文とに於ける文體上の相違。
  - 2、少女の問ひの文と母の答の文との見分け。
- 六、次の點線をうづめて纏つた文にさせる。

1、手紙は四匁までは……四匁より少しも重いと……切手をはらなければならない。



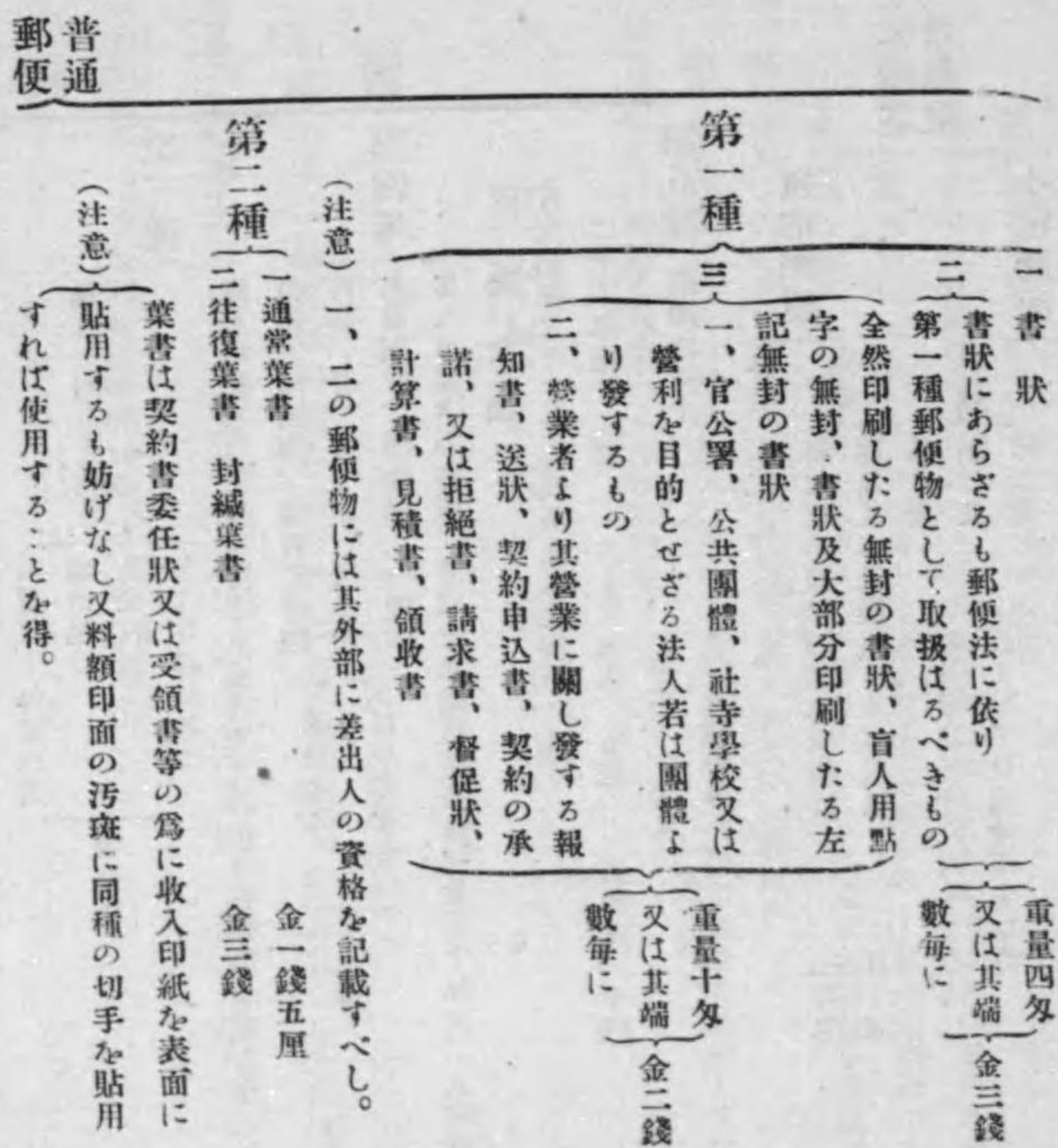
- 2、四角より重いの三錢しかはらなかつたならば……はらはなければならぬ。
- 3、新聞紙や、さつしや、本などは二十文までは……。

教授上の注意

- 一、本課は國民必須の知識たる郵便制度の一斑を知らしめようといふ考で選擇した文章であるから、母子の對話を通して、是非それ等に關する知識を明確に與へるやう注意せなければならぬ。
- 二、本文に於て地の文は文語體で、對話文は口語體でかいてある。故に此の二者の區別を知らしめ、また地の文を口語に譯する力をも附與してやる。尙また對話文に於て少女のは問の文で、母のは答の文であることも知らしめる。
- 三、本課の教授が終つたなら、普通郵便及び小包郵便につき、彼等の理解に願みて、本課の内容よりも一歩進めて補説することも必要だと思ふ。私共は特に一時を割いて話さうといふ豫定である。
- 四、本文の對話中には碎啄同時機といつたやうに母は愛兒に知らしめようとし、子は慈母に學ぼうとして、其處に雙方の心が一如に投合してゐる所があるから、さうした點は特に味はさせるがよい。

備考

左に郵便に於ける規則の一斑を示して補説の場合の參考に供して置かう。









## 語句

「始終」シジュウ。いつもかも。つねに。「物ノカゲ」樹のかげ、立てた棒のかげなどをいふ。「晝頃」ヒルゴロ。正午に近くの意。「良イ思附デス」「よい考へです」といふに同じ。

## 文章

本課は日の影によつて立樹の高さを測定する方法を知らしめようとして一兒童を假借し、此の兒童の創造的考察として記述したのである。壓制的に注的にかうだといつて説明するよりも、一兒童の創作、思索として紹介的に知らせることは、只に讀者即ち兒童の感興をそゝるだけでなく文章にも生々とした個性が動いてゐて中々よい。

「利三郎ノウチノ庭ノスミニ、高イ杉ノ木ガアル。利三郎ハドウカシテ、ハハ高サヲ知リタイト、始終考ヘテキタ。」——こゝに利三郎の研究心が動いてゐる。而かも一日や二日ではなく幾日も持続的に動いてゐるといふことは、創作者や思索家の心理の相を語つて居る。

「或日立三郎ハ、朝ハ物ノカゲガ大ヘンニ長イガダン／＼ニチマツテ、晝頃ニナルト、ソノ物ヨリモ短クナリ、ソレカラ又ダン／＼トノビテイクノニ氣ガツイタ。」——此の細かな注目やがて日影によつて立樹の高さを測定する基因となるのである。

「ソコデ一日ノ中ニ、物ノ高サトソノカゲノ長サガ、チャウド同ジニナル時ガアルニチガヒナイ

ト考ヘテ、次ノ日、庭ノマン中ニ一本ノボウヲ立テテ、朝カラ幾度トナクソノカゲノ長サヲハカツテ見タ。」——これが前の考察に對する實際的の試みである。此の試みは確實に成功するまでの中間に於て、幾度でも繰返す階梯的の仕事である。

「ソノ中ニ、思ツタ通りボウノ高サトカゲノ長サト同ジニナツタノデ、スグニ杉ノ木ノカゲヲハカツテ見タラ、二丈八尺五寸アツタ。」——先づ小さき假設によつて、その誤りなきを確かめ、次に其の方法を實物に適用して、遂にその樹の高さ二丈八尺五寸といふ結果を捉へたのである。此の時の測定者の心裏はどうであつたらう。満足の笑みの湛うた眼をもつて、其の樹の天邊から地上の根下までを一たび見下して、また見上げて、「此の樹の高さ二丈八尺五寸！ 我既に知つた」と叫んだであらう。こゝではこの愉快な境地を十分味はさせなければならぬ。

「ソレハ良イ思附デス。サウスレバドンナ物ノ高サデモ知ルコトガ出来マス。」——「ソレハ良イ思附デス」此の一句は小測定家の創造に對して與へた大なる賞賛の辭である。「サウスレバドンナ物ノ高サデモ云々」は汝の考へた其の方法はそれに類する他の物の高さはそれによつて悉く測知し得るといふ應用的の境地を開いてやつたものである。大切な章句として取扱はなければならぬ。

「物ノ高サトカゲノ長サガ同ジニナル時ハ、一日ノ中ニ、午前十午後ニ一度ヅツアルノデス。」



—これは日影によつて物の高さを計るといふ大切な法則に當る。故に適當にその理由を説明して此の法則の内容を明確に意識させなければならぬ。

本文の構想は次の如くである。

第一節——利三郎が常に杉の木の高さを知りたいと考へてゐたこと。

第二節——利三郎は日影によつて物の高さを測定する方法を考へ遂に杉の木の高さを測知したこと。

第三節——兄の感賞と影と物の長さに関する法則。

### 區分

第一時 全文を授く。

第二時 練習・應用。

### 教具

第一時

▽全文を授く。

一、目的を指示し、自由に一讀させる。

二、彼等の質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませせる。

四、内容につき吟味する。

利三郎が常に庭にある杉の木の高さを知らうと思つて考へてゐたこと。物の影が一日の中に於て長短あることに氣がついたこと。一日の中にその影が實物と同一の長さの場合あることを考へたこと。それを一本の棒によつて實驗したこと。遂に杉の樹の實際の長さを測定したこと。

兄が其の方法に裏書せしこと等につき十分吟味して、一面に其の方法を理解させると共に、またの一面に彼等の研究心を誘起する。(文章の部参照)

五、讀み方の練習。

各自をして自由に、また指名して。

第二時

▽練習・應用。

一、各節に指名して讀ませせる。

二、質疑に答へる。また主要の語句等につき問答する。

三、内容につき問答する。

1、日影と物の長短につき。



2、日影によつて立樹を測定する方法。

3、研究心の誘起……等。

四、誦讀の練習。

二三兒童に讀ませせる。

五、次の問に答へさせる。

1、利三郎が常に杉の木の高さを知りたいと考へてゐたことは本のどこにかいてあるか。讀んできかせてごらん。

2、利三郎が物の影は日の中に於て長短のあることに氣のついたことは。

3、利三郎は一日の中にいづれの時に、實物と同じ長さの場合のあることを考へ、それを一本の棒によつて實際に試みたことは。

4、遂に杉の高さを測定して二丈八尺五寸あるといふことが分つたことは。

5、兄が其の考に感心し、また高さ影とについて一日中に二回、實際と同じ場合があるといふことをいつて、利三郎の考をたしかにしたことは。

六、漢字の書取。

高イ杉 始終考ヘテキタ 晝頃 幾度トナクハカル 良イ思附デス 午前 午後

教授上の注意

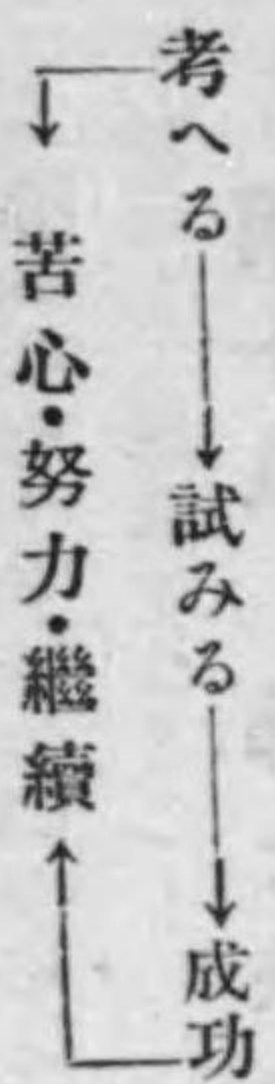
一、本課は日影によつて物の高さを測定する方法を理解させると共に兒童の研究心をそゝることもその要求であるから、其の考で取扱つて行かなければならない。

二、本文は弟即ち利三郎が杉の高さを測定せしことの記述と、兄が日影の長さと物の高さとの關係して言つたことの記述と、二段に分れてゐて、一寸考へると後段即ち兄の言は無くてもよいやうである。併し著者の考は「一日ノ中ニ於テ、物ノ高サトカゲノ長サト相同ジニナル時ガ、午前十午後トニ各々一度ヅツアル。」といふ法則を更に知得させて置かうといふ考から、特に此の記述法をとつたのである。故に此の意味に於て後段を取扱ふことが大切な注意である。

三、本課は授け終つた後に、其の得た法則を實證せんがために、校庭に於ける樹木、或は各自の庭に於ける樹木を、めいゝに測定させることも、賢い一方法に屬する。

四、本課は練習材料に屬するから可成彼等が自身で讀解するといふ所謂自學的主義の下に取扱つて行くがよい。

五、本課の内容を吟味するとき、すべて何事かを創作的に發明するときには





といふ階梯のものであるといふことも補説する所ありたい。

### 第十八 姉と妹の手紙

#### 要旨

形式上では新文字の読み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では相離れた姉と妹との間に流れて居る優しい美しい友愛の情を感味させ、傍らかうした手紙を認める形式等につき理解させるを以て要旨とする。

#### 教材

##### 文字

「清」——會意形聲文字である。水のすみて明かなる義である。青は音符である。漢音は「セイ」吳音は「シヤウ」で、訓は「キヨシ」である。

「違」——會意形聲文字である。背き離れる義である。故に韋(背く意)と「シンネウ」とを合して其の義を示す。音は「キ」で、訓は「タガフ」等である。

「昨」——形聲文字である。一晚を隔てた前日のことである。乍は音符である。漢音は「サク」で訓は「キノフ」である。

「停」——會意形聲文字である。行いて中途に止まる義である。亭は音符である。漢音は「テイ」吳音は「ヂヤウ」で、訓は「トドマル」等である。

##### 語句

「氣の毒」他人の心配又は困難などを思ひやつて、自分の心をいたますこと。「大そうよく出来てゐます」こゝは手紙の文句もよし、また文字も奇麗にかいてあるといふ意味にして知らせる。「見違へるやうに」見てあやまるほどに。「會」アフとよませる。「近い中」こゝではもう日數のないのをいふ。「さぞ」副詞で、「さだめて」の意。「お休になつたら」夏季休業を意味する。「お着きの時間」つく時刻をいふ。時間といふことは嚴密に言へば此の場合不適當である。こゝは習慣に従つて用ひたものと考へて書く。

##### 文章

姉よりの手紙

本文の内容は

- 1、近火に對すること。
- 2、手紙がよく出来てゐること。
- 3、書き方も立派に出来てゐること。



4、弟の發育に對する推量。

5、東京の暑さ。

6、歸省及び土産物のこと等。

につき敘述してある。而して妹が自分にくれた手紙のよく出來てゐること、及び中に封入してある書き方の上手にかいてあることをほめて、喜ぶ所は妹に對する友情がよく表はれて居る。もう夏の休業も近づいて、近々の内に妹はじめ家人のみんなに會ふことを楽しみにしてゐる云々は歸省するものの心情がよくあらはれてゐる。お土産につき妹の望みをきく所は本當に優しい心根を表現して居る。つまり本文は友情に満ち／＼した手紙といつてよい。文詞も妹を對象とし、妹自身に讀解し得る程度にかいた所は中々によい。強ひて不足を言ふならば、隣家が焼けて自分の家が火混雜をしたといふ非常事件と、手紙の出來榮をほめ、歸省を喜び、土産に對する望みをきくといふが如き平和の事件とを一緒に結びつけたことは餘り適切だとは思はれない。また程度上からは新文字のない所謂練習文にして欲しかった。

妹よりの手紙

本文の内容は

1、東京の暑さの推量。

2、歸國をまつこと。

3、土産に對する希望。

4、歸國の日時等の通知。

につゞ記してある。

「東京はさぞ暑いでせう。」——暑さに對する同情。

「お休になつたら、すぐに歸つて下さい。」——妹をまつ心の表現。

「おみやげには……おもしろいお話の本を買つて来てちやうだい。」——お土産に對する希望。

「お歸りの日がきまつたら……お着きの時間を知らせて下さい。」——この言葉の裏に相會ふ嬉しさを想はせる。

以上の諸點は殊に味ふべき點である。要するに本文は、簡潔な敘述の中に妹の喜悅の情が躍動してゐるよき文章である。

區分

第一時 姉よりの手紙を授く。

第二時 妹よりの手紙を授く。

第三時 二者の復習。



### 教法

#### 第一時

▽姉よりの手紙を授く。

- 一、目的を告げ、各自をして自由に一回讀ませる。
  - 二、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。
  - 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に二・三回讀ませる。
  - 四、内容につき吟味する。
- 前記教材の「文章」部参照。
- 五、讀み方の練習。
  - 六、漢字の書取。
- お手紙有りがたう おとなりのおうちが焼けたさうですね お氣の毒 お清書 見違へるだらう 東京は大へんな暑さです 近い中に會ふのを楽しみにしてゐます 何を買つて行きませう

#### 第二時

▽第一時に準じて授ける。

#### 第三時

- 一、各の手紙を指名して讀ませる。
- 二、主要の語句等につき問答する。
- 三、内容の要點につき問答する。
  - 1、姉の手紙につき。
  - 2、妹の手紙につき。
- 四、次のことにつき問答する。
  - 1、姉の手紙につき。
    - (イ) 妹から手紙をもらったお禮の言葉はどう書いてあるか。
    - (ロ) 仕事のことについては。
    - (ハ) 妹の手紙の出来榮や清書については。
    - (ニ) 幼い弟のことについては。
    - (ホ) 東京の暑さについては。
    - (ヘ) 夏休みのことについては。
    - (ト) お土産のことについては。
  - 2、妹の手紙につき。



(前に準じて問ひ而して答へさせる)

3、二者の手紙の認め方につき問答する。

五、誦讀の練習を行ふ。

教授上の注意

- 一、本文は言ふ迄もなく女性的の手簡である。故に其の用ひてある言葉も女性的である。注意すべき點である。
- 二、手紙の中にも知的のものと情的のものがある。本手紙はどつちかといへば乙者に屬する。故に二者の手紙の内に温く流れて居る友情を味はすことを忘れてはならない。
- 三、形式上宛名及び自己の氏名の認め方は普通の場合と異つてゐるから注意させる。また内容上かうした手紙に具備すべき條件につきても指導を忘れてはならない。
- 四、此の文の具備してゐる内容的條件及び形式に準じて各自の境地に適應したものを家庭課題として綴らさせることも無効なことではなからう。

第十九 楠木正行 (一)

第二十 同 上 (二)

要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方。難語句の意義。語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では忠孝兩つながら全うして、我が國の武士の典型たる小楠公の事蹟を授け、兼て忠君愛國の思念を養ふを以て要旨とする。

教材

文字

其の一

「防」——形聲文字で、隄防の義である。方は音符である。轉じてフセグの義となる。漢音は「ハウ」、吳音は「パウ」で、訓は「ツツミ」、「フセグ」等である。

「井」——象形文字である。キドの形に象つたのである。古文は「井」の中に點「・」(この點は釣瓶の形)をうつてあつたものである。漢音は「セイ」で、吳音は「シャウ」で、訓は「キド」である。

「汝」——形聲文字である。本義は河南省にある淮水の一支流である。女は音符である。漢音は



「ジヨ」吳音は「ニヨ」で、訓は「ナンヂ」である。

「難」形聲文字で、一種の鳥の名である。故に「フルトリ」をかく。艱に通じてナヤマ・クルシム等の義となつた。漢音は「ダン」、吳音は「ナン」で、訓は「カタシ」等である。

「孝」會意文字である。老の省畫と子の合字である。子が老人を負へる意で、よく親に仕へる義である。漢音は「カウ」である。

「首」象形文字である。上部の二劃は「カミ」であつてそれを去つたものは「カシラ」である。頭に髪の生えた形を象つたのである。頭の義である。轉じて首長・サキガケ・第一・ハジメ等の義となる。漢音は「シウ」、吳音は「シユ」で、訓は「カウベ」・「クビ」・「シルシ」・「ハジメ」等である。

「幼」會意形聲文字である。「イトケナキ」義である。偏は子供の初めて生れる時の貌、傍は力弱き義である。偏の「エウ」は音符である。漢音は「イウ」、吳音は「ユウ」、慣習音は「エウ」で訓は「イトケナシ」である。

「告」會意文字である。説文には、牛は角を以て人に觸れる。故に角に横木をつけ、以て人に觸れるを防ぎ、且人につげ知らせる義であるとある。音は「カウ」・「コク」で、訓は「ツグ」である。

其の二

「臣」指事文字である。君に仕へる人であるから、君前に屈服せる貌を象つたのである。漢音は「シン」で、訓は「ケライ」・「オミ」等である。

「壯」形聲文字である。勢力強健の義である。士(男兒)に其の義をもつ。偏は「シャウ」とよんで音符である。漢音は「サウ」、吳音は「シャウ」で、訓は「サカンナリ」等である。

「召」形聲文字で、刀と口との合字である。本義は長上が卑下の者を口でよびよすることである。故に口をかく。手でまねくを招とする刀は音符である。漢音は「テウ」、吳音は「ヂウ」、慣習音は「セウ」で、訓は「メス」等である。

「退」會意文字である。人のしりぞく義である。音は「タイ」で、訓は「シリヅク」である。「朕」未詳。古は一般に我の義に用ひたが、秦の始皇の廿六年以來特に天子の自稱として用ひるに至つた。漢音は「チン」である。

「能」會意文字である。熊の一種である。此の獸は多智で且強力であるから、賢能・ヨクス・アタフ等の義に用ひる。漢音は「ドウ」、吳音は「ノウ」で、訓は「ヨクス」・「アタフ」等である。

語句

其の一

「西國ノ大兵ヲヒキキテ、都ヲサシテ攻上レリ」足利尊氏は一旦九州に走つたが、此の地に至る



や菊池武敏等の官軍を敗り、九州を風靡し、遂に弟直義と共に大軍を率ゐて海陸二道から都をさして攻め上つたのである。「湊川」神戸市を貫流する川で、延元元年楠正成の戦死せし所。「櫻井驛」山崎から西宮に向ふ街道にあつて居る。當時楠公の家族は河内の觀心寺に預けられてあつたから、こゝが丁度其の別れ路に當つたのである。櫻井は今は三島郡島本に屬し、廣瀬(古の水無瀬)の西南に接する一小村である。併し今は古の驛路の面影はない。「千丈ノ谷」千丈もある深い谷をいふ。「タメス」役に立つか立たぬかを確める爲にしらべてみるをいふ。「ステニ」もう又はもはや「十歳ヲコエタリ」此の時正行は年十一歳であつたといふ。「味方」ミカタ。身方の義で、我に屬し敵との對戦に従事するものをいふ。「オボツカナシ」たしかでないこと。又は分明でないこと。「一門」イチモン。一家のものは同じ門内に住む義から取つて、一家族又は同性の一族をいふ。「コレニスキタルコトナシ」これより上はないの意味。「ネンゴロニサトシテ」誠の心をこめて、いふてきかせての意。「ハタシテ」物事の豫期の如くなるをいふ。即ち「思つたとほり」又は「言つたとほり」などの意である。「カナシサノ餘リ」悲しさが餘つてその極度に達し、我が心に忍びきれないのをいふ。「カナシサ」は形容詞の語根「カナシ」に接尾語「サ」が添つて名詞となつたものである。「ツト立チテ」「ツト」は急に身を動すさまを言ひ表はすときに用ひる詞である。「一問」太平記に持佛堂とある。家の中にて佛像を安置してある室であつたのであらう。「父ノ形見ノ刀」「形見」は

死んだ人又は遠く別れた人の、生存中又は昵近中のことを思ひ出される種となる遺物即ち記念品である。こゝに「形見の刀」とは櫻井驛の訣別の時に、正成から正行に與へられた菊作の寶刀をいふ。「ヨク／＼考へミヨ」とくと考へて見なさいの意。「ヨク／＼」は形容詞「ヨイ」の連用段「ヨク」を二つ重ねて副詞に轉用したものである。「賊亂逆をなすもの、又は不忠を企てるものをいふ。こゝでは主として足利尊氏兄弟を指していふ。「自ラ」ミヅカラ。自分自身で。「御言葉」父の教訓をいふ。「早くモ」口語の「モッハヤ」又は「ハヤモウ」の意。「御用ニ立ツベシトモオボエズ」「おや」に立たれようとおもはれないの意。「立ッ」は用ひられることである。「モ」は感動詞の一。

其の二

「正成戦死ノ後ハ」正成の戦死は延元元年(紀元一九九六年)五月二十九日で戦死せし場所は湊川である。「天皇ハ吉野山ノカリノ皇居ニウツリタマヘリ」「天皇」は後醍醐天皇をさし奉る。「吉野山」は大和國吉野郡にある。吉野朝廷の行宮を設けられた地で、遺跡が多くある。後醍醐帝が吉野の行宮に遷り給うたのは、延元元年の冬十二月である。「或年」吉野朝の正平(紀元二〇〇八年)三年である。「數萬ノ大兵」約六萬の大兵をいふ。「サイゴノ合戦」一生しをさめの戦をいふ。「臣」シン。君に仕へるもの。又君に對し臣下が自稱の代名詞として用ひる詞。こゝは即ちその義である。「朝敵」テウテキ。朝家に敵する者共をいふ。こゝで足利尊氏をさす。「壯年」サウネン。男盛



りの時(二十歳の頃から四十歳位までの間)をいふ。正行は此の時二十三であつた。「取ラスルカ」やるか・くれるか・えさせるかなどの意。「天顔」天子の御顔のことである。一に龍顔ともいふ。「天皇」こゝは第九十七代後村上天皇をさし奉る。「キコシメシ」聞くの敬語。「召シタマヒテ」呼びたまうて。「感ズルニ餘リアリ」誠に感心であるの意。「進ムモ退クモ時ヲ見テスベシ」「進むにも進むべき時をよく見て進み、みだりに死を急いではならない。又退くにも退くべき時をよく見て退いて、一身の安全を保てよ」との意。「頼ミニ思フゾ」「頼み」はたよりにの意。「ゾ」は強く事物を指定していふに用ひる助詞である。「ノタマヘリ」いふの敬語。いひたまふに同じ。「戰場ニ向ヒテ」こゝは四條畷をさす。「花々シク合戦シ」「花々シク」は立派に男らしくの意。「一門ノ人々トトモニ戦死ヲトゲタリ」戦死の様子は備考部参照。

挿畫

其の一 本挿畫は櫻井驛に於ける楠木父子の訣別の場合を想像して畫いたものである。正成の頭に被れるは引立烏帽子で、身につけるは鎧である。兩肩をおほへるは鎧袖で、腰に垂れてゐるものは草摺である。鎧に於て、胸部を胸板といひ、腹の部分をツルバシと言ひ、横胴を胴といふ。脛を被うてゐるものは脛當で、足に穿いてゐるものは頬貫である。鎧の上に見える着物は直垂及び直垂袴の一部分である。背に負へるは箆で、通例矢二十五本を差す。腰に帯べる刀の内、長いのは太刀で、短いのは刀である。

正行の上に着てゐるのは、細長で、襟は盤領である。袖には袖括がある。下に穿てるは奴袴といふものである。左手に持てるは父から授かつた菊作の短刀である。頭髮は禿といつて、童子の髪を短く切つて結ばないで亂して置くものである。

其の二 本圖は正平二年十二月二十七日、正行が吉野の行宮に參内して最後の御暇乞を申上げるところを想像して書いたのである。

御簾の中におはしますは、畏くも後村上天皇で、玉座近く束帯して端坐して居られるのは、四條中納言隆資卿で、階下に跪坐せるは楠木左衛門尉正行朝臣である。

四條中納言の頭にいたゞけるは冠で、其の高くてた所を巾子といひ、中に髪がはいるのである。後に長く垂れてゐるのは纓といふものである。而して身につけてゐる服は即ち袍といふもので、膝に下れる帯の如きものは平緒といふもので、後に長く引けるは裾である。又手にもつてゐるものは笏といふもので、其の長さ一尺六寸、幅三寸の板である。而して木製のもの、牙製のもの、とあつて、甲者は多くイチキといふ木でつくる。

文章

本文は二段から出来て居る。第一段は之を一課として、